

土佐の産みたる一代の偉人濱口雄幸氏は既に故人となりて土佐人物の凋落感を深からしめ今後土佐から總理大臣を出すことは到底不可能の事とせらるゝに至つたがこの偉人に對する崇拜者は實に民政黨支部の諸公のみではなく東西七郡を通じて濱口熱は少くとも百度以上の高潮に達してゐた、柳瀬氏も亦た濱口黨の一人であつて濱口氏の爲ならば敢て死を辭せずと云ふ意氣を示し大正十一年頃から民政黨支部の下級團體たる吾川同志會の總務として活躍し更に民政黨支部の遊說部長として東西に馳驅し濱口氏の爲めに萬丈の氣焰を吐いたものだ、氏は天性の雄辯家として態度重厚、其の音吐の朗々たる明快なる頭腦の持主たる事を一般に認識せしめ前途を囑望された、昭和四年には市會議員に當選し市參事會員として市政に參割してゐたが、今は大同生命の高知出張所長として納まり縦横の手腕を揮つて同生命の爲めに努力し異數の成績を擧げてゐる、今後の氏は胸中果して何物を藏してゐるか好漢自愛あれ

竹村謙三氏

縣下知名の一人に數へられた有名な故竹村吉太郎氏の次男で明治二十七年長岡郡介良村に生る、市立商業學校の出身で曾て高知貯蓄銀行に勤務してゐたが明治四十三年四國銀行に入つて早くも襄中

の錐のやうに鋭脱した、中村支店長を経て現在貸付課長として今日に至てをる、氏は温厚にして頭腦頗る明晰であり隨つて人向のするさわりの好い人格者で行内の課長級でも新進中堅人物として最も前途を囑されてをる

大石金重氏

株式會社野村組の會計主任である、氏は香美郡曉霞村の産、高等小學校を卒業後の大正五年野村組運送部の給仕として入社、堅實と温厚の性格が次第に上層部の信用を得る資本と爲り、昭和二年白洋ビルに本社を置くに及んで會計主任に就任し以て現在に至り御大野村ムツソリーの御覺へ頗る芽出たいと聞く、尙ほ株式會社三業組の監査役にも擧げられてゐる、年齒三十七歳、まだ〴〵これからと言ふところぢや、自愛自重して大に自奮自勵せんことを切望する。

松井襄氏

氏は大阪市北區伊勢町の出身、明治三十六年十月十九日生れと云ふから本年三十四歳。壯年醫學博士須崎昭和病院長として令名を馳せてゐるが左に氏の略歴を擧ぐれば

大正十一年四月大阪高等學校理科甲類入學、同十四年三月卒業、同年四月京大醫學部入學、昭和四年三月卒業、同四月京大醫學部副手囑託、同六月醫師免許狀を受く、同七月大阪北區北野病院囑託、同六年六月京大醫學部に入り内科學專攻、同九年三月京都市下京區朱雀寶藏町にて診療所開業、同年十一月學位論文通過醫學博士となる、同年十一月十六日高陵利用組合（組合區域は須崎町外二十四ヶ町村）昭和病院長就任今日に至る

松井博士は昭和病院長就任に際し「若し不幸にして豫期の成績を擧ぐるを得ず之の病院をして不名に終はらしむるが如き事あらんには宜しく海底の藻屑と成つて諸君に陳謝せんのみ」との決意と信念を披瀝したとの事である之の悲壯なる決意と信念の披瀝は即博士の責任感の如何に強大なるかを語るもので博士就任と共に同病院の前途は恰も光明に満ちたるかの如き感があつた過去七ヶ年間甚だ振はざりし同病院は博士の就任と共に果然院勢一變して益々隆昌に向ひ患者はいつも満員で松井院長の令名は嘖々として擧つてゐる

氏は資性濃厚篤實の好紳士で患者に接する頗る親切、職務に對して愈々忠實壯年有爲の博士として其の前途の多望なる一般から囑目されてゐる

武市源三郎氏

氏は明治十九年を以て長岡郡大篠村に生れ、大正三年四國銀行に入社するに至つて爾來各支店長を経て考査係主任となつて大いにその才幹を揮つてゐたが本年九月一日附を以て企劃係轉勤を命ぜられ今日に至つてゐる、資性濃厚で頗る圓滿を以て目され評判がよいので敵がない、それに氏の擔任が銀行經營の方針に當つて如何に改造發展に資する乎の重点にある特種のヘツトを持たなくては眞似の出来ない業務であるから他に比肩して行内でも重要な人物として幹部から重寶がられてゐる。

原 重 壽 氏

四國銀行須崎支店長として重きを成してをる、氏は香美郡佐古村の出身、赤岡銀行の給仕を振り出しに土佐銀行の行員から四國銀行へと順調に昇格し、或は北町支店長を勤め、或は本店詰と爲りなごして行くところ可ならざるなしの手腕力量を認められ、最高幹部の眼鏡で須崎支店長の要職をあてがはれたわけなのだ、性質至つて淡泊で行の内外から好かれてをる、須崎支店の成績が擧がるのは氏の人に好かるゝ性格の反映だと言つていゝだらふ、家庭も至極圓滿で長男寛十郎君は農林學校の五年、外に二男一女ある、趣味は多方面で狩獵、碁、釣、謡曲等々何んでも來いである、本年四

芝崎甚馬氏

氏は明治十七年九月をもつて幡多郡七郷村に生る、前高知縣警部保安課長、前高知縣地方警視高知警察署長の肩書は伊達に光つてをるのぢやない、現在は高知縣水産會主事として會長齋藤琢磨氏を補佐し、氏の女房役として遺憾なく立ち廻つてをる、由來警察官を長く勤めた者は他の社會へ出ても何處かにサーベル臭いところがあるが、氏は不思議に左様な臭氣がない、と云ふのは生れつき如才の無い頭の低い人物だからで、各方面會から好感を寄せて歓迎する所以が其處にあり、随つて各方面との交渉が頗る圓滑に好結果を奏するわけで蓋し水産會には必要缺ぐべからざる人物であるとは一般の定評だから朗らか／＼。

宮田管治氏

宮田管治氏は現に四國銀行保險部の主任として重きを爲してをる、明治十三年長岡郡岡豊村に生れ同三十二年明治法律學校に學びその後大阪北濱銀行京都支店に勤務することになり爾來十二年間に及んで、預金係長を経て大正三年四國銀行に轉勤するに至つた、そして本店詰から轉じて後免支店

長を振出しに各支店長を経て安藝支店長となつたが、氏の洒落恬淡無欲にして頗る社交にたけ人に接するに毫も隔壁を設けず、亦能く他人の言を容れる天賦の美質は一点の批難を耳に藉さず朗らかな好感で迎へられたが、昨年停年に達したる故を以て氏は茲に安藝支店長の椅子を最後に袂別勇退するに至つたのである、然るに同行最高幹部の胸底になる氏が多年に亘る行狀とその功勞を重寶視されて再び保險部主任として同行に在勤の椅子を興ふるに至つた、氏は趣味として書畫、謠曲を嗜み就中謠曲は三十年來の觀世流奧義を極め又虛子派の俳諧に長じて「木籠」と號し有名である

高本音五郎氏

高知市日の出町で日の出の勢ある高本音五郎氏は其の少年時代には裸一貫で水通町で屑物商をはじめめたが日露戰爭の時ばろい儲けをして爾來高知の屑物王となつた、職業に高下はない、絹物を商賣にする者も、屑物を商賣にする者も全然同等で要は正直にして堅實に儲けるものが勝利者である、紙屑營業でも呉服屋營業でも損をして破産するやうになると此の世の敗北者である、高本氏は讃岐の觀音寺町に生れ幼少の頃、高知へ來たものだが青年時代に屑物に着眼した其の眼光は全く偉い、

水通町から現在の日の出町へ移つたのは今から三十余年前のことで氏が二十百の時代であつた、裸一貫から巨萬の富を積んで日の出町の町總代となり、市會議員にも擧げられ高知の實業家として大に持てはやさるゝ氏の現在こそ立派な成功でなくて何んであらふ、氏の如き力の人こそ我等が尊敬の標的である。大に自愛して貰いたい。

瀧本精一氏

氏は高知生魚株式會社々長瀧本鯉三郎氏の第二世である、市立商業學校を卒業して鈴木商會神戸本店に入り發電所、工作所に勤務、後高知商業銀行に轉じ大正十二年生魚株式會社に入り冷蔵部長として持つ生れた手腕を發揮し好評を博してをる、氏は福澤諭吉翁の如く自尊心が強く、そして機械の研究に天性の嗜好を有してをる、苟くもやり出したが最後トコトンまでやると云ふ意志強固な人物で優に嚴父の後が取れると言はれてをる、趣味は釣と圍碁、本年三十八歳の少壯實業家だから、之れからが活動の天地に移る多望の前途を有して居る、氏の如き堅實の人材を得てゐる生魚會社こそ大に意を強くして可なりである。

岡崎正枝氏

或る支店の奥深く衝立の陰に潜んで眼鏡越しに帳面と首り乍ら一日中働いて袍を握つて出て行く紳士を見た、それは四國銀行の検査役岡崎正枝氏の姿だつた、氏は明治十七年を以て土佐郡上倉村の出生にかゝり嘗ては高知地方裁判所書記に奉職して、民刑事務の擔任に携はる傍ら遠大の志抱に滿ち頻りに余暇ある毎に法學の研鑽にいそしんだがその後何を感じてか方向を換へ、土佐銀行に入つて検査課に格勤すること多年に及びのち大藏省屬に任官されたが、昭和六年歸省して四國銀行に入り重役直屬の検査役となつて現に同行の検査課に納まつてゐる、

氏は頭腦明晰で就中専門的業務に携はつてゐる關係上事務方面には如上の事實がその資力を物語つてをるが、多年官界の經歷に富んでをるせいであらう官臭味が去らない嫌があつて人々の頭裡深く印象づけられたものだ、近時多少異變を生じ優さしむと温情味を持つに至つたといふは要するに實社會の仕事の上に叩きつけら修養の顯れに外ならぬ。好漢自愛せよ。

長尾忠觀氏

氏の先代迄は香美郡夜須村に居住してゐたが明治十九年に一家擧つて高知市に移つたもので嚴父黒

岩魯氏は教育家として知られ、帶屋町一丁目で學校を開いて居つた事もある。氏は明治二十四年生れと云ふから本年四十六歳の働き盛り青年時代に大阪工業學校及び長野縣蘆葉學校を卒業して官界生活六ヶ年退職後は實業家を以つて立つべく決心し日本將來の國是は工業立國たるべきを思ひベルトの取次販賣を始めたが四國に於けるベルト販賣の始祖である、氏は其後研究を重ねたる結果商品の取次販賣はダメだと云ふ事を痛感して自家製造を思ひ立ち現在では自分で大阪に工場を置きベルトの製作を成し營林局、各官衙を初め大工場方面の指定品と成つて居る。

氏は更に機械工業の益々必要なるに迫まれ挺身努力、十年前に合資會社を組織し其代表者となつたが規模を大にし設備を完全にせば縣外から購入しつゝある機械類が手近の高知市内で間に合ふ事と成り頗る便利であると云ふ事を痛感し五年前に資本金十萬圓を以て株式會社を組織し其社長となつた、氏は更に進んで全國の消防組が内務省令により公設と成りしを以て消防報國の念を堅め主力を消防界に轉じたが消防ポンプ及附屬器具を整備して居る事は恐らく全國無比と云ふてもよい位で多々益々消防界の爲めに努力し實績を擧げて居る、斯様の次第で消防器具に於ても亦機械工具に於ても今や縣下に於けるナンバーワンたる理由は總てが優秀品であるのと得意先が一流處であるが爲めであつて販賣上自然に嚴格主義を取るに至り店のスローガンとして誠意、徹底、機敏の三項目を

掲げ之を實行してゐる

氏は過去に於ては酒も飲み普通商人の型を以て進んでゐたが靜かに反省して今はクリスチャンとなり誠心誠意自己の職業に精進しつゝある結果其信仰が事業にも反映して一層の信用を高めてゐる趣味としては外海で鯛、鯉などの釣と狩獵及ドライバーである。

横 矢 順 介 氏

氏は高岡郡戸波村の出身で須崎町の住人である、二ヶ年間の小學教員を振り出しに、須崎實業界の有力者浦岡秀吉氏の令嬢を娶りたる關係から浦岡合名會社に入り、これより實業界に敏腕を揮ふことになり、錦浦巡航株式會社を創立して取締役兼支配役となり、大正八年機船底曳網漁業を開始、昭和十年二月須崎町漁業組合長に推薦さる、當時組合長選挙は土居茂樹氏が満期となり土居派と堀部派の二派に分れ未曾有の大紛擾を起し組合總代会を開くこと十二回、總會を開くこと四回に及び前後四ヶ月に亘り幾多の調停者現はれしも徒勞以外の何物でもなかつたが、其の揚句終に滿場一致を以て第三者の立場にある氏を推舉することになり氏は再三固辭したけれど無理に其の椅子をあてがはれて就任したが、氏の就任と共に大風一過組合は至極圓滿となつた、氏は就任以來魚揚場の改

修産業組合實施の計劃、他町村及び縣外船吸集策などに馬力を掛けてをるが、近時魚揚高が著しく増額したことは全く氏の努力の然らしむる處である、氏は須崎信用組合理事、裁判所調停委員、前町會議員であり、教育家の出身に似合はしく温厚篤實の徳望家で手腕亦た之に伴ふてをるから大に其の將來に囑望されてをる。

武正徳夫氏

祖父修吉氏嚴父勇氏共醫師であつたが徳夫氏は三代目の醫師として令名あり郡部に置くのは惜しい人物である大正四年千葉醫科大學卒業後同校附屬病院にて研鑽を積み大正十年須崎町で開業今日に至つて居る。

昭和九年三月高岡郡醫師會長となり縣醫師會議員を兼ね須崎尋常小學校校醫をやつてゐるが資性温厚篤實にして圓滿、患者に接する事が頗る親切で一般から「先生」と云つて敬愛されてゐる、諸曲は氏の得意とする處で又た仲々の友人であるとのことだ。

令兄一氏は大正四年東大卒業後同大學にて内科研究其後山梨縣立病院長となり二ヶ年程在職、次いで漢口同仁會病院長となり今日に至つて居るが其間一ヶ年間歐米各國に留學を命ぜられ専心研究、

同地に於ける刀圭界のオトリチーとして其名が高い

令弟敏夫氏は大正八年東大工科卒業逡信省管船局に技師として奉職、高等三等の地位を贏ち得前途尙多望なりとの事だ。

岡林信衛氏

氏は明治十三年を以て香美郡田村に生る、尋常中學海南學校の出身にして日露戰役に従軍出征して奏功あり胸間を飾りに輝やかしい功七級勳七等の所持者である、明治四十年四國銀行に入社しその後各支店を経て現に用度課長の椅子に据つてをる、氏は天性卒直にして忠實に立働くことを何よりも天職と心得た勤勉家であり行内に於ける評判がよろしいので、既に昨年を以て停年制に達したが尙且つその職に留まることは奈何に氏が事務的忠實たることを裏書すると共に、最高幹部の胸底に重寶がられた所以であると謂はざるを得ないのである。

西内龜太郎氏

立志成功傳中の模範的人物である、氏は須崎町糺町の産、家は代々の大工職、氏は九歳の時父に死

別し赤貧の中に弟妹三人を養育しつゝ、徴兵検査を終るや獨立して些細な米屋を古市町に始め、朝は三時に起き夜は十時まで働き、晴天の日は在所からの客を相手に商賣し、雨の日は津野山方面から越知方面に日返りの注文取りに出掛け往復十八里の道を徒歩し、艱難汝を玉にして漸次商賣を擴張し米以外鹽、人造肥料の販賣から帆船の建造から廻漕業にまで發展し四十三年間の奮闘努力が積り積つて今日の大成功となつたのである、氏は二十二年間町會議員に擧げられるし、又た信用組合を設立して其の理事に擧げられるし、須崎起業株式會社の社長に擧げられるし、昭和病院を創立せしめて其の理事に擧げられるし、凡そ須崎の事業界で氏の關係せぬものは殆んど無いと言つてもよい程で如何に其の人望の盛んなるかを知らることが出来る。

氏は大の子福長者で長男一郎君は神戸高商卒業後、大阪鐵工所に三年間勤め現在は家業を切り廻してをる、次男國次郎君は京都帝大法科出身、現在須崎郵便局長を勤め、三男巖君は帝大醫科出身、現在大連病院に在勤、四男五郎君は高知工業を出て神戸製鋼所に勤務、五男大六君は帝大醫科の三年在學中、六男龜君は城東中學を卒業し健康關係で家庭に在り、七男平八郎君は早稻田大學在學中で年齢二十歳、体重二十一貫五百匁、身長六尺豊かの堂々たる偉丈夫だから東京相撲協會役員代議士哈中楠右衛門氏へ代議士田村實氏を通じて申込んだが結果國技館角力協會に入ることになつた、

そして酒井伯、淺野侯、柳澤伯等の推薦で伊勢の濱部屋に入り、早稻田へ通學しつゝ、角道に精勵し將來横綱の折紙を附けられてをる、長女ハル子さんは縣立第一校女の三年生、氏の趣味魚釣りと承はる

金澤清氏

幡多郡中筋村の産で明治十八年を以て生れ城東中學校の出身にかゝり、明治四十四年四國銀行に入社す、爾來その後各支店長を経て保管課長となり現在に及んでをる、資性濃厚篤實にして然も物事にコピツカぬ沈勇剛膽なる美質の持主であり、曾て同行が高知銀行と稱せられてゐた時代、氏は度々大阪に派遣を命ぜられ巨萬の行囊は殆ど氏の手によつて運搬せられたといふ一事に徴しても充分その人と成りが窺知せられる。

氏の趣味は圍碁、將棋、釣魚の類であるが近時専ら釣魚を嗜み斯界に玄人の稱がある。

馬淵重動氏

高岡郡須崎町長として多年令名を博してをる、明治廿七年師範學校を卒業し縣下教育界の新進とし

て謂ゆる馬淵時代をつくつたこともあり、それだけ教育界に貢献してゐる、昭和三年友人の懇請により須崎町長に就任、時恰かも中島前市長の断行した上水道設置から十八万圓の町債を生じ町長のやりてがなく、町會議員は二派に分れて辭職騒ぎをしたり、町民大會を起して各所に演説會を催すなど町を擧げて鬭争の渦中に捲き込まれた際であつたから氏の苦境亦た察すべきであるが、併し氏は至公至平の立場を堅持しドシ／＼自己の信念を町政の上に實行したので町民は次第に信頼を増し問題の上水道も六千圓の純益を見るに至り、匡救事業の鳥越線、省線窪川線の促進、商工都市の計畫、工業會社の誘致、多ノ郷新莊の合併計畫、製材工場の發展策等々着々として幾多の事績を擧げ名町長の名を博したが就中、高知市より一足お先きに重要港湾指定運動に乗り出したなど眼識の好きを示して餘りがある、須崎は縣下の難治町で宮地正淳氏三年、中島和三氏二年、土居晴見氏十ヶ月で退職したが、氏は二期重任だから偉い、趣味は讀書、一度縣會へ出してみたい、そして議長にして見たい、名議長は動かぬところだ。

門脇金治氏

明治二十二年長岡郡長岡村に生る、氏は壯年の頃私塾に學び英、漢、數學、簿記などを修熟し茲に

一廉の素養が出来て明治四十五年四國銀行に入り爾來勤続宇和島支長を経て現に調査課長となつてゐる、頭腦明晰で勤勉努力家を以て目され常に新機の抱負による向上心に富んでをり、それに口八丁手八丁と來てをるから調査の樞要にある貫祿は十分に備はつてをり批難のない完人であることを朗かに看取し將來は重要な地位に置かるゝ人物であるのを價值づけられる。

徳岡鶴次氏

長岡郡天坪村繁藤の郵便局長として長い間令名を博して來た珍らしい立志傳中の人物である、生地は香美郡佐古村の逆川で、少年時代に繁藤へ移住し、月三圓の郵便集配人を振り出しに、村の豪族朝倉端一氏の局長時代に事務員に昇格して十八年間勤続し、朝倉氏の死するや、明治四十四年から昭和十年まで其の後を繼承して局長となつたのである、學歷と言へば昔の小學校を縁に卒業もしてゐない程度のものだが、若い時分から困苦乏缺に耐へて獨學自修し、集配人から局長となつた向上振りを見たゞけた何如にその人物の堅實にして勤勉なるかを知ることが出来る、現在は長男の昇氏（農學校出身）が局長の事務を執つてをる、二男の裕美氏は東北帝大の醫學士で一昨年卒業、目下岩手縣の岩井病院に勤めてをり、令嬢喜子サンは縣師範の出身で本山町に奉職してをる。

赤瀬清氏

千代田生命と云へば五大保險會社中の權威として知られて異數の發展振りを示してゐるが同社高知會所々長として不斷の努力と其敏腕を揮ひつゝあるは香美郡在所村出身の赤瀬清氏である明治三十二年五月二十八日生れと云ふから本年三十八歳、其の親しむべき溫容と堂々たる風彩は一見セントルマンとして敬意と信頼を拂ふに足るものがある、蓋し好個の所長として千代田生命の爲めに祝福せざるを得ない

氏が同社に入社したのは昭和四年一月であるが氏の活動と敏腕は聽て其成績の上に現はれて千代田生命の名が縣下の保險界に如何に重さを爲しつゝあるかは争はれない事實である

同會社の一大特色とする處は契約者本位の相互組織であつて契約者即ち社員であるから會社の剩餘金(株式會社で言ふ利益金)は總ての契約者に配當せらるゝ關係上普通の株式組織による保險會社とは大に其趣を異にし正味の掛金が非常に低廉で濟む譯で契約者に取りては大なる利益である川崎幾三郎氏が二十万圓の契約を成し其他五万圓以上の契約者が多數あるに見ても如何に契約者に有利で而も亦た堅實なるか窺はれる

山崎猛氏

本縣に於ける昨年四月現在の總契約高が十三億六千餘万圓であつたのが本年九月には一躍十六億五千餘万圓に達して居る状態に照しても同社の一躍躍進振りを想像することが出来よう要するに非營利主義と堅實主義と契約者本位をモットーとして立てる千代田生命は我等の理想的眞命保險として推奨するを憚らない

高知の青年實業家として將來を囑望せらるゝ其の筆頭格に指を折らるゝのが高知市堺町の酒類販賣業山崎猛氏その人ある、明治三十二年生だから青年實業家たることにおいて間違がない、氏は有名なる山崎斌氏の長男で高等小學在學中適々鈴木商店全盛時代に優秀なる小學生を募集するや、秀才たる氏は之に應募し將に上神せんとせし際、時の市商校長横山又吉氏より學問の必要を説得せられて市商に入り勉學中、偶々財界の大好況時代を迎へたので氏は斷然學業を廢し商業界に突進せんとしたが、又々横山校長に口説かれ鈴木の子直吉氏が世話をするからとの好條件で鈴木商店入りを勧告せられたかなれど氏はそれをも固辭して櫻木酒店に入り二ヶ年の經驗を積み十九歳にして目的の酒店を堺町に開業し、牡丹燒酎、大關、世界一統、若島その他の有名酒を特約して花々しく販路

の擴張戦線に乗り出し頭腦の明敏と、意思の鞏固と、勇氣と商才との四拍子を揃へた結果同業酒類問屋中の第一人者として益々盛運に駕してをるところ實に痛快だ、氏の如きこそ眞に獨立獨行の青年實業家として畏敬に値する。

高島義則氏

「犬の研究家」として世に定評あり、曾て昭和九年高知放送局での日本犬に就いての放送を試み且又自己が飼育にかゝる土佐犬は過般高松宮殿下御來縣の砌りかしこくも台覽の光榮に浴し、その後齋藤實子爵閣下來縣に際しては縣の依頼を受けて御前に於て約三十分間に亘る土佐犬の説明を重ねがさね身にあまる恩澤を蒙つた高島義則氏は現に四國銀行庶務課長として勤務する一介の銀行員に過ぎない、氏は明治二十三年長岡郡豊岡村に生れ第二中學校に學び明治四十二年高知銀行に入つたが兵役に徴され入隊のため一時退社し退營後再び大正二年四國銀行に入社勤務することになった、爾來徳島、大阪の各支店に派遣されて縣外に留ること約九年の久しきに涉りその間曾て大阪に在るや京都の書道家山本義重氏に仕へ書法を究めた頗る堪能家である、大正十四年十月後免支店長となり次で中村支店長を経て本店爲替課長より庶務課長に命ぜられ今日に至つてを、

氏は直情徑行の持主で事務には練達堪能を以て目され、就中土佐犬の研究は之を久くして純粹を誇る土佐犬を失ふを憂ひ土佐犬保存會を創立するや昭和六年春に至り斯界の權威者たる農學博士板垣四郎、理學博士楠木外岐雄、齋藤弘の諸氏が設立になる日本犬保存會と合流し知名の士と交りを得て今や四國の高嶋といへばその名聲を津々浦々にまで轟はれ頃目これが研究家たる幾多の諸名流の來訪を受け多々益々辯ずる所ありといふ、好漢自愛せよ。

佐藤清藏氏

明治二十一年を以て紺屋町に生れ私立商業學校に學び俊才の譽れ高く同校卒業後、明治四十三年四國銀行に入社爾來幡多中村支店長を振り出しに各支店を経て本店詰となり、現在計算課長として樞要な地位にある傍ら保管課長代理を兼務してをる、事務的才幹がすば抜けており資性濃厚卒直にして就中計數的に卓越した頭腦は行内に於て重きをなし、一入敬神家と知つて氏の品性に一段の磨きをかけてゐることを看取する

西岡寅四郎氏

氏は西岡里吉氏の令兄で嚴父寅太郎氏の立志成功譚は別項にある通りで、氏は二十三歳の時、吾川

郡下八川村の雜貨及び製紙原料店をば嚴父に一任し、自らは伊野町に進出して酒造業を開始し傍ら製紙原料商を營むことになつた、時に大正二年であつた、氏の吟造にかゝる銘酒は土佐泉、大國正宗、福杉などで毎年六七百石を造り、製紙原料は楮、三椏を縣内の山村より購入し主としてソレを縣外に販賣してをるが、特に政府の指定で印刷局其他刑務所へ製紙原料を納入することになつてをるが之は氏の信用を裏書するものである、氏は數ゆる兄弟中第一の苦勞人として事業にのみ熱中し活躍を續けてるので、氏の豊富なる財力と、堅實なる營業方針は多々益々辯するの勢で斯界の大成功者として衆人美望の的となつてゐる、氏は人格極めて圓滿、伊野町々會議員、伊野食料株式會社取締役、消防奉仕講習議員として徳望の隆々たるものを認める。

川田利彦氏

氏は明治十五年を以て市外尾立村に生る、天資濃厚篤實にして教育界の權威者として有名なりし川田正徵氏の實弟に當る、海南中學校に學び同校卒業後土佐銀行に入り多年勤績中であつたが、大正十二年同行が高知銀行と合併するに及んで四國銀行に入社し爾來今日に至り現に受託課長としての椅子を與へられてをる、書法を川谷横雲師に就いて究めた頗る能筆家で仕事の暇には書畫骨董を嗜

み過般名工の作と稱せらる珍品粟生屋燒噴水器を堀出し一躍好事家の垂涎の的となつたが一面蘭山と號して縣下に於けるアマチュア陶工師を以て任じ同行の中川半九氏と共に其の名を知られ玄人燒物師もその技術にははだしと謂はれる。

中村信之氏

氏は高知市新町の出身である少壯時代は陸軍々人であつたが日露戦争後、神戸の三菱造船及鈴木商店に在職各十餘年間、歐洲戦争起るや其機運に乗じて大に活躍を試み忽ちにして巨萬の富を得たので神戸で海運業を營み盛んにやつてゐたが爾來氏は日本酒の改良を企て理想的の酒を造るべく苦心研究實に十餘年財を費す事十數萬圓遂に之を完成し各方面から多大の賞讃を得るに至つたので忽ち大阪で大資本家が出來將さに醸造を開始すべく準備を整へたが時偶々某實業家から土佐の石灰開發の懇請があつた氏思へらく酒造は私事、石灰山の開發は高知縣の公益事業だ斷じて等閑すべきでないといと即意を決し其懇請を容れて昭和七年から高岡郡斗賀野、吾桑、多ノ郷の三村に跨り三百八十町歩の石灰山を買収して土佐石灰工業株式會社を創立し事務所を須崎町に置いて支配人となつた之の石灰工業は日本セメント果のオーゾリチーたる大阪窯業セメント會社が全株を所持せる爲め其

基礎の鞏固にして堅實なることは敢て云ふ迄もない月産六萬トンの原石を輸出すると共にセメントの製造及石灰化學工業を営むべく着々として其歩を進めつゝある際偶々地元にて他會社と土地の交渉問題起り多少の遲滯を來たしてゐたが縣及關係地元の斡旋に依つて解決が出來、近く萬端の設備を完了して着手する事となつたので將來大有望の事業として縣民一般から囑目されてゐる。氏は資性恬淡、磊落にして硬骨、豪放にして而も細心加ふるに俠心と同情に富み婦女子の如きも一度び氏に接せば自から懐かしみを感じるの風がある剛にして柔とは即ち氏の如き人物を云ふのである。ろう氏は少年時代から武道をよくし日露戦争の時には騎兵斥候として十數日間深く敵地こあつた事があるが其剛膽不敵の行動は忽ちにして偉功を立て奥元帥より感状を授與せらるると共に金鷄勳章を賜つた趣味としては網と釣りであるが酒も亦た其一に數へられてゐる。

鶴見宗利氏

氏は明治二十四年一月二日をもつて北越金澤市に生る、氏の家は嚴格なる士族であつたから氏は幼少よりスパルタ式の家庭教育を受け其の嚴格なる教育で心身を鍛鍊し、縣立金澤商業學校を優等の成績で卒業するや、大阪商船株式會社の會計課に勤務し、後ち高知支店の會計主任を命ぜられ、再

び本社詰に轉じ、再び高知に來つて支店船客荷物部の主任となつた、そして同社支店が土佐商船會社となるに及んで庶務課主任となり、常務小林民吉氏を補佐して其の懐刀ともなれば女房役ともなり大いに敏腕を揮い社内の信望を集めてをる、氏の性質は至つて溫厚で其の社交振りも亦た至つて圓滿である、蓋し土佐商船會社に缺ぐべからざる事務家なりとの斷定を朗らかに生むのである。

山崎嚴龜氏

氏は吾川郡長濱町の出身、明治十六年十一月一日生れと云ふから本年五十四歳、明治三十四年三月一中卒業、同年十二月海軍兵學校入學同三十七年十一月卒業、少尉候補生と爲つたが時恰も日露開戦の眞最中で翌年の一月には東郷大將の坐乗せる旗艦三笠に乗り組み同年五月二十七日の日本海大海戦に参加して克く其任務を果たし同年八月三十一日少尉と爲り順次累進して大正十四年十二月大佐と爲つたが其間海軍造兵監督官兼造船監督官の要職に在つた、退職後郷里長濱に歸へり悠々自適すること三年餘、昭和四年町長に推され同八年迄在職、其傍ら昭和五年から同町信用合組長として就任今日に至つてゐるが海軍大佐、正五位勳三等の肩書を有し同町の先輩、元老株として隠然重きを爲してゐる。

趣味としては格別ないらしく酒は相當やつたものだが今は禁酒同様とのこと氏には三男三女あり二郎君は城東中學卒業後日本體操學校に入學目下同校在學中、康三君は城東中學五年、健央君は同校二年何れも在學中で長女は海軍大尉の谷岡平八郎氏に嫁し二女經子さんは土佐高女三年在學、三女衣子さんは學齡未滿の幼女である

小島益甫氏

曲水派の俳人仲間で汀村と號して可成り古い前から名高い小島益爾氏は明治二十七年市蓮池町に生れ私立商業學校出身の俊才で在學中既にその逸才を當時の校長であつた横山又吉氏にみとめられ非常に寵愛されたもので又書道に達し東村翠濤氏の高弟と稱され頗る堪能である、明治四十五年四國銀行に入社するや忽ち氏の緻密な頭腦と迅速な事務振りは一躍擡擢されて平行員より爲替課長を命ぜられ今日に至つてゐるが、そこに最高幹部の胸底を見ることが出来る、又氏は銀行事務の全般に精通し殊の外行員中でも英文堪能だと聞くが決して自ら囂る所なく隱忍自重の風景など愈々その人と成りを伺ふに足る。

小松牛次氏

氏は小松喜之助氏の四男明治十四年二月生れだから本年五十七歳、前には高知市水通町三丁目に住してゐたが大正十一年十一月堺町ねぼけ開業、大正十四年六月現在の八百屋町に新築移轉したものである新理の味のよい事は同業者中の最右翼であると云つて恐らく溢美ではあるまい、料理と云へば誰れも先づねぼけを聯想する程で何時も千客万來の大繁昌を極め仲居のサービスも上等である、ねぼけは八百屋町の本店の外に新京橋の西詰に喫茶店昭和五年六月二十七日新築を開業してゐるが大衆向で而も場所が市中随一と云ふ所から何時も満員状態でねぼけの支店と云へば誰知らぬものもない尙この外に新京橋岡林牛肉店の西側に食堂西店を設け昭和八年一月から開業してゐる、更に浦戸灣遊覽者の爲めにねぼけ丸を新造し昭和八年十二月から開業してゐるが之のねぼけ丸は二十人乗りで船で料理し棧橋、農人町何れからでも乗船し得る事として遊覽者の便をはかり又た希望者には貸切りもする事になつてゐる

氏は子供がなく趣味としても格別ない仕事一式の人物であるが夙に敬神の念深く熊野権現、伏見稻荷、八島神社の三社を勸請し約一万五千圓の經費を投じて昭和八年十一月中浦戸町に社殿を建て又

徳島縣津田町へも同じく前記三社を勸請し本年春同額の經費を以て社殿を建立した、如斯氏が莫大の費用を投じて社殿を建築したのは「自分も拜み又た人にも拜がんで貰ひ度い」との念願であるとのことである

氏は幼少より壯年時代にかけて幾多艱苦を嘗めたとの事であるが堅忍不拔の努力と奮闘は遂に克く今日の大成功を贏ち得た譯で氏は一代成功者として正さに立志傳中の人物である

勝田一雄氏

大阪朝日新聞が世界の新聞として偉大なる信用と絶大なる權威を持ち社會の木鐸として一世を指導しつゝあるとは敢て贅言を要しない全世界に通信網を張り其報導は迅速にして正確又た社説の如き地方新聞の様な薄つべらな常識論とは大に其趣を異にし流石に大新聞の言論として推服に値するものがある毎日全紙面を通讀して行けば一廉の人物となれることは請合だ

近時地方新聞の影が次第に薄くなりて其の讀者が漸減しつゝあるのは果して何物を意味するか敢て説明する迄もあるまい

之の大新聞の支局長は誰か……京都府相樂郡加茂町出身の勝田一雄氏である氏は明治二十八年二月

五日生れで本年四十二歳、奈良縣立郡山中學卒業後早稻田大學に學んでゐたが後轉じて國學院に入り同校卒業後大正十二年四月同社の記者となり神戸、吳、廣島、高松等の各支局に勤務の後昭和四年大阪本社に於て編輯事務に當つてゐたが同九年十二月高知支局長として來任したものである

氏は穩健正實にして人格高潔、操觚者として敏腕の聞へあり優に支局長としての貫録を具へてゐる趣味としては碁、夫人富美子さんとの間に學齡未滿の一男一女がある

箕浦豊雄氏

氏は廣島縣廣島市の出身、明治三十六年六月三日生れで本年三十四歳、大正十五年三月京都藥學專門學校を卒業して直に軍隊に入り幹部候補生として昭和二年二月迄軍隊生活を爲し陸軍三等藥劑官正八位の肩書を有してゐる

退營後高知市に來住、末徳屋材料店藥品部主任として勤務してゐたが昭和二年七月香川郡長濱町で現在の藥局を開業し今日に及んでゐる

氏は大日本武徳會から柔道五段の免許を得て居る人物丈けあつて資性恬淡、男性的氣象に富み其裝飾なき態度、應接と獻身的にして而も快活なる活動振りは蓋し有爲の材として深く町民の信頼を得

昭和八年三月在郷軍人分會長に推されて盡瘁今日に及び又た長濱青年學校柔道教師、三業組青年學校名譽柔道教師として青年の指導鍛錬に當り傍ら長濱町南地總代長、長濱信用組合總代等の公職にあるが三十四歳と云へば自立を越ゆること僅かに四歳の壯年、氏の仕事は之れからで前途は益々多望であるふ

趣味としてはスポーツと謡曲であるとのこと、夫人小照さんは本年二十八歳二男一女を挙げ長男滿雄君は長濱小學尋常科一學年生、二男二雄君と長女志津さんは學齡未滿で家庭に遊んでゐる

溝淵勇太郎氏

明治三十一年長岡郡大篠村に生る、海南中學校を出た歩兵少尉で曾て高陽銀行に入り上街支店長となり其所に御輿を据へてゐたが、昭和五年に至り同行が四國銀行と合併せらるゝと同時に氏も又四銀に入り信用と興望を負ふて直ちに北街支店長となりその後本店預金課長に命ぜられ今日に至る、性格は柔和で若曹に似合はず接する所老幼の差別なく人さわりがよいのと、市内の商家に多くの知己を持つ關係から多人の信賴と期待とを持つて行内に重きをなしてをる、然るに氏は一日の行務を終つて自邸に歸るや想ひを郷上の農業改發に努め又自らも畝を取つて大いに田園に親しみその範を

示し今や郷黨に於ける模範青年として賞嘆されてゐるとは敬服の至りである

北岡龜太郎氏

「仙骨」と號する土佐俳壇の宗匠として夙に一家を成してをると言つたのみでは氏の全貌が判然しない、氏は俳句の天才でもあるが亦た歴史とした高知の實業家で、高知商工會議所の議員もやつてをるし、土佐商工聯合會の評議員をもやつてをる、氏の出身は比島だが、市立商業學校卒業後、一時土佐農工銀行に勤めたこともあつたけれど、元來商業によつて身を立てんと欲することが其の素志であつたから、農工銀行を辭して本丁筋の島崎硝子店に入り此處に腰を落ちつけて模範店員の名を取つたが、二十三歳の時、店主の死去と共に自ら獨立して同町に硝子業を開店し大に奮起して同業者を驚かし次第に發展の好運に恵まれ、今や高知板硝子商組合長の榮職にあり、悠々十七字を弄する餘裕を生じ其處に詩と商賣とを融和せしむる新天地を開拓してをる、氏は資性剛直、自信を行ふに最も勇敢だと稱せらる、

西内政次郎氏

氏は明治十年須崎町に生れ少年時代に一中今の城東中に在學中病氣の爲め退學、後に今の商科大學

の前身たる大阪市立商業學校を卒業し有爲の青年として前途を囑望されてゐたが其後高知銀行常務取締役となり敏腕を揮つて行務に執掌中日露戦争が起つたので召集せられて出征した、凱旋後は東京、大阪等で各種の方面に關係し活躍して居つたが八年前に歸へり消防後援會々長、錦浦保勝會副會長、軍友會々長等に推され隱然重きを爲してゐる

氏は頭腦明晰、談論自から理路整然として腦中一種の經綸抱負あるを思はしむるものがある蓋し同町一方の雄たるを失はない趣味としては碁と俳句であるが仲々堂に入つて居るとの事である長女良惠さんは女子大學卒業後會て大倉男の秘書となり現在では大連の日清製油の常務である廣島縣人佐久間寛氏に嫁してゐたが四年前に死亡、二女昌子さんは東京音楽學校卒業後、山口縣人吉村常平氏（嚴父は小野田セメント名古屋工場長）に嫁し一男を擧げたが五年前に死亡、之の兩女の死に對しては氏も亦た今尙ほ心中自ら一沫の哀愁を押へ得ざるものがある。

藤宗民藏氏

高知の藤宗といへば誰も知つてをる、生絲の藤宗は昔から有名で最近藤宗縮布毛織物店が兎も名高くなつて來た、此の一事に徴するも氏が如何に商賣に老巧であるか判る、氏は慶應三年九月十八日を以て香美郡前ノ濱に生れ、十二歳にして慈父を失ふに及び弱年ながら商業で身を立てんと

の志あり、十三歳の頃、後免町野島吳服雜貨店に丁稚奉公をして具に辛酸苦楚をなめたが、後ち山田の阿部洋物店、生糸商店などの店員として數年間働くうちに僅かながら貯蓄が出来たからソレをもつて高知市に出で生糸仲買を始めた、これが氏の今日ある抑もの最初である、そして明治三十一年店舖を堺町に構へ、三十七年現在の本町一丁目に移り綿糸も取り扱ふことになつた、資性濃厚篤實、且づ思慮頗る周密で興亡盛衰端睨すべからざる糸業界にありて克く方針をあやまらず幾多先進業者の没落せる間に處して斷然一頭地を抽出し今日の金城を築いたのは確かに偉いと敬服する、氏は苦勞人だけ世間の人情も機微も一切解つてをる、前には高知商工會議所の議員にも推された、長男龍吉氏も中々の勤勉家で常に目先きが利き昭和七年本町二丁目に支店を開き綿布、毛織物で華やかに發展してをる。

尾崎莊氏

基督教の篤信者で現四國銀行出納課長の重要な地位を占む、尾崎莊氏は明治十七年幡多郡中村町に生る、高知縣師範學校の出身で長崎縣の普通文官試験に應募しパスした秀才である、明治四十五年四國銀行に入り爾來後免支店長を経て今日に至つてをるが、氏は人となり資性濃厚にして一見君子の風格を備へた人格者だ、仕事の餘暇にはテニスを唯一の娛樂として此の道にかけての達人である

といふ。

村田 稻 衛 氏

氏は明治十四年故村田芳太郎氏の長男として高知市農人町に生れ、少年時代より家業の蠟燭製造を手傳ひ、明治三十四年店舗を合名會社に組織するや、自ら其の代表社員として諸種の營業課目を擴張し、傍ら三人の實弟を指導鞭撻して相俱に刻苦奮闘荐りに商界に活動して遂に今日の隆盛を見るに至つたものだ、ことに氏の店舗は合名會社の魁で本縣における最古の歴史を有しており其の基礎の鞏固なることは世人の熟知するところである、氏は性溫良着實で平生本綿の筒袖で働くといふ流儀で華美が嫌いである、徹頭徹尾眞似目な人物であるから町總代にも推され、高知乾物株式會社取締役をも勤めてをる、蓋し商界の模範的人物である。

富田 幸次郎氏

土佐の生んだ大政治家だ、その昔し土陽新聞の記者をしてゐる時代には衆議院議長の片岡健吉氏が社長だつた、富田氏のその時の理想は蓋し「片岡先生のやうになりたい」と云ふのであつたらふが、當年の念願達成して今や政民兩黨より推された二十五代目の議長となつて、今年の冬からは中島信

行男も、片岡健吉先生も、森田茂氏も腰を掛けたことのないスエス以東第一の大建築と言はるゝ國産建築の最高峰、精彩を盡したる總工費二千六百五十万圓の新議事堂の新議長席に納つて四百五十九頭顱の有象無象を兒曹視することになる氏は明治四十一年以來當選九回だから政界では押しも押されぬ古豪の方だ、後藤象次郎、大石正巳氏等の衣鉢を繼ぐ熱心な政黨大同團結の主唱者で昭和六年、當時民政黨にあつて内相だつた安達謙藏、政友會の久原房之助氏等と氣脈を通じ舉國協力内閣を主張して第二次若槻内閣を内輪から倒壊せしめたことがあつた、その後再び民政黨に長老として迎へられ隠然重きをなし、大臣級以上の人物をもつて遇せられた、人情味あり線の太い今時一寸珍らしい型の大政治家で度胸骨もしつかりしてゐるから天晴れ名議長の貫録は十二分以上と言ひ得る。

氏は帝都の記者連から双川宗匠といはれてをるが、何んでも俳句を始めた動機は、第一區の山村の選舉演説で甲の會場から乙の會場まで二時間もゆらりゆらり人力車に揺られてゆくのはとても眠くて堪らない、といつて眠つてしまふのも時間の不經濟だし、車上悠々俳句の想を練るに限ると杉指月氏などの入知恵を鵜呑みにして始めたのだつたが、最愛の令嬢に先立たれた時には「亡き魂は何處ぞ聞のほとゝぎす」とやつてお通夜の人々を泣かした議長就任の感想は峻しくも花野への路疑は

す」「踏まれてももえ出る草の力かな」で憲政は今興廢の危機に立つてゐるがわしは決して立憲政治には絶望はしてゐない、やがてはきつと憲政花やかな時代が来るぞといふ意を十七文字に盛つたものだ、これでこそ憲政の祖國土佐が送つた新議長だ、冀くは第二の板垣と爲つて下さい至囑々々

永野修身氏

高知市南新町の井出淵を通る者は從三位勳一等功五級海軍大將、海軍大臣永野修身氏生誕の家を見るであらふ、土佐から大將を出し大臣を出すのは珍らしい、氏は近代土佐の生んだ巨人で近き將來の内閣總理大臣を約束せられてをる、今春五、五、五の巨彈をブツ放して決裂の軍縮會議を尻目に歸朝した日、海相の椅子が待ち設けてゐたのだから幸運連続線だ、もつとも家庭の方は不幸つゞきで二人まで奥さんを病死させたが、現夫人京子さん(三三)は絶世の佳人で、二人連れで東京の街を散歩すると「お嬢さんですか」といはれるさうだが、氏は明治十三年六月十五日生れで海南中學校では鷹匠町の住人在郷海軍大佐北村榮虎氏と同クラスだったと聞く、沈思、果斷、豪膽、明治三十三年海軍兵學校を卒業日本海の大海戦には大尉として出征、金鵄勳章を授けられ、第一遣外艦隊司令官、練習艦隊司令官、兵學校長、軍令部次長、横須賀鎮守府司令長官などを経て昭和九年大將、十

年軍事參議官となり、今春ロンドン軍縮會議に全權として使したもので軍縮會議は二度の勤めである、ブツキラ棒で牛のやうな感じがするが非常時海軍の押へは十二分に利く、五十七歳

海相、今春衆議院の初答辯で壇上に上ると開口一番「私は生れて初めてこの壇上に立ちまして」とやつたので先づドீツと來る、次いで「この際私が軍縮全權で外遊しましたときは絶大なる御後援を賜はり……」と感謝演説をやつたので再びドீツと來る、その後で「海軍と致しましては……」と簡単な本筋の答辯を二三言喋つて引下つたので三度ドீツと爆笑……答辯は超満点の御愛嬌。

年軍事参事官となり、昭和十一年ロンドン海軍會議に全權として五、五、五を守り通して使を辱めず歸朝直ちに海相、次いで聯合艦隊司令長官として支那事變期に亘りて東亞の海を抑へ再び軍事参議官となつた。ブツキラ棒で牛のやうな感じがする。五十九歳

海相當時衆議院の初學辯で壇上に上ると開口一番「私は生れて初めて此の壇上に立ちまして」とやつたので先づドーと來る、次いで「此の際私が軍縮全權で外遊しました時は絶大なる御後援を賜はり……」と感謝演説をやつたので再びドーツと來る、その後で「海軍と致しましては……」と簡単な本筋の答辯を二三言喋つて引下つたので三度ドーツと爆笑……答辯は超満点の御愛嬌。

土居輝吉氏

「親分ですか、御免なさい、わつちは生國は關東と申しても廣うござんす……」渡り仁義で訪ねられたこともある通り全くの親分風貌、俠氣が一見してわかる人物であるが、いはゆる親分稼業ぢやなく、高知市九反田の魚問屋として成功し中央市場鹽干部卸賣人たる高知海産株式會社專務取締役として抑へてゐる土居輝吉氏である。

「土居」姓が語る通り長岡郡十市村の出身明治十三年生、先代も海産商、問屋だったが氏は小學

校を出て出高、市高等小學校に通うた。嚴父は消極的だったし病氣だったので家業は氏が、二十一歳頃から積極的に活動し大問屋に仕上げたものである。最初は鹽干のみだったが三十年位後に生魚運搬ポートを置いて阪神方面、朝鮮からの鮭を運搬取引し、鮮魚の間屋を始めた、當時生問屋は市内に五、六軒しか無かつたが田村縣水産會長と手を握り、他を向うに廻はしての單身の戦闘は華々しいものだった。中央市場ができるのと店を閉ち疊んで會社へ移して了つたが、中央市場開設に當つても同業者はやるやらぬで二派に分れたけれども氏は「やる」の急先鋒で反對を押切り白井氏が後楯ではあつたが何回も商工省へ行つて貫徹したもの、海産會社を拵へるには二年四ヶ月かゝり、始めは竹村氏も反對するし艱難苦勞は並大抵でなかつた。然し資本金十五万五千圓の會社が目度なく設立されるやその最初からの専務として就任（社長は二期間白井、三期は野村氏）し今やその鹽干取引先（生産地）は南豫を主にして全國的に亘り隆々たるものである。生魚の方は息子さんに譲り氏は會社一式で先年の争議の時は嶄然たる手腕を現し、生魚争議にさへ手を伸ばして成功した經營、世話の力は大了したもの。公職は現に市水産會副會長高知商工會議所議員、外に興味の方では土佐闘犬協會々長を十年位やつてゐる。闘犬飼育、將棋、釣……相撲も若い時はやつた、何でも勝負事が好きで喧嘩でも後へは退かぬ人。その性質は物に動ぜぬあの面構へ闘犬でも縮み上らせる目なさとなつてゐる。だがそのなつて來る人に對する温情は溢れるばかりで、これ氏が親方として

擧られ尊敬されてゐる所以である。

なほ羨ましいことは氏の令息令嬢みな俊才ぞろひであること。長男猛吉(三)は市商を卒業し生魚會社にあり、次男幸一郎氏は城商を出て入隊しては伍長となり、三男彌三郎氏は尋常四年から秀才中學なる土佐中へ入り、また四年から高校に合格現に高知高校の三年、女の方では兎喜子さんが縣立第二高女を出て徳島中學教諭濱口氏の夫人となり末の富子さん(三)も第二高女を出て生花、茶道に懐しんでゐる。

阪本氏富氏

高知縣のお役人として最古參の一人である阪本氏富氏は最近高知市市場課長として返り咲き愈々市場改善に乗出さうとしてゐる。氏は明治十二年市下知町中新町（當時の土佐郡下知、現住北新町五丁目、舊下知町分）に生れ、下知村の助役、土佐郡書記（十二ヶ年）高岡郡首席書記（三ヶ年、本久郡長時代）に歴任したが性質温厚の半面に硬骨で、内務部長と公務に關して激論して勇退、松木直馬氏の下知町長時代再びその助役となり、次いで縣川管理委員となつたが仕事の内容が土木主幹の下であるのに驚いて辭退、市産業課に入った。時恰も市と縣水産會が九反田の魚市場を争奪中で

氏はその喧嘩役に用ひられたわけだが多年官公衝で鍛へた氏だけあつて五ヶ年で協調を遂げ市中央卸賣市場をめたく開設せしめ市場内の市事務所に主任として納まつてから九ヶ年になる。市主事であり市場の生字引であり功勞者である氏が、かつて永らく官界にあつた閱歴からいつても市場課長なつたは當然過ぎる程當然である。

氏は生粹の役人として育ち好個の役人型であるがまた平民的で極めて碎け捌けてゐる。親族の厄介もよく見、親戚の一族を我家で養つたことがあるが自らも子澤山で男五人、女二人があり、長女は土佐高女卒、大阪中央郵電局技術員主事小川清長氏に嫁し二女満龜さん(三七)も土佐高女を出て生花茶道に堪能、長男氏誠氏(元)は海南出身、大阪の關西高等工學校を出て日本橋梁株式會社設計部にあり、次男義樹(三三)は大阪稅務屬、三男幸雄君は市商三年を修め簿記研究、四男和男君と五男とは尋常小學に在學中。

坂本氏趣味は謡曲、碁、投網。

岡田政利氏

高知の料理界に岡田の名は古く且つ權威がある。最近縣外人の料理人が高知で副を利かしてゐる中

に押しも押されもせぬ腕前と閱歴の大御所となつてゐる氏は高岡郡越知町出身、明治二十八年一月二日の吉日生れ、(先代愛吉氏は農)越知小學を卒業し十四歳の時三好屋旅館の料理見習となり、それから一昔前新京橋に屹立した五階の三ツ半精肉店に十年間、大正四年南滿洲大連の東洋一のホテルといはれるヤマトホテルに入つて三ヶ年、新京大連間の國際列車食堂車に勤めて見聞と腕を擴め、且つ深め、彼の有名な白露軍セミヨノフ將軍の參謀本部調理部に入つて東亞政策の根元、臺所を受持つたが大正九年歸縣、白洋クラブ料理部主任となつて四年間、高知の一流名士の味覺を喜ばせたが獨立してミス高知を開店、ミス上海、ミナト等を経営しいき新京橋「おかだ」に納まつて高等一品料理關東煮に獨特の技能を傾けて高知の「舌」から禮讚されてゐる。天ぶら赤だし、特別ガマ上げ料理は入神の技、赤だしに使ふ味噌はわざ／＼大阪から取寄せた八丁味噌で、酒は廣島縣の銘酒ミヨシ正宗。

夫人は吾川郡伊野の都築氏の妹、一女あり、小學に在學中、趣味は釣魚と玉突。玉突は本場仕込だから田舎級とは同日の論ではない。

山本長藏氏

二十何貫の巨軀で高知の實業界をのしてゐる山本長藏氏は明治二十一年三月高岡郡宇佐町の産、總次郎氏の長男長藏氏は宇佐小學校の四年を済んで西分の川崎方へ十六歳迄奉公し農業を手傳つてゐたが眼を悪くし米商を開いたが鯉船で失敗して一年間海び、舟に乗つたりする間には四五年の間相撲を取つたこともある。二十九歳の時高知へ出て來、大正六年好況時、氏が三十の時種崎造船所に入つたのが雄飛の始め、やがて棒堤の造船場を經營し、千六百トン船の木船二艘を作り、一方西山、臼井、(濱幸)氏らと四人で高知汽船を起したが六百トンの貨物船遭難で損失した。ひるまぬ氏はまた森下浩作、西内昌良ら太平洋汽船を起こし取締役となつて活動、これは十六萬五千圓に賣つて會社のしまいをつけ爾來造船業に専念し大正十四年までやつたが結局無くなつて仲立業をやる傍ら昭和元年頃から最近迄手繰漁業もやつた。目下前代議士田村實氏らと組んで上海、天津、青島を根據とする支那沿岸への漁業進出、土佐機船底曳網組合幹事(漁船四十、事務所は氏の九反田の宅)として計畫實現を進めてゐる太ッ腹の實業家である。令息は無く。兄弟も妹さんら女ばかりである。

久米象一氏

久米象一氏が鬼をも挫きさうなあの体格で高知驛前市設觀光案内所主任として納まつた時には縣廳の舊友や新聞記者連をヤンヤと言はせ、或る新聞記者は狂歌を作つたものである。性硬骨、豪放磊落快活義侠に富み、趣味は柔道(三段)角力(學生時代から有名なもの)釣、網打、圍碁と凡そ豪華なもの、典型的土佐人。國粹會高知支部設置は氏の上阪奔走による。氏は城東中學卒、裁判所書記、土佐郡書記、縣社寺兵事課、社會課社會教育係等に歴任し官界生活十八年、南國博覽會を控え且つ鐵道全通で觀光土佐の時代に入るや昭和十二年一月新設の案内所に主任として選ばれたもの。父君は前高知新聞營業部長、大阪朝日新聞野村組販賣部主任として有名な久米福馬氏である。象一氏は本年四十四歳、長男象二君は小學在學中で長女萬龜代さんは土佐高女在學中、外に一女あり。出身地は秦泉寺、新町名春日町。

西 武 彦 氏

四國銀行江ノ口支店長西武彦氏は佐川町の出身である。初め高陽銀行本店に入り、佐川支店、安藝支店に轉任、安藝支店在勤中に高知銀行と合併改稱されたがそのまゝ、同支店詰めで居残り、宇和島支店、伊野支店次長を経て本店の企画係主任となり昭和十二年支店長に昇進した手腕家で、人物圓滿、敵が無い。趣味は俳句「武比古」の名でホトトギス派重鎮、龍卷の同人として有名である。夫人は同郷佐川町種田氏の四女靜さん、長男昭夫(十)君は高知新聞者主催第一回赤ちやん審査會で生後八ヶ月を以て優等兒となつた健康兒、外に長女和子(六ツ)がある。

小松熊太郎氏

高知の資産家の御曹子中でも若いながら頭の冴えたことで評判の白井鹿太郎氏を社長として昭和十二年の夏突忽として生れた日産自動車特約販賣店、初め少しの間は高知市農人町白井商事の階上にも無く高知驛前に瀟洒たる建築が出来上つて、こゝに寡言で落ちつきのある俊才的な小柄の風采

を見せる小松熊太郎氏(四)四國日産自動車株式會社(昭和十二年七月創立本社社長は當代日本實業界の風雲兒鮎川義介氏(本店横濱)の支配人といへばよほどの人物に相違無い、とは思はれたがまだ一般に余り知られてゐなかつた人として如何なる経歴の持主かと注目されたが、この新進實業家としての彗星の如き登場者こそ、實業界巨頭のよく生れる村、本縣安藝郡羽根村の出身で大阪の城東商業學校を卒業し高知營林局に十ヶ年勤務したことのある秀才だつた。その後實業界に脚足を伸ばし東京の日本自動車株式會社に入り手腕を認められ松山所長となつて十ヶ年、アメリカ製のテラプレン車、ハドソン車、(一萬圓級)の販賣に手腕を發揮、その會社は大倉組直系、日本最古の自動車會社、高級車のみを扱ひ松山支店長時代小松氏は高知縣廳市役所等へも購入させたものであつた。自動車販賣の全部に自信を得た氏は勇奮獨往を決意し昭和八年同社を辭して同年大阪に梁瀬自動車株式會社を起して自營してゐたが昭和十一年八月自動車事業法案が設けられ日本の自動車製作の遅れてゐる關係で政府は「日産」「トヨタ」の會社を指定して製作の認可會社(認可會社は所得税全免、但し自動車價格を示して販賣)とした。豫ねて外産の前に拜跪するを快しとしてゐなかつた小松氏は會心の「純國産時代」の波に乗つて颯起、愛媛、香川、高知の特約販賣店(社長白井鹿太郎氏、取締役白井壽馬、町田喜四郎、監査役長尾幾吾)に支配人として颯爽デビューしたのであつた。緻密な頭腦、新知識、温厚の人格、加へて熱誠努力奮闘心は着々成績を挙げつゝあり、普通會社は

年産三千臺以上の製作は出来ないが日産の十三年は一萬五千臺、十四年は三萬臺の製作確實、現在は支那事變でその方へたくさん行つてゐるがその際にも拘はらず既に土佐バス其他へ續々「ニッサン」が進入してゐて將來の進出刮目すべきものがある。小松氏 趣味は洋樂、バイオリン、殊に後者は名手であることは高知實業界の新異彩、あくまで新しい型の紳士を迎えたものである。琴瑟相和する夫人は市内水通近藤猛氏の長女、高坂高女出で、お子さんは長女純子(三) 長男博行(二) 次女喜久子(六) 二男宣彦(三)と現想的家庭

久保田直巳氏

文字通り出藍の譽れあるは高知市蓮池町の下一丁目久保田直巳氏であらう、先代錦七氏は二間開口の紺屋だったが職人氣性で商才に乏しく發展しないのを、長男の直巳氏がその事業状態に發奮努力間口を十間に押し擴げ奥行は山田町へ抜けるまでの卸問屋にし多額納税者にしたからである。藍桶の傍らに育つた直巳氏(明治三年二月四日生)も最初は強ち父業を繼ぐ心では無かつたらしく共立學校に通ひ、青雲の志を抱き同級北川寅次郎氏らと京都高等學校に學ぶ目的で笈を負うて上阪、豫備勉學中に脚氣に罹り、祖母、叔父らが迎えに來たので歸縣、既に試験に合格はしてゐたが長男の

身として父業を繼ぐ決心をして紺屋に従事した。その頃は手織時代で高知市を中心に郡部にまで「染カセ」が流行し山田町の徳久某がその販賣を始め續いて阿波の人眞鍋氏も山田町で開業したが前者は市を中心に、後者は郡部本位で、ために久保田方は不振になつた、これ錦七氏が商才に富まぬためである。直巳氏の親友同町の山下嘉平氏(先代)はその状態を見て「染カセ」業を久保田氏に勧めたが相當な金を要するので決せず中止。氏は紺屋業の現在には發展の余地無しと父に八圓の金を借り紺屋町京屋の商店で「三カマ」の糸を買ひ需めて事業を始め十年の忍苦、卸商を始め先づ郡部に手を延ばすべく草鞋履きで須崎に行き一商店で半日も過ごしたが一つの注文も受けず失敗、然し不屈の直巳氏は更に久禮に行き商人宿に泊つた所偶々易者と同宿、占つて貰つたに「竹の節の如き現在だがすぐ節は抜けて幸運が来る」とあつた。

窪川方面でやつと多少の注文を受けて歸高、そして漸次四百圓の品物を送る様にまで努力した、だが注文が多くなるに従ひ資本金に苦しみを思ふ様に取り引區域を擴げることが出来ない。その内多少の資本を得て幡多郡南部にまで販路を擴め更に四五年後には東郡にまで販路を拓いた、その後徳久、眞鍋氏と肩を並べる迄になりその後は卸賣よりは小賣に多忙なため十三人の職人を使ひ店舗も狹隘を感じて前代議士島田紘氏の家屋敷を買つて擴充したのが今の家である。そして雜貨卸商に轉じて爾來十四五年今日至る。

公職は市議を三期、商議を二期、聯合會にも關係し、輸出入の人々で同盟汽船株式會社を創立（輸出は中内久太郎、輸入は久保田を中心として社長は中内久太郎氏、取締役副社長は久保田氏）高知信用組合監事を大正十二年から十五ヶ年連続、最古の監事として記念品も受け町總代としても奔走し、功成り名遂げて趣味に親しみ漢詩は横山黄木翁につき、月波吟社同人で錦江と號し、和歌の道にも入つてゐる結構な身分となつた。少年時代は病身だつたが何物も忘れて活動したせいから然病氣も忘れ老いて益々健康、現に壯者を凌ぐ風貌である。

長男重好（三九）氏は市商卒業門司市のアサヒビール會社に奉職してゐたが家事に従ふため二年にして歸郷、その夫人越さんは幡多郡三崎村原氏の三女で實科高女出。二男清喜氏（三五）は明大を卒へ廿代町入交氏一家と親交ある縁で和歌山市の入交商店に勤め、夫人は野村組總本店の重役依岡莞爾氏の長女富美さん（縣立第二高女出）三男直太郎氏（二六）は市商を出、神戸三井物産船舶部に在勤、支那事變に御用船の事務長として活躍、夫人は中田嘉之助氏二女春子さん（土佐高女出）四男治（二七）君は縣立工業在學中、五男増榮（二八）君は小學に、長女壽子（二九）さんは縣立第一高女出、二女喜美子（三〇）さんは土佐高女出、新町野村熊次郎氏に嫁ぎ夫君は出征中であり三女須惠子（三一）さんは縣立第一高女在學といふ子寶福徳兼ね備はる一家である。

崎田久森氏

長岡郡選出縣會議員崎田久森氏（三三）は農村代表として實に中分の無い經歷を持つてゐる。氏は大杉村出身、五歳の時父を亡ひ農業に従事し朝倉聯隊に入營中病氣退營したが、苦勞しつゝ勉強した才能は大正二年氏を大杉村農會技手たらしめ登龍の門に入らしめた。果然、非凡の手腕を發揮し六年には報徳信用組合を起こしてその専務理事に就任、時に齡而立、とは申し乍ら三十歳で以て斯かる健實な事業を起こした見識は感心なものだ。爾來二十有余年、氏また現在はその理事をつとめてゐる。以て氏の創業基礎工事がいかに良かつたかと判る。

大正八年土佐銀行本山支店大杉出張所主任、同年東豊水出張所主任、十年村農會長、昭和二年書記となつた、蓋し産業法による有限責任高知縣木炭販賣組合聯合會事務所が高知市に設置と同時にその専務理事になるためである。愈々輝かしい躍進だ。

五年には大杉村長に推され（十二年一月に縣議立候補のため辭任）翌六年嶺北町村長會長、八年長岡郡町村長會長、縣町村長會評議員、縣兵事會評議員、吉野川水利調査會々長、嶺北魚族保護組合副會長等の公職が蜚集し、十二年二月めでたく縣議當選、縣會に於ける眞面目な實力ある議員とし

て正に白眉、政界も斯ういふ人物がもつと多く居れば官僚からも馬鹿にされず、威信が振ふだらう趣味はハイキング。夫人は同村杉三宮氏の令妹、實子無く養女静子(二〇)さんに芳男(三〇)氏といふ高松市泉氏二男(高松高商出身、十二年四月住友銀行に入社)を婿養子さんに迎えた。

廣田榮一氏

高知の古鐵商は消極的で鋳力屑の如きもその儘敗神へ積出すに過ぎなかつたが六年前高知市南寶永町に來た廣田氏により土佐に初めてのプレス(鋳力壓縮)事業が始められ高知の工業に一進歩が齎らされ高知の古鐵界に一エポックが劃されたことを市民、縣民は感謝してよい。この感謝さるべき主が神戸廣田出張所の店主、わが榮一氏である。

氏は明治三十二年一月十五日兵庫縣洲本町細上町の相當な資産家に生れ、尋常小學校を卒業後その青年期は凡ゆる方面に活躍したが性豪放不羈のためいつも失敗、職業を變へること六七回、然しその間愛弟をして神戸高商を卒業せしめ、その卒業後神戸林田區東尻池町五丁目に兄弟商會を開き令弟をして神戸で最初のプレス事業に手を伸ばさしめた。そしてこれを援くるに兄榮一氏の積極的進取の手配を以てす、いかに事業が發展せず居らう八幡製鐵を含む日本製鐵株式會社(半官半

民の全國統制的日本最大の會社)製鋼原料の直納人となり今や本工場は三百三十四坪、それに廿六坪の事務所を有し尙ほ大阪此花區新在家町二丁目に分工場を持つほどの隆盛を見るに至つた。普通ならばこれで、榮一氏は兄の地位を以て安居樂業してもよいわけだが、そんな小つげな考へを持つ榮一氏ではない。阪神は弟に任して大丈夫と見るや、自分は更に新天地開拓のため夫人の故郷(夫人は吾川郡上八川和田馬次氏の長女)たる本縣に來り遙かに神戸の愛弟を應援すると共に、單に古鐵やプレスでは満足するやうな小人ぢやない、更に躍進、昭和十二年七月天坪の北川鑛山(滿嶺鑛區三ヶ所)の自己經營に乘出し外に瓶岩村外山鑛山(十三坑内)にどしどし投資經營、然しこの外山鑛山の方は石原鑛業の範圍だつたのでトン三圓を出す條件で委任經營とし、これらを合して堂々經營を開始、最初は販路に困つたが現在では高知電氣工業會社へ賣込むことになつて既投資は既に回收済みといふすばらしい成績を擧げるに至つた。斯ういふ太ッ腹な、縣外からの遅れ馳せに拘はらず機敏な成功は縣民を躍若たらしめてゐる。鑛山界に於ける氏の進出は極めて順調、トントン拍子で眞に彗星の如き鮮かさだ。

更に特筆すべきは、今や時局重大、滿嶺の需要日と共に増大し、政府は重要鑛物増産法を作る時我國に産額少く而も本縣を我國での有数の産地とするこの滿嶺鑛開發が策上喫緊のものたるを思ふ廣田氏は本年三月率先して朝倉村西本直司氏と共に「高知滿嶺鑛業組合」を首喝し、益々斯界の發達

に貢献しつゝある。蓋し本縣の滿俺鑛業界は小事業家林立し金融販賣其他種々の方面に不便ありブローカーに利用され、斯業の堅實な發展が妨げられつゝある現状を遺憾とし弊害を除去した開發、未開發を通じ鑛區を十二分に開發設備を充實し、販賣を統制し多々益々鑛區發見のため一切の便利を計り、また委任經營を受けて活潑にしようとするを目的とするものである。

世の普通の商人や事業家は儲けたら自分の懐を肥やさうとするが、わが廣田氏はこれらと選を異にし、儲けた財は積極發展のため廣く事業界のため、ごし／＼散する主義である。阪神の間で鍛へ上げしかも阪神事業家以上の氏のやり方は到底地方商人と同日の談ではなく、高知の商人の大いに見習ふべき点であり、此意味に於ても廣田氏の事業躍進は本縣を利するものとして、ひとり本縣實業界のみならず一般にとつて以て恩人とすべきであらう。

山本正巳氏

窓外、廣々として香長平野を背景に後免の高知鐵道株式會社二階の一隅に寡言、射る様な眼光、それでゐて猛からぬ上品な老紳士が同社支配人山本正巳氏である。高鐵本社に行く者、何人もそのもの靜かな威嚴を思はぬ者はあるまい。

明治九年二月六日生れといへば本年六十三、家は高知市江ノ口町千二百一番地。明治三十一年海南中學を卒業し卅八年 日本大學高等師範科を卒業してゐる。氏の半面に嚴格な老教育家の感觸あるも理である然し學校を出るや直ちに大阪商船會社本店文書課勤務庶務係として入社。明治三十八年十一月同課海員係、大正九年四月に至る十四ヶ月間内航上級船員に關する事務に従事した。あの荒くれ男と應待しても困らず、下級の者をもぞんざいに扱はぬ態度、世の酸いも甘いも噛みわけける應庸なさはその永い修業の賜であらう。大正九年七月辭して功勞表彰狀と銀盃一個、功勞株を受けた。大正十四年七月高鐵入社、庶務主任を経て昨年支配人となつた。性格勤直事務に精通し多數の若い者のゐる會社工場の父として蓋し打つてつけである。

趣味は謡曲、大阪商船在職時代喜多流の家元にて習ふ。これも氏の人格に合致してゐる。長男茂正氏（七）は高知城東商業出身で大阪市水道部にあり、これは正巳氏の令兄島崎孝彦氏が部長でその許に精勤してゐる。長女靜子（三）さんは土佐高女を卒業し、（正巳氏夫人、宇佐町前町長西村庸徳氏三女）が生花の免狀を持つてゐるので直接教はつて堪能、この教養を持つて大阪府布施市稅務署に勤務の吉良氏に縁附いた吉良氏はかつて縣電氣局會計課長たりし吉良龜義氏の長男で安藝中學を出て中央大學に學んだ人である。

青木忠恕氏

給仕から同じ銀行の支配人にまで上つた出世は、一寸類が無く全国的立志傳ものだが、これが高知市に實在するからえらいもので、立派な郷土讀本の題材だ。

それは四國銀行の支配人代理青木忠恕氏(三)高岡郡加茂村出身で高等小學校を卒へて須崎町の三浦商店に入つたが明治四十三年九月高知銀行給仕となつた。腕がある上に恪勤精勵、どん／＼と累進して大正八年二月には山口縣大竹支店次長となつてゐた。十一年二月には本店貸附課長心得、十二年貸附課長に昇進、昭和三年一月には調査課長に就任、十年六月支配人代理といふ要位に上り現在に至つてゐるが年は若いし銀行家として前途尙ほ多望、押しも押されぬ巨頭となるのも近からう。趣味は圍碁に俳句(號、宙城)長男準一郎氏(三)は高知市立商業校を出、四銀松山支店にあり長女多枝子(二九)さんは高坂高女出、二女寛子(二七)さんは土佐高女在學、二男錠吉君(二三)は師範附屬小學校に在學中である。

福島元治氏

加賀の絹と併稱さるゝ丹後縮緬、「ピンと出した」の俚語と天の橋立で名高い京都府下宮津町の

出身、あの邊りの人は温厚で手堅く、美人系であるが福島氏もその選に洩れぬ。明治二十一年生れと見えぬ若々しさ。夙に銀行業に従事、昭和三年舊三十四銀行營業部長代理となり磨きをかけ、三和銀行創立と同時に同銀行尼ヶ崎支店長に任ぜられ、次いで本年三月高知支店に轉任し今日に至る八面玲瓏、社交鮮か、銀行家に打つてつけのビジネスマンライクな人格者。

安並壽之助氏

檜笠、疊表、蘭蓆、(ゴザ)等の縣下産額は十二三萬圓であるがそれらの縣下屈指の移出商は高知市西蓮池町の安並壽之助氏(六〇)である。氏は高岡郡浦ノ内村出身、二十五年前高知市に来て焼酎の卸賣を始めたが途中でやめて現在の業に移り大繁榮を來した。のみならず羨ましいことは立派な子息多數を有すること、畢竟、氏が子息の教育指導にも非凡の力あることを証するものである。即ち長男正道氏(三〇)は東京帝大工科機械科を卒業後、縣出身の首相濱口雄幸氏に見込まれ、その世話で英國マンチェスターのピツカース會社へ研究に派遣された。マンチェスターは英國の經濟工業の中心、否な、當時世界のその中心地でピツカース會社は世界一の大會社である。こゝで四ヶ年みづちりと研究し歸朝したが歸朝と同時に鈴木商店の破綻あり、氏は神戸製鋼所(元鈴木關係の會社)

に招聘され、時年齒僅に三十一才で東京の支店長となり現在に至つてゐる。二男恒義氏は父の事業を助てる内に不幸夭折したが三男三男氏(三)これもまた稀代の秀才で長兄と同じく東大工科機械科に入り入學一ヶ年六月日に横須賀鎮守府海軍造兵科試験にパスし月給六十圓を受けつゝ大學で勉強したといふ異數、卒業と同時に造兵中尉(横須賀)に任命され廿六歳で大尉に昇進、駐佛大使前附武官となつた(十一年十一月)。

正道氏夫人は市内柳原元重醫師の長女敏子さんとて縣立第一高女出、東京家政女學校出身の才媛、一男一女あり、前市長川島正伴氏夫妻の媒酌、三男氏夫人もこれもまた柳原氏の二女博子さん(縣立第一高女出)で、前代議士中谷貞頼氏夫妻の媒酌、つまり俊才兄弟が才媛姉妹を貰つてゐるわけ。博子さんの夫君三男氏は現在渡歐中とて東京家政女學校に在學し、令姉と同じ道を追うてゐるのも興味深い。

廣末 靜一氏

高知市帯屋町下登丁目に金物度量衡器販賣製作修復の大きい店を張つてゐる靜一氏は先代當三郎氏の事業を立派に繼承する才物である。順序として先づ先代の事を書かねばならぬ。先代は安藝郡

安田町の出身、十四歳の時高知市に出で種崎町西山覺次(先代)で實兄の許に働き三十歳の時獨立したが無資本開業といふ豪膽、蓋し資本があつての開業は誰でもする、無資本でやつてこそ基礎なり骨組が眞にガツチリと出来るのだ、この式でゆく先代は傑物、最初、播磨屋橋南詰「才谷屋」岡林氏の店を月賦の契約で譲り受け品物は上州の金物屋中山友治氏方からこれもまた月拂で買受けて始めたが不用品は大阪に持行き若干の儲けをし、漸次盛んとなつて京町に現存する宏大な舊店舗を建築した。當時も宏大な家として人々を驚かせたもの。ひとり金物のみならず事業會社へも進出し、當時縣下財界の巨星たりし深瀬孝太郎氏等と土佐水産株式會社を創立し社長なき取締役として深瀬氏と共に就任、或は金物と縁の無い土佐牛乳株式會社、高知金融株式會社(東元多三郎氏と)、四國鐵工會社と續々創立、行くとして可ならざるもの無き概があつた。鐵工所は歐洲大戰前の不況時代に創立したため不振で創立匆々株主間に解散の議が起つたが氏は將來に自信ありむしろ自己單獨經營に買ひ取らうと交渉したがこれもまた株主に反對され且つは價格不調のため買取りは中止したが間もなく歐戰起こり果然鐵工界は大景氣が見舞つたが時既に遅し、解散後とて何ともし難く、株主たちも今更廣末氏の炯眼を想起して、早まつた事を悔いたといふ。

氏は次いで吾川郡長濱町に造船業を始め、須藤、包國氏らと共に海運業に乗り出したが汽船金剛丸(百トン)が南支方面の航路で坐礁破損(損害七萬圓)してこれは思はしくなく、或は土佐石材

株式會社を起こし社長となつてゐたがこの手腕の人廣末氏も大正の末期、今より十四年前に逝去した。靜一氏は此の財界巨人の三男に生れ市立商業校を出て大阪金網會社に入り廿三才の時歸縣、父の店を手傳ひ、父の關係事業たる四國鐵工所、長濱町の造船所には父の代理として活躍し出藍的俊才で二十七才の時獨立し蓮池町驛前通りに度量衡製作修覆販賣を開店、七年の後現在の所に巨大な店を構へ、土佐度量衡株式會社を買収して合資會社とし、販路は縣下一圓に及んでゐるのである。現に日本度量衡協會高知縣支部參事。氏の長兄（先代常三郎氏の長男）は早死し二男（靜一氏の令兄）が先代を襲名してゐるがこの常三郎氏は氏と共に店にあり四男龍吉氏は市商を出て早大に學んだが中途退學して上本町に金物商を營み五男榮三郎氏も市商を出て中央大學に學んだが中途退學して相生町で金物商を營んでゐる。靜一氏夫人は秦泉寺小松喜苗氏の四女、三男二女あり、長男は中學在學中。尙ほ靜一氏の長姉は櫻木健一氏の母堂、二姉は長野縣松本市高等學校教授大新田氏に嫁し三姉は大連で商業を營んでゐる。靜一氏の趣味は釣と謡曲、盆栽等々仲々廣い。飾り氣無い、どんな風でも構はず事業熱心第一の人。

長尾利枝氏

近ごろに無い成功者として昭和十二年高知市内の話題を賑はしたのは長尾利枝氏(五)である。

舊姓下司と稱し、市内東種崎町出身、市立商業學校に學び種崎町文具商中屋喜之助方の店員となつたが後大阪中の島ホテルに入り英語の研究に没頭。十八歳にして敦賀の中學校の英語の教師となり次いで通譯になつて内地、南洋、支那方面に活動、それから語學を離れて愈々實業界に入り、神戸市に商館『亞比洋行』……藥品亞砒酸の販賣……の經營、旅館經營、そのち蕪生の鑛山で巨大の儲けをし、高知市の北郊に壯大な邸宅を買ひ入れ錦衣歸郷したものだから舊知の人々が驚いたのも無理はなう。

然し氏は極めて如才ない質で、成功を少しも誇る風がない。蓋し世の成金者流と異り可なり數奇な生涯を送つて來、苦心と實力を以て今日の域に達したのであるから、その間自ら修養が完成してゐる故だらう。氏は常に先輩を尊ぶ人である。以て氏の人格の一端が窺はれる。趣味は碁、撞球、謡。長男利夫(二)氏は同志社大學を出て現在早川金屬工業株式會社大阪本店に在勤、次男伯(三)氏は大阪の商業學校を出て兄さんと同じ早川金屬の東京支店在勤、長女君(五)さんは大阪の大成商會社員松崎氏に嫁してゐる。

松村幸松氏

高知市要法寺町古着商松村幸松商店といへば有名なものである。商才秀でた幸松氏は安藝町出身

四十餘年前裸一貫で高知市に出で先づ長岡郡三里村種崎の醬油店に奉公、次いで浦戸町本山質店に轉じたのが今日の大を成した元である。心掛けがよくて奉公中に若干の預金を造り獨、立して古着商を開店し今日の隆興に至らしめた。本年六十五歳、一人娘の良娘（縣立第一高女出）に立派な養子を迎え、店を委して自らは南興力町に隠居し閑日月を送つてゐる。

尙ほ養子次郎氏は舊姓並川、同じく安藝町の出身、舊縣立第二中學を卒業大阪汽車製造株式會社（社長長谷川省吾氏、政界の立物原、犬養氏らを重役に持つ大會社）に入つてゐたが商賣を好み養父の業を繼ぐため辭して歸縣した。氏は縣下謡曲（觀世流）古參者と聞く夫人との間に一女あり土佐高女に在學中である。

長尾峰馬氏

長尾峰馬氏（五）は舊姓下司、香美郡三島村名家の出で早稻田大學法律部行政科を卒業後日露戰役中兵事會長、戰事後援會長として軍事に功あり、二十八歳の時高知市に出で下知實永通りに堂々たる邸を設けたがそれに入る峯馬氏は眉目清秀風采堂々たる典型的紳士、夫人また秀麗の令人とて當時の下知村民をして敬仰せしめたものである。

氏は社會的及實業界にも活動し大正元年資本金六万圓の七佐製材株式會社を起し専務取締役に就任、大正七年に至つた。その間製材會社の難關時代に遭つたが五年から好況となるや無價値の株にも拂込金以上に多大の配當を爲して佳話と稱された。會社が隆盛となり六十万圓の高知製材株式會社となつたのを機に、名利恬淡な氏は七年退社し、趣味の新古美術が自然と仕事になり現在の新古美術商となつた。

夫人は長岡郡三和村の名家田内氏の長女。長男直臣（六）氏は政治經濟部出身で全國的にも權威と勢力ある彼の日刊工業新聞社自動車燃料課に勤め、その夫人は高知市本町岩川氏の長女良枝（五）さんで一男がある。又峯馬氏の二男忠臣（四）氏は大阪高等商業學校出身、朝鮮寶光鑛業株式會社（資本金一千万圓）の會計課長を勤め、長女俊子さん（七）は縣立第一高女を出て大連市住の滿鐵社員中西繁氏に嫁し二男がある等、徳望の家長尾家は麗はしく榮えてゐる。因に下司姓が長尾と改姓されたのは昭和四年八月である。祖先はやはり長尾姓であつた。

小野明氏

前の高知瓦斯會社は大正三年の創立で七年に歐洲戰亂のため石炭暴騰、經營不能となり鐵材も上

つたのでその機に解散した事は人の知る所であるが、瓦斯は文明都市には絶対に無くてはならぬ物である。再度生れた現高知瓦斯株式會社の技師長小野明氏(明治卅五年四月生)は幡多郡八束村の出身、縣立中村中學から明治専門學校に入り卒業後大阪瓦斯株式會社技術部に入り岩崎工場勤務となつた。そのうち高知瓦斯會社再建と決定するやその工場の設計に當り昭和三年會社が創立され九月技師長として招聘され入社、但し材料の購入等に一月を大阪で過ごした上十月着任、建築に入り、翌四年四月落成、六月から一般に瓦斯供給を開始した。

氏は在郷工兵少尉(大正十四年十二月一日廣島電信隊に入營一ヶ年)で趣味は學生時代は陸上一般のスポーツ、水上はボート、優しい方では音楽と明朗ものであるが現在は社業一式、然し嚴父信次郎氏が私立の幡多實業青年女學校を經營しその校長として創立十二年目に生徒百六十名を有する隆盛だつたのが昨年九月逝去したので明氏は父君に代つて經營校主の地位にもある。夫人仲枝(三〇)さんは幡多郡三崎村橋本精郎氏の長女で縣立第一高女出。長女惠子(七)さんは柳原幼稚園に通ひ、みのり學園にも通ふてゐる。二女篤子さんは可愛い三歳。

尙ほ嚴父小野信次郎氏については少しく附記する要がある。氏は實に幡郡教育界の功勞者で、東山村古津賀尋常を振出しに中村尋高訓導、三年位で校長になり五十五歳の時私立青年學校幡多實業女學校を起して青年子女の教育につくす所が大であつた。

村田久太郎氏

市本丁筋四丁目に堂々たる金物商を營む村田久太郎翁(前土佐金物商組合副組合長)は實に波瀾萬疊の前生であつた。

氏は長岡郡三和村里改田出身。少年にして鍛冶職だつたが十八歳の時十八文の金を持つて出高、魚行商、提灯の骨抜きなどして一ヶ月五十錢の家賃の家を二人して借りてゐた。或月の如きは仕事先の主人が月末に不在で金を貰へずそのため家賃が拂へず戸外で一夜を明かした事もある。

律義か變人か、とにかく面白い。又二十五歳の時楠病院の車夫となつたが仕事始めに五厘で辨形まで行つた。懸命に稼いだ後元の鍛冶屋になり三十七歳の時現在の所に三間間口の家を借り鍛冶屋として勉勵十年後には夫人と娘さんに小さな金物商を營ませる様になり大正十三年現在の店舗となつものである。

溫厚篤實、別に趣味はない。本年朝鮮で罹病し歸來療養中であるし、長男寅松氏(四八)が店の主体となつて營業してゐる、寅松氏の長女は縣立第一高女在學中で外に一女あり。



吉岡正博氏

四國銀行北街支店長として信望のある吉岡正博氏は明治二十六年生、潮江出身で、明治四十年高知貯蓄銀行へ給仕として入り、四十四年七月雇となり、大正三年土銀書記補、七年一月書記、十二年四國銀行となるに及んで本店預金係と累進、更に江ノ口、松丸、牟岐、小松島、鴨島等の各支店長に歴任し昭和十二年三月現在の北街支店長となつたものである。

一個の給仕さんから勉強し磨き上げ叩き上げ、この重要地位についたことは立志傳中の人といふべく、蓋し、天稟の秀才である上に濃厚實直な性格と修養の賜であらうと思はれる。趣味は詩吟をよくしかつて徳島放送局に立ちしことあるとうけたまはる。

棚橋浩二氏

棚橋氏はその姓の語る如く東京市の出身である。浩二氏の先代が明治の先端的文化をもたらして高知市に來り寫眞業を開業したのが三十五年前で、當時は寫眞屋さんが醫者並に先生と呼ばれた時代である。寫眞といへば本町の棚橋、棚橋といへば寫眞師と、少くとも明治生れの人には誰でも知つ

利岡秀雄氏

てゐる高知寫眞界最古の老舗であり當主また斯界の先輩である。長男正(二)氏は城北中學から中村中學に轉じ卒業後東京に出で寫眞術を研究中であり、次男孝(二七)君は市立商業學校在學中、三男治(二三)君は秀才學校「土佐中」に在學、四男勉君は小學校在學中である。

日本ゼネラルモーターズ株式會社特約販賣店たる高知驛前合資會社四國モーターズ(支店は徳島松山の各四國モーターズ)は西山合名會社の經營にかゝるものである。高知驛前の四國モーターズは九十三名の従業員を擁し自動車商會として高知縣最古最大のもの、而も最近迄は唯一で交通文化時代の波に乗つて大飛躍し斯界に貢献する所大である。

その支配人として切り廻してゐる利岡秀雄氏は明治四十四年の高知市立商業學校出である。最初東京瓦斯會社社員となり七年勤務、轉じて後藤惣兵衛商店輸出部に入り西洋人相手の絹(仕立物)業に従事、次いで大正十二年天津の伊澤洋行に入った。當時日本人は氏一人であつた、二年間在勤したが病氣歸郷、西山合名會社に入り東京、横濱、北支で磨いた腕を以て精勵したので實力は忽ちあたりを制壓し現在の重要位置に座るに至つたのである。家庭は一女明(てる)さんが縣立第一高女

四年在學中である。尙ほ利岡氏は横濱時代にクリスチャンの洗禮を受けてゐる。

利岡氏は業界稀に見る人格者であり手腕家であり特に研究心に富み絶へず内外の書籍雜誌につき自動車の研究を怠らない。齡尙壯、これからが愈々働き盛りである。氏の存在は西山合名會社の至寶であらう。

小川吉堯氏

高知市に於ける自動車工作界の巨頭である小川吉堯氏(六六)は徳島縣撫養町の出身である。二十年前、廿六歳の時四國自動車商會の運轉手となり勤務するうち自動車修繕工作の有望に着目し高知市本町島内常太郎氏と共に島内合資會社(自動車修繕製作)を創立しその業務執行社員となつた。これ實に四國に於ける最初の自動車工作所である。昭和五年島内合名會社に改組、六年自ら主体となつて四國商會を創立してその常務取締役に就任、更に個人經營にて四國モーターズ製作部を開業、十年四月これを四國モーターズ會社に譲渡、十二年六月二万數千圓を投じ市内榮田町に四國鐵工所(百四十坪)を創業し自動車修繕製作を開始、更に鐵工部も加へて益々隆盛に赴きつゝある。夫人は長岡郡西豊水村小笠原氏の二女、長男昭一(二三)君は小學に在學。趣味は刀劍と酒。

近藤楠吉氏

高岡郡佐川町が學者輩出の淵藪として本縣第一であることは世間周知の通りであり醫界では愛知醫大學長、熊本醫大學長に歴任せる日本的の巨頭山崎正薫氏を持つが、後また醫學博士近藤楠吉氏を出した。蓋し近藤氏が先輩山崎氏に誘導されたが察せられる。乃ち近藤氏は城東中學を卒業するや、當時山崎氏が校長たりし醫專に學び耳鼻咽喉科を専攻、螢雪功あり、同校咽喉科の教授中村豊博士が地元名古屋で開業するや入つて實地に研究すること四ヶ年、後歸縣して谷病院の杉一氏のもとに、次いで高知市武田病院に科長として招聘されたが、一層斯學の蘊奥を究めんと京大耳鼻咽喉科に入り星野教授のもとで研究を積み昭和四年博士號授與、翌五年三月高知市追手筋、母校の隣りに開業して現在に及び城東中學後進奮勵の指標として刺戟、拍車を與へてゐる。そして長男宏君は城東中學三年在學、二男と長女は共に小學校に在る。博士本年四十三歳、人格高風、名詮自稱「楠」の如く、趣味は碁。

x

x

x

並村喜七氏

並村喜七氏は明治十九年安藝町に生る。父君は惣七氏。安藝中學を卒業し東京高等蠶絲(當時農商務省の蠶業講習所)に學び歸縣後縣下の蠶絲界につとめたことは人口に膾炙するところ。昭和十年から木材に轉じ岡崎精吉氏が組合長時代に木材業組合副組合長に就任、岡崎氏隱退後昭和十二年に組合長となり現在に及んで江の口丑之助の廣大な製材業は氏が統率するところ。木材組合長は初代が濱田俊夫氏、三代目が並村氏で四百五十の會員を擁し縣下全般に亘る業界の輿望を負ふて活動してゐる。氏は治山治水問題に深甚の考慮を拂ひ縣下で年六十万石の伐り過ぎがあるのを重視し、檢印問題、輸出許可制につき須崎側の強硬な反對を排し統制上止むなしとして盡力した。

趣味は事業だけ。夫人は奈半利野中氏の長女で、長男信一郎氏(四)二男愛二郎氏(三)氏は共に産業に従ひ長女は大川筋森下氏方へ、二女は並村氏の木材部店員寺尾氏へいづれも縁づき、三女(五)は家庭にあり生花に親しんでゐる。



土居莊一郎氏

浦戸町土居株式会社主である。同店は高知の株式会社中最もキビムした業態の店である。蓋し主人莊一郎氏の竹を割つた様な性格の然らしむる所であらう。同家はもと八幡通り新市町角の太いタバコ屋であつたが先代伊太郎氏が中途にして株界に轉じ仲立業もやり北新町井出淵に移轉したが二十一年位前から徐々によりくなり現在の浦戸町に移つてからすつと順調で店は發展した。

先代は三四年前に逝去し莊一郎氏があとを引受けることになつたわけだが年齒三十九、前途春秋に富み大活躍はいよゝゝこれからだ。夫人は浦戸村山本義三郎氏の女で、男兒二人がある。

山崎斌氏

明治八年七月二日生、香美郡吉山村の出身で村役場書記を振出しに香美郡役所書記高知銀行山田支店長を経て大正七年頃松尾倉庫といふ商店を市塚町に開業した。これは香美山田の松尾酒店高知支店で、氏はその店主となり肥料商と共營で焼酎販賣を主とし、昭和六年に現在の宏壯な店に移つ

たものである。取扱の酒は大關を始め菊正宗、神鷹、櫻正宗、月桂冠、ミヨシ正宗、世界一統、獨立男山、力正宗等々焼酌は牡丹、百合、その他アサヒビール、浦戸サイダシ、ヒゲタ醤油、ミツカシ酢等、外に各種種も取扱つて縣下の代表的問屋である。斯かる大きに店にして山崎氏は立志傳の人で濃厚な名望家。高知酒商同業組合長を數度、其他の公私事業に盡し近年は余り健康がすぐれぬが趣味は書畫である。息猛氏は學生時代秀才と謳はれた眞面目な人で二男氏は香美郡山田の舊家松尾酒造店の養子となつて活躍中である。

岡村三省氏

香美郡在所村出身の岡村三省氏は明治二十九年六月十日生。大正六年八月村書記を振り出しに大正八年八月助役、十年十月村長となり昭和十三年一月三十日、後から／＼と自分を突き上げて来る梅茂氏に村長をゆづつた。然し氏は昭和十年十月縣會議員に當選、本年から參事會員として縣政の樞機に參畫することゝなつたので益々多忙である。町村長會長、信組、鏡齒絲の理事、等もつとめたが現在は縣農會長で郡評議員たり、村長をやめた後も下知の谷協製材合資會社經營に盡してゐる如才ない外交肌の好丈夫で、長男憲作氏(三)は市商を出て住友生命東京支店に勤務、二男聰次郎(一)

三君は尋常六年在學中。

市原辰泰氏

香美郡杏林の長老山田町の醫師市原辰泰氏(六)の祖先は累世近江國三佐々木氏の家臣であつたが應仁二年二月道惠辰治氏が土佐の國守護職細川遠江守勝益に従つて入國し、隼人辰知に至りて長曾我部氏に仕へた。四代目隼人辰秀氏は盛親主の命により奉行役となり大阪屋敷に居住して居たが、泰氏亡國後は浪人となり再び仕を致さず、大阪に當時有名なりし眼科醫家里伊賀守の門に入りて學び、家傳の眼療残らず傳授を受けて歸國し、安藝郡伊尾木村に開業した。蓋し土佐に於ける眼科醫の始祖である。爾來一子相傳を以て累代其業を繼ぎ名聲が高く、時々藩主山内家より召されて御用を仰付けられた。其中でも彌惣左衛門辰壽の代に最も顯はれ藩公の信頼も厚かりしことは土佐名醫列傳にも載せられて居る。

現在の辰泰氏は辰秀から實に九代目を繼承したもので、嘉永四年に祖父源六郎辰昭の代に伊尾木から山田へ轉住したものである。氏は中學海南學校より岡山醫專を卒へ、本縣出身の彼有名な中濱東一郎博士の經營して居た回生病院に入つて内科を修め、次いで駿河台井上眼病院にて眼科を研鑽

し明治三十七年三月歸縣して現在の所に開業した。公職としては町會議員、學校醫、町信用組合理事、郡醫師會理事、縣醫師會議員等を勤めて居たが、昭和六年以來病氣の爲め一切の公職を辭して謠曲(喜多流)讀書等を趣味として居る。

氏には三男一女がある。長男の吉辰氏(三)は海南中學を出て昭和八年三月岩手醫專を卒業し、東京帝大醫學部眼科介補、泉橋慈善病院眼科醫局長、足尾銅山本山病院眼科部長を歴て十二年四月歸郷、山田町に眼科醫院を開業してゐる。趣味は圍碁、玉突、劍道は初段の腕前で父君と同じく濃厚な貴公子肌である。

二男又男氏(元)は東京慈惠會醫大昭和十二年三月卒業の新進醫學士で同校附屬慈惠會醫院内科に入り研究中。三男典彦氏(三)は高知高校理科を出て本年四月岡山醫科大學に入學した。長女壽美さんは土佐高女卒業後更に中村女子手藝學校特別科で磨きをかけ生花に堪能琴の名手である。

青木茂憲氏

四國銀行高岡支店長(昭和十一年就任)青木茂憲氏は實直な事務家の銀行家には誂へ向きである高岡郡上分村出身、須崎高等小學校を卒業し遠く東北の福島縣平町磐城中學青年學校に學び中途退

學、歸縣して大正二年高知銀行本店に入り佐川支店を経て高岡支店長となつた。趣味は讀書、圍碁弓道、夫人は高知市小川町川淵繁次郎氏の令妹で三男は小學在學中である。

岡豊功憲氏

由來交通文化の蔭には幾多の尊い肉体的物質的犠牲が潜まれてゐる。レール一本、これを一尺に截斷してもエネルギイと血の流れがあり、自動車路線の一メートルに、そこに功勞者の恩が感ぜられるのである。「土佐の樺太」「土佐の西藏」といはれた嶺北は無盡の林産鑛産を藏しながらあらゆる通に恵まれず文化に取り残されんとし學者にひとり土佐のみならず日本の古代の風習を保存する所として珍重されたものだ。然し大正十二年に嶺北自動車が市山田町を基点として通ずる様になつてから忽ち夜明けが來た。長い夢の扉を叩いた自動車文化のハンド、眼を醒ませた警笛、これぞ岡豊功憲(舊名常雄)氏その人である。

氏は本山町の出身、本山町では柿本常太郎家か岡豊家かといはれた素封家の生れ、市商を病氣で中途退學し大正十年商業銀行本山支店員となつたが約一ヶ年にして同社が解散するや大正二年池自動車及大杉組自動車を買収して嶺北自動車商會を起したのである。時に年齒僅か二十六、そして

三ヶ年間經營したがその間多大の損失を受けたが氏の愛郷心と俠氣、剛愎は交通機關中止に因る民衆の不便、嶺北發達の逆轉を憂へ、文化の芽生えの挫折を慮り斷乎として經營を繼續し、十四年遂に宮川長兵衛氏社長として株式會社と爲して隆運の波に乗り今日の盛況を見るに至り氏は現在本店主任の補佐役として活躍しつゝある。この嶺北線最初の大成功者はまだ不惑を越したばかりの四十二歳、愈々働き盛りの時代に入るわけだが、世の多くの成功者と一般、巨万の富を損失した事などは屁とも思はず不撓不屈、初志を貫徹した過去を顧みて自ら莞爾たるものがあらう。趣味は碁以外なら何でも殆ど行くとして可ならざる無しである。夫人は高知市中屋氏の長女であるがお子さんはまだ無い。

村田熊太郎氏

前長岡郡十市村信用販賣購買利用組合(大正十年五月創立)創立以來長らく組合長を勤めてゐた人として村の元老であり切れ者である村田熊太郎氏(六八)の名は鳴り響いてゐる。氏は又かつて三里十市耕地整理組合の副組合長を経て組合長となり、郡制時代にも郡會議員として活躍した。頭腦明晰加ふるに私慾無く正直剛直、決斷力優れ言ひにくい事もどん／＼言ふ親分肌の性質でこれ氏をして

村の大御所たらしめたもの。夫人は同村村田岩太郎氏の令妹で長男延壽(四八)氏は縣衛生課勤務、二男辰衛氏は農林學校を出て村の収入役、助役を經、昭和十年村長に就任、現在も勤めてゐる。四男は三里村岡氏の養子となり長女は北村多亥作氏に、二女末子さんは高知市梅ヶ辻の藥局岩原淳氏に嫁してゐる。これらの大親、村田元老の趣味は釣魚である。

村田辰衛氏

長岡郡十市村の長老村田熊太郎氏の二男、農林學校卒、昭和五年二月村の収入役となり九月助役となり昭和九年九月一日村長に就任して現在に及んでゐる。若手の村長であり乍ら村長就任以來著々と業績を擧げ昭和十年計畫の海岸線(工費一萬一千六百四十圓)パトンを受けて本年完成せしめ又七年計畫一萬七千八百圓の工作線、石土線は既に十年に完成せしめ、學校新築移轉(一萬八千圓)に對してはその内二千圓寄附金中千二百圓は縣外から集めることに成功した等赫々たるものがある。氏は若い時農林校の相撲選手として鳴らしたもので、前途まことに洋々たるものがある。

鈴江澄志治氏

俗に中郡と呼ばれる、長、香平野を見るにつけ偉人野中兼山先生の遺業に頭が下がる、兼山先生は言ふ迄も無く農の神であるが、其の農の神が現代の土佐に生れたならば、如何なる点に着眼したであらうか、考へる毎に興味ある題目である。後免町に颯爽として輝やかしき堅陣を張つてゐる鈴江農機商會は、縣農會獎勵指定の耨摺機、脱穀機、米撰機、發動機等々を製作發賣せる近代的商會でその製品は縣内のみならず朝鮮方面にも盛んに移出され、土佐の代表的農機商會として倍々名聲を高鳴らしてをる。

この商會の經營者は、長岡郡大篠村稻吉出身の鈴江澄志治氏で明治二十三年十月十日生、嚴父寅五郎氏は農を業とし、相當の生計を立てゝゐたから澄志治氏も何不自由なく成人し、丁年となるや軍隊生活に入り守備兵として渡滿、滿期後郷里に歸り家業を手傳ふたのであるが、その頃嚴父は友人の保證をした關係で、氏が二十六歳の時には少なからぬ負債を脊負はされ、農のかたはら二三年間日傭働きなどをし、朝は星を載きて家を出で、夕は深更まで夜業をつゞけるなど文字通り不眠不休の活動に限りある身の力を試みたので、此の期間は氏に取つての一大受難期であつた。

氏は天性思考力に秀で、創造力に富み、少年時より各種の考案に興味を持ち、一週間も食を忘れて發明に没頭することもあつた、斯様な頭腦の持主であるから大正六年、飼牛を利用して耨摺用土臼を運轉せしめ、耨摺作業を行ひ相當の成績を得て茲に自信の曙光を見出したのであるが、恰度その頃、農事試験場技師山岡真十郎氏等の指導獎勵の下に研究されつゝあつた石油發動機に依る稻摺作業及び耨摺作業等に將來性ありと着眼し、専心製作の研究に全魂を打ち込み、一面機械の改良に全智を傾注した結果、やがて其の苦心と努力は酬いられ、二、三年間に十數台を完成し、農作の餘暇之を賣却中、石油發動機の普及に伴れ注文者も漸く増加し、同時に機械の型式も大略完成、順風式廻轉數調節自由自在となり始何なる不良耨にても撰別容易なる揉の調節可能となり、大正十二年頃には六、七名の大工を傭入れて製作に従事する向上振りを示したのである。

この向上は従來の作業場にては不足を感じしむることゝなつたので大正十四年新工場を建て、木工機械を据へ付け、益々改良に腐心した甲斐あり、昭和二年頃には縣外に數台を販賣する等、いよ／＼倍々將來性あることに自信を得、こゝに斷然農作を全廢して動力用農機製作の専業に轉向した譯で、氏は現在に至る間に特許出願十數件の多きに及んでをる、氏の工場は大篠村にあるが、その敷地四百坪、建坪百七十六坪、販賣時期の使用工員六十人、亦た盛んなりと謂ふべきである、販路は縣内に於て普及數の八割を占め、年産の約七割は朝鮮向として盛んに移出、更に滿洲、北支に進

出を圖るべく待機中である。氏の如きは本縣農機のため萬丈の氣を吐く斯界の英雄で、地下の兼山先生も定めし我が後を得たりと喜んでをるであらう。

澄志治氏は、考案家に相應はしき寡言温厚の人物、今尙は頻りに考案の天才を閃かして改良に改良を加へてをる。澄志治氏夫人は曾て營業の第一線に立ち良人を助けて成功せしめた賢夫人である。長男治幸氏は縣立工業出身、現在經營の衝に當り躍進に拍車をかけてゐる、二男三裏氏は縣立城東中の出身目下出征中である、要するに鈴江氏の如きは稀れに觀る立志傳中の人物として最高の敬意を表する。

池本進氏

長岡郡大篠村といへば長尾鶏、長尾鶏といへば池本進氏をすぐ聯想する。それ程に池本氏は代表的な長尾鶏飼育家である。何しろ此の鶏は世界無類のものであるから、その代表的飼育者たる池本氏は又世界的な代表的飼育家といつてもよからう。元來長尾鶏は明曆の頃、同村篠原の武市利興門といふ人が地鶏と山鳥を交配して作り出したものといはれるが何にしても不思議な遺傳と飼育管理の苦心の結果である。山内侯はこの尾を以て長槍、鳶鳥に用ひ將軍家をして垂涎所望せしめ又參觀

の沿道民を驚嘆せしめたもの、従つて藩内の飼育者を保護せしめると共に藩外持ち出しを禁じてひそかに誇りとしたものであつた。

この特産地に生れた池本氏は明治三十七年縣立農林學校を卒業するや農業の傍らこれが飼育を始めた。明治四十一年には村費補助を得て大篠長尾鶏組合が組織され、大正五年郡補助、郡廢後は縣補助が得られ、大正六年頃には天然記念物ともなり國庫の補助さへ得るに至り飼育者も殖えたので動昭和六年頃大篠を中心に山田、城西、岡豊、後免、の飼育者を以て高知縣特種家鶏協會が創立され縣農事試験場長が組合長に大篠村長野本源吉氏が副組合長に就任するや池本氏は補佐役となつて活爾來、貴顯の來縣せらるゝや其の度に氏の飼鶏が御覽に入れられる光榮を擔つた。氏はまた同村産業組合理事で村會議員も現在まで二期勤めまた篠原農事實行組合長として青年指導に任じ殊に青年學校をして縣下の代表的ならしめた功勞顯著、昭和八年二月には全國農業學校校長協會主催、文部省後援の同校長協會より表彰された程である。又縣農基本調査、農林省有畜農業經營調査委員等を囑托されたことがある。本年五十一歳、資性温厚、質朴眞面目で家庭は長男寛(三)氏は神戸高校を出て横須賀海軍工廠にあり夫人は立田村島本君子氏の三女(縣立第一高女出)二男勇(三)君は父君の母校農業校を卒業し教員養成所にあり、父業を繼ぐ部門と思はせる。三男は小學、長女は他家に嫁ぎ二女は土佐高女に在學中である。

猪野重壽氏

町村長を三期も勤める人は縣下でも少い。徳望手腕健康の三拍子が揃はねばできない事である、香美郡片地村々長猪野重壽氏はこの稀なる三期組である。氏は明治二十五年九月八日片地村佐古鉾に生れ農林學校を中途退學し裁判所の書記、高知縣巡查となり退職後家居してゐたが間もなく大正八年村役場に入り書記を振出しに助役を経て村長になり實に一村の役場に二十ヶ年も勤続してゐるのである。以て村内の信賴がいかに厚きかを知るに足らう。現に香美郡第一區町村長會長である。趣味は讀書。夫人は三島村橋本大尉（出征中）の令姉で、長男潤（三）氏は海南中學を卒業後、父君の先蹤を追ふ如く裁判所書記となり安藝區裁判所に勤務、その夫人は赤岡町今西源三郎氏の長女を迎え一男一女がある。

井上綱次氏

井上綱次氏は土佐の重要産業たる土佐石灰輸出同業組合専務理事として昭和八年以來業界の發展につくし家庭よりも何よりも仕事が好きで精勵そのもの、一日として任務を荒怠したことが無い。

今日同組合の隆々、業界の前途春海の如く洋々販路が北陸、朝鮮、滿洲、支那と日増しに伸展しつつあるは、氏の功に負ふ所大なるものがある。

氏は長岡郡稻生村の出身で石灰業中の巨頭たる井上卯太郎氏の令弟。尋常高等小學校を卒へ獨學勉勵、自家井上商店の大阪支店たる大阪北堀江カネ十共同商會に入つたが壯丁となり明治三十六年陸軍入營、臺灣守備隊として在臺中、日露開戦するや鴨綠江軍に参加奮戦、三十九年一月除隊となつた舊勇士でその後高知聯隊に勤務し、軍を退いてから臺灣阪神方面へ事業計畫のため視察に赴き昭和四年六月歸縣、井上商店に入り令兄を援けることとなつた。本年五十七歳、温厚ながら硬骨で信念は斷じて挫げない。夫人は稻生村井上忠七氏の二女、長男喜代志氏は高知高校在學二年にして病氣退學し目下療養中である。

戸梶義正氏

石灰は土佐の特産中でも主なるもの、その販路は四國四縣を嘗め本州を覆ひ進んで今や滿支大陸に無盡の市場を見出して前途は春海の如く洋々たるものある際、石灰事業界に新知識の必要なる言を俟たぬが、五臺山の戸梶義正氏の如きは正にこの要求に應ずる人物だらう。

氏は海南中學出、東京高商卒、父君の石灰業に従事してゐたが次いで市立商業學校に、算術、經濟科教員として、二ヶ年奉職後、山地土佐太郎氏を社長とする南洋スマトラ、ゴム株式會社事務取締役として南洋に雄飛活躍してゐたが五六年前嚴父逝去のため歸縣父業を繼いで第一線に立ち現在の發展に至らしめた。

齡知命、いよゝ働き盛り、土佐石灰界人物多しと雖も氏の如き學歴と海外實地の經歷を持つ者は少くない。石灰の海外進出時代に無くてはならぬ人物だ。夫人は元縣議三里村種崎池川力太郎氏の女で長男は市商にあり秀才、二男は城東中學在學中、長女は縣立第一高女出。義正氏は圓滿磊落趣味は網打である。

竹内氏馬氏

町村信用組合長として光つてゐる一人、長岡郡岡豊村信用組合長竹内氏馬氏は同村中島の産、學歴は尋常高等小學校卒業のみで叩きあげた人材である。最初農業に従事してゐたが二十五歳の時村役場に入ったのが永い自治生活の始まりで、次いで収入役、助役と果進更に大正六年には村長に就任、二期八ヶ年をつとめその間信用組合を創立して今日に至り、外に村農會長を兼ね、昭和六年に

は産業功勞者として知事から表彰された。本年五十四歳の長老、竹を割つた様な性格で仕事以外に趣味なしといふ岡豊村に誂へ向きの産業自治体好個のリーダーである。長男光繁氏は縣廳會計課に勤務中に應召、名譽の負傷を受けて〇〇陸軍病院に加療中の歩兵少尉、光繁氏夫人は山本鹿吉氏の女で、一男がある。

野田忠氏

長岡郡五台山村東崎の醫院野田家は長會我部家の典醫たりし名家の統で當主の忠(キヨシ)氏まで四代内科醫を傳へてゐる。忠氏は明治卅八年七月廿八日、五台山村三石の野田家に生れ五歳の時叔父に當る東崎の醫師野田信治氏の世繼ぎとなつた。城東中學から東京醫專卒、醫專の學生時代に呼吸器病の權威永井秀太郎氏を院長(土佐人が副院長)とする永井病院で講習會があつたが野田氏はその講習會へ二ヶ年通つて勉學した醫專卒業後も東京市立板橋養育院(院長帝大教授碓居龍太博士)に留まつて一ヶ年半位内科を實地に研究したが養父野田醫師老齡のため家業をつぐべく八年前歸郷、以來大旱の雲克を望むが如く孜々として診療に従事してゐる、氏は野田家後取りの潑刺たる若人、天資濶厚にして、仁俠に富み、ために郷土村民との關係の親密なるは、思ふに、氏の人格を

識るに充分である。養父から村醫、校醫も受けついで多忙。

趣味は魚釣、夫人は高知の辯護士島崎達馬氏の五女で第一高女卒、茶生花に堪能、二男一女あり因に養父信治氏は昨年十一月逝去した。尙野田醫院には家傳の『毒下し』（煎じ薬）があり、同村の小兒の痢氣の灸と共に有名である。

山岡八郎氏

『土佐燕式』改め『ヤンマー式』農用機械、（試験場山岡眞十郎氏考案の山岡式唐箕も含む）、ヤンマーディーゼルエンジン代理店、土佐農機店合資會社營業所、山岡發動機商會といふ看板が後免町に注目を惹く、その主人が山岡八郎氏だ。

氏は三和村里改田の出身、本年四十三歳明治四十五年農業學校を卒業、農事に従事してゐたが三十歳の時後免町に轉居、昭和八年現在の所に移り三和村の土佐燕式改良農具の縣下販賣店として開業し今や縣下一圓に亘る販路を持つてゐる。昨年から小型ディーゼルエンジンを始めたがディーゼル時代の波に乗つて發展又發展した。公職としては町會議員三期、農會副會長二期、信組監事三年理事四年これは現在に至つてゐる。昭和六年には野田後免學校増築委員として大きい功勞があつた

趣味は事業と研究。長男二男共に小學に在學中である。

茲に特筆すべきは石油が益々暴騰或は使用量が制限されつゝある時、この対策はヤンマーディーゼルエンジンにより解決することである。即ちこのエンジンは燃料費が石油發動機の十分の一で足り、運轉費は總ての動力中一番安いことだ。即ち一馬力當り一時間重油僅かに一合、即ち一錢強。重油一斗で稻扱三町五反、糶摺六百俵、精米九十俵、製材杉板二百八間、挽材といふから山岡の斯業の前途こそ樂觀して可なりであり山岡氏の烟眠敬服すべきものがある。

田中實氏

縣下郵便局長中での最古老株は山田郵便局長の田中實氏である。中學を卒へるとすぐ郵便界に入り専心傍目もふらずに精進活動、正七位勳七等の榮譽を飾つてゐる。資性剛毅果斷、山田町の遞信事務をどつしりと護つて些の隙もない。趣味は謠曲と川の魚釣で、何よりもお役目大切の主義。

長男重彦（二六）氏は海南中學卒、次代の局長として繼承すべく大阪遞信講習所に入り昭和五年卒業するや父君の職を助けて局務に精勵してゐる温厚の人物である、必ずや完全に山田の遞信バトンを受けついで微動だにせしめないことであらう。

池知源治氏

長岡郡長岡村産業組合専務理事池知源治氏(五)は長岡郡長岡村上末松の出身である。昭和七年長岡村産業組合に入り八年専務理事となり、以前問題のあつた組合を引受けてガツチリと建て直した力と徳とはえらいものである。氏は縣立第二中學校(現海南中學校)第二期卒業生で明治四十年赤岡銀行に入り山田支店長に累進、土佐銀行と合併後も引續いて山田支店長を経て後免支店長に歴任、大正十一年退社し、十三年山田堰土功組合の収入役となつて爾來實に四期十六年勤めてゐる。以て如何に信頼があるかが判る。氏の如き人に農村の台所の切り盛りを任せてある地方民は何の心配も無く枕を高くして大安心で居れるといふもの。

資性温厚、趣味は圍碁と釣魚だが現在では多忙で中止してゐる。長男忠夫(元)氏は縣立農業學校を卒業し長岡郡繭絲組合(郡公會堂内)に奉職、その夫人は秋澤氏の長女で縣立女學校出、一男ありまた二男芳郎氏(六)は高知市本丁筋久万氏の養子となり農業學校出で現在出征中、三男光雄(三)も農業學校卒、朝倉に入隊中である。とにかく三人の息子さんをみな農業學校に通はせた池知氏の農本位、大地禮讚主義の徹底さは感嘆ものである。

武内春吉氏

鍛工郷の大楠植に負けじと長岡郡新改村に氣を吐く合資會社武内春吉商店の武者振りも勇ましい限りである。温厚篤實な春吉氏(五)といふ敏腕家を以てし、父子が文字通りしつくりと相輔けて正に鬼に金棒、土佐双物の代表戦線に香北に對抗して鎬を削つてゐる。當店では住込職工だけでも二十四五名、他でも商品の買入あり、土佐特産兩双鎌も特に蜂印を掲げ、榊新印の土佐庖丁、里光印片富印其他土佐鋸等通信部も仲々宣傳してゐる。

春吉氏は小學卒業後新改村鍛冶職田村貴藏氏に弟子入りして自ら鍛へた生え抜きで日露戦に出征一ヶ年、明治卅九年歸國して鍛冶屋を開いた立志奮闘のえら者、長男豊茂氏亦幼少の時から貧しい家を助けて二十四歳の時縣外進出を思ひ中國方面に販路視察に出張、漸次事業發展して内地北海道樺太、台灣、朝鮮、滿洲方面に移出、商品は縣農會の證明を受けるなど如何に製品の優良なるか知られる。事業以外、同家の誇りとすべきは一家三人の軍籍者を出したことで、父君と長男の外、いま一人二男春茂(元)氏も家業に従事中應召出征中で、都合三人現存の軍人の家である。斯ういふ強い男兒を持つ武内家こそ萬々歳であらう。長男豊茂氏の夫人は同村都築正一氏の長女で二男二女

あり、その長男茂康君(二六)は市立商業學校在學中である。尙ほ高知市本町旭軒旅館の經營者古谷氏は春吉氏の義弟で、春吉氏はその旅館への出資者の一人である。

松田義景氏

香長兩野を通じて山田町の産業、商業的地位は高い。殊に鐵道がつき全通して後の山田は飛躍的なものがあり銀行としても最も重視してゐる所、ここに四國銀行支店長として据えられた松田義景氏の人物が決して輕からぬことが判る。長岡郡國分村左右山の出身、縣立一中を四年で病氣退學し大正元年村役場に入り収入役として二ヶ年、大正三年四銀後免支店岡豊出張所主任、昭和三年六月後免支店次席、十年九月山田支店長に拔擢された。本年四十七歳、溫厚圓滿にして計數に明るく打つてつけの銀行家だ。

夫人は長岡郡上倉村岩原馬太郎氏の二女で子供が無いので令甥孝雄氏(三三)を幼少から世話してゐる。孝雄氏は中學校を出て彦根高商、同文書院、九州醫專、滿洲醫大の四校を殆ど同時に受験いづれもパスしたといふ珍しい秀才で、現在滿洲醫科大學に在學中である。

000

000

000

榎谷政鶴氏

榎谷政鶴氏といへば本縣出身官界人として且つ産業上の技術、學識を以て雷の如く聞こえてゐる長老である。明治四年五月生れといへば本年六十八歳だ。榎谷家は本縣の舊家、父祖みな文武に秀でゐた。氏も幼にして秀才の譽れ高く、身を學界に立てんと志し、郷里の海南中學を卒ふるや東都に出で大日本水産會水産傳習所及東京法學院を卒業、明治三十四年富山縣技師、ついで農商務技師として學殖を垂れ、更に台灣總督府技師となつて新領土の水産開發に努め、その技術と學識とは益々認められ大正八年朝鮮總督府技師に轉任、殖産局に勤務、後の朝鮮水産會副會長を通じて、在鮮十又三年恪勤精勵、半島の水産振興に大貢獻を爲したが尙氏には富山縣の前に北海道師範學校で水産科を受持つたり、本縣の雇員を勤めた前歴もあり、退鮮後は又本縣男子師範學校に新設の水産科を擔任して昨年三月に及ぶ等殆ど海國日本全國に亘り赫々たる功績を樹てた人で従四位勳四等がその功勞を語り光つてゐる。

人と爲り溫厚篤實、平民主義で田夫、漁人といへども何等溝渠隔壁を設けずために氏の赴く所民衆その徳を敬慕せざるはなかつた。本年の新年宴會には在郷軍人のみを招いたことなども一寸面白

檉谷功氏

い。夫人また内助の功多く若夫婦も、四人のお孫さんも健在で、家庭には和氣が充ち満ちてゐる。

縣下産業組合中の白眉はおそらく長岡郡新改村産業組合理事檉谷功氏であらう。大体、村の産組理事は資産と實地經驗に豊かな村の長老がなるのが世間の通例であるがわが檉谷氏は少壯實に三十四歳にして、就任(本年三十九歳)したのである。然しそれは氏の閱歷に照らせば敢て不思議でもない。大正七年京都第二中學卒業、大正九年には何億圓の安田家の富を管理する安田保善社に入り翌年安田銀行本店に轉じたが間もなく見込まれて第三銀行本店詰となり翌年には同銀行が大阪南支店を新設せんとするやその新設委員に任ぜられて來阪、本町支店詰となり、翌十二年更に九條支店詰となつた。その間第三銀行は安田銀行と合併し、檉谷氏は銀行界に於て日本の人物たるべく將來囑望されてゐたが昭和三年叔母死亡による家事の都合で止むなく辭職歸郷し、翌年七月新改村の産業組合に入つた。何しろ日本の大銀行で磨いた新知識と手腕ある人物として田舎に置くは眞に惜しいものだと評されてゐたが然し地方にも少しは斯ういふ人物のゐることが國家のためでもある。果然、昭和七年財界不況で各地の信用組合に破綻續出した際、この檉谷功氏が功を樹て、同村の組

合を救つたのであつた。げに人物は有事の際その力を現はすものである。忽ち昭和八年に専務理事に擔ぎ上げられ販賣購買利用に主力を注いで今日の同組合の發展隆盛に至らしめた。氏は東京の生れで、父君は佐野勝次郎氏といひ、その三男、そして檉谷政鶴氏三女の入婿となつた。貴公子肌の温厚な紳士である。尙夫人は東京實踐女學校出で二男二女あり、氏は多趣味だが仕事が多忙でできぬといつてゐる。然し余暇には土に親しみ家畜を愛してゐる。

入交喜三郎氏

日本の海軍陸戦隊は陸に上つても強いが、事業界に於て山で成功し海で成功した人がある。

香美郡田村甲六六入交喜三郎氏(明治七年三月十九日生)がそれで、氏は第一中學を病氣中途退學、私塾で國漢學を修め早くから山林に着目して成功、高知地方森林會議員、國見保安林施業森林會組合理事である。惟ふに文明と森林の關係は至大で「山林が亡ぶ」といはれてゐる程だ、世界史はこれを證してゐる。依つて入交氏の如き愛林家は人類文明興國の恩人であるわけ。今や氏は進んで老後終生の事業として工費四百万圓の物部川ダムに猛運動を起して寢食を忘れ奔走中である。これは下流水洞れの場合これを救つて香長平野を潤し且つその利益を縣の財源たらしめる計畫で氏は

既に自費で木曾川沿岸を始め全國主なる箇所を調査研究した。

尙忘れてはならぬ事は氏は海にも進出し前大東漁業株式會社創立當時から重役としてトントン拍子に成功相當儲けた事である。文章と字が上手で狩獵もやり特に剝製は名人である。養子隆三郎氏(三〇)は土電常務員中義雄氏の二男、名古屋高商卒で大阪の株式會社井上商店―大きい鐵商―の社員として活躍中、その夫人は市商校長丁野治喜氏の息女縣立第一高女出の才媛、昨年末一男を擧げた

柳瀬寛氏

長岡郡醫師會長として時めく長岡村の柳瀬寛醫師は香美郡在所村の出身である。大正元年京都醫專を卒業し高知市小高坂の佐々野病院に一年を勤務、大正三年現在の所に開業した。氏の嚴父は水らく高知縣屬を奉職した人。柳瀬醫師について何よりも特筆すべきは、兄弟愛の麗はしい事である。即ち自分には子供はないが仁術濟生の一方に餘力を擧げて實弟或は亡弟の遺兒らを教育してまた自樂を求めぬことである。

即ち實弟正周氏(三七)を東京高千穂高商に通學させて現在日本勸業銀行本店に就職せしめ、更に亡弟の遺兒高(七)君を城東中學に通學せしめ(現在四年)てゐるのである。まことに醫師社會内外を

通じ稀に見る奇篤美談として人々を感心させてゐる。宜なる哉昭和十三年一月七日郡醫師會長に滿場一致を以て推された。趣味はたゞ靜かなる、そして費用のいらぬ俳句のみ、朴城と號してスソノ誌の同人である。

片岡正幹氏

醫師にして自治政、縣政につくしまた實業界に足を踏み入れる等多汎に互り功勞ある珍しい片岡正幹氏の如きは世に少い。氏は吾川郡明治村の出身。明治二六、七、八年と高知市の私塾に學び三十年九月笈を負うて東都に出で濟生學舎に入學、三ヶ年にして卒業、直ちに開業免狀を下附され高知縣防疫醫に任ぜらる(三十四年一月)、翌年吾川郡長濱町に開業、村醫、校醫を勤めて十七年郷里明治村の自宅に開業、同じく村醫、校醫を兼ね、翌年村會議員となり更に翌年吾川郡々會議員、參事會員となり戦後の地方政振興に奮闘(氏の郡議參事會員は郡制廢止まで連続)大正五年吾川郡醫師會長、八年縣會議員、同參事會員の榮職に選ばれ、十一年越知製絲會社々長に擔ぎ上げられた。その郡縣公職中吾北道路開發に全力を盡したことは世人の知る所、郷黨の今に感謝して吾北の交通文化の大恩人として永遠に忘れざらんとしてゐる所である。昭和元年長岡郡十市村に移轉開業して村醫

校醫、村會議員、小作調停委員として今度は長南のために盡してゐる。趣味は俳句、號蕉外、書畫骨董も愛し、園基もやる。

養子進氏(三三)は師範出で教師を奉職後實業界に入り始めは東京、最近は大坂、名古屋等で大工場を經營せる事、人の知る所で、その夫人は吾川郡横島村大原氏の二女である。進氏の令兄省三郎氏は發明家として有名、進氏はその發明品で事業を起し成功してゐるのである。

刈谷熊助氏

農村振興に一部門、製繩機を以て突進し世を益し自らも成功し土佐の製繩王といはれる刈谷熊助氏(六)は長岡郡大津村北浦の人、自作農に身を起こして今や製繩機販賣の王座を占めてゐる。氏が製繩機に着目した動機は、養蠶不振の節農村に副業のないを遺憾として偶々香美郡岩村出身大阪農具商田所清次氏發案の機械の優秀なるを知りこれを農村に與へて不振時の副業たらしめんと大正元年頃からその製繩機の縣下一手販賣契約を爲しこれを専門に營みだした。然し一時製品(繩)の賣捌に困難を生じ機械の使用者も減少したので氏は販賣の責任上、且つは飽くまで製繩を發達せしめて農村を潤さんと、自ら繩の販路開拓に東奔西走、第一に稻生五台山方面の石灰商に交渉し第二には

園藝の盛んな方面に出荷用として交渉成功した。何しろ機械力による大量製繩とて安價なため一般荷造り用としても販路を得、今や田所式機械の聲價と共にその販賣量實に三十万貫を突破してゐる即ち同機は昭和九年兵庫縣主催農具共進會で金牌、十年四月全國改良農具展覽會並に實演會で感謝狀、其他實演會でも一、二等賞を受けてゐる。

刈谷氏の趣味は競馬で、馬主として駿馬を持つたこともある。夫人は土佐郡一宮村山本勝吾氏の長女、長男早稻美(三三)氏は縣立農業學校を卒へ父君を助けて第一線に活動中でその夫人は長岡郡岡豊村森本氏の長女。また長女榮子(三三)さんは五台山村石灰業刈谷秀穂氏の令弟(滿洲國奉天國際運輸課勤務)に嫁し三女茂子(二七)さんは土佐女子校を出て高知市内種崎町かめや呉服店に嫁し、二男盛喜(二五)氏は高知市城東商業學校を卒業後ハルビン國際運輸に奉職してゐる。

八井田茂實氏

長岡郡長岡村廿村の八井田醫師は温厚で人望家であつた、仁術積善の余慶としその一門は醫師として皆榮えてゐる。即ち茂實氏は城東中學を出て岡山醫專(現在醫大)に進み大正二年卒業、翌年四十三聯隊に見習士官として入隊、次いで丸龜聯隊に轉じ少尉となり滿洲守備隊に四年、十一師管

内に轉任して累進、前半生を功を軍事に樹て昨和三年少佐に昇進、仙臺を最終として歸郷父業を繼いで開業した。現在在郷軍人會長岡郡聯合會長、縣消防義會協議員、長郡醫師會理事等の公職にあり、勳六等(大正十五年)正六位(昭和四年)。年少の頃は腕白兒で學業が優秀であつただけに男らしい出世ぶりである。本年四十七歳。彼の香美山田の八井田病院(産婦人科)長として令名ある醫學博士寛氏は氏の實兄である。茂實氏は趣味は圍碁、謡曲、如才のない士で非常な人望家、目下軍醫として出征中である。夫人は岡豊村笠ノ川葛日氏の三女で、長女節子(二〇)さんは縣立第一高女を出て研究科にあり茶道、仕舞に堪能、長男一男君は城東中學在學、外に二男あり小學に在學中だが父祖以來の秀才統である。

宮村福太郎氏

長岡郡後免町に宮村電療所を經營せる宮村福太郎氏は齡古稀にして元氣壯者を凌ぐ概あり氏の歩み來し方は實に波瀾萬丈千變萬化を極めてゐる。

氏は土佐郡森村の出身、明治元年生れ、舊姓田村氏、宮村家の養子となつたが十六歳の時養父死亡、翌年福太郎君は一圓五十錢を懐中して高知市に出で擔ぎ氷屋を振出しに理髮屋の弟子、酒屋の

庫男、それから銅山に入つて人夫もやつたが生來の負けぬ氣性のため毎も自分から飛出し宇和島へ行つて床師となつた。そして劍道の修業、小さい剃刀持つ手で大きい竹刀を振り廻した變り者ぶり廿一歳の時免許を受け竹刀一本持つて九州へ押渡り、大分、宮崎、鹿兒島と武者修業、眞影二刀流を修め長崎では弓術師範山田長から弓道を習ひ東海道を経て明治廿七年東京に行く。時恰も日清戰爭に際し報國の爲め急遽廣島に來り二十八年人夫長として大連上陸、軍務公用に盡し戰爭が終つてから廣島に歸來したが三十一年涉鮮埋立事業に従ひ三十七年日露の役に村岡參謀長の知遇を受け陸軍御用商人として再び戦地に參じ活躍、戦後は鳳凰城に住し日本人會々長として十ヶ年、本溪湖に轉じ滿鐵の寄宿舎監督兼武道教師として年余、次いで天津領事館附弓術教師となつて三年、其間領事松平伯爵等知名の士に弓を教へた。これを大陸生活の終りとして久しぶりに歸縣し高知市本町に高知で初めてのホテル式旅館として高陽館を設け、蘇鶴溫泉株式會社の重役、高知武徳殿弓術教師(昭和十二年三月迄)市立商業學校の弓術教師囑托等の職に就いたが既に老齡とて昨年辭職、現在の所に移つた。性活潑開放、小軀だが渾身これ膽である。支那から歸つた當時は相當の蓄財もあつたが義俠的性格はこれを散ぜしめ、幾多の損失を受けた。長女は槇山村から養子さん美晴氏を迎へ氏は土佐セメント會社川口發電所に勤務し一男一女がある。

x

x

y

横矢庄藏氏

香美郡片地村の醫師として徳望高い横夫庄藏氏は明治廿四年一月四日同村に生れ、愛知醫專（現醫科大學）を大正三年卒業、直ちに佐々野病院に勤務してゐたが、現在の所に開業した。趣味は狩獵。夫人は高知市金子智氏の令妹で、長男武夫氏（三）は早稲田大學にあり二男庄次郎（二）君三男寛（一五）君共に海南中學に在學中である。

池本律氏

長岡郡大篠村は郡内切つて……といふより東郡、吾縣下での人物村である。そして同時に産業の村富める村、資産家の村である。物質精神共に秀でた理想的な和氣藹々たる村で、大篠出身者といへば信用があり、しつかりしてゐる。それもその筈、骨組を確りする整骨醫（醫師）池本律氏が控えてゐるから。げに池本氏の「人物」は長尾鶏と共に篠原の名物だ。開業は實に半世紀にも近い四十年前氏は明治元年八月十六日生れ、醫師として明治二十三年に開業したが元來は眼科で、二十五

歳の時東京の北里傳染病研究所に入り東大眼科補手を経て歸縣、高知病院内科部長をつとめ、ついで歸郷開業した。

溫厚にしてまた義侠の人で仁術は通り越してをり、かつて親族の没落を救はんとして大損失を受けたことがある。由來「親戚はいくらよくても當てにならぬ」といはれるほど親戚相互間は物質的には案外なものであるが、それを救済し甘んじて犠牲になつた氏の如き世間に稀なことで以てその人格が窺はれる。斯ういふ人物が長老として、たゞに骨を丈夫にするのみならず膝下を感化してゐるので村が立派にゆくのも當然だ。「趣味は酒」とは豪快な。長男龍彦氏は病院を手傳ひ、夫人は安藝郡和喰村貞廣龜太郎氏の二女、縣立第一高女出でお茶に生花が堪能である。三男治六氏は東京外語學校露語科に在學中で我が大陸策に應じて活躍するのも近い。

尾立良樹氏

「予に汝の國の青年を示せ、然らばその國の將來をトキ」と昔泰西の偉人が言つた通り凡そ何時の世でも、平戰兩時を通じ青年の良否によつて國の盛衰が決せられる。まことに青年は國の寶である。殊に非常時日本に於て青年指導訓練の必要はいふまでも無い。

香美郡片地村に於て十三年一日の如く青年指導に熱心、全く趣味化してゐる人がある。これ同村山田島の尾立良樹氏その人で、氏の多年の訓練指導によりどれほど國家のお爲めになる青年が出たかわからない。宣なる哉陸軍大臣寺内壽一大將から左の表彰状を受けてゐること

表 彰 状

勳 八 等 尾 立 良 樹

多年力ヲ青年訓練ノ振興ニ効シ貢獻スル所尠カラズ 仍テ記念品壹個ヲ授與シ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和十一年十一月三日

陸 軍 大 臣 伯 爵 寺 内 壽 一

氏は明治二十三年十月廿二日生、同郡鏡野高等小學校卒、家業の農鍛工業に従事してゐたが明治四十三年十二月善通寺野砲第十一聯隊に入隊果進して砲兵曹長となり大正四年十一月三十日退營、再び家庭に従ふ。傍ら在郷軍人會片地村分會長に選ばれ(昭和三年退く)大正十五年青年訓練、次いで青年學校指導員となり毎土曜日青年指導に當つてゐる。家庭は長男(一)氏は家事に従事、長女玉榮(二)さんは家居。良樹氏の趣味は青訓指導の外ない。尙ほ校長とは最も親交がある。



團 野 肇 氏

香美郡山田町で醫師を開業してゐる團野肇氏は京都府の出身である。父君は司法官、肇氏は大正十三年京都帝大醫學部卒業、同大學の松尾内科で研究後、大正十四年高知市追手筋で開業、十五年山田町に轉じて今日に至る。天資潤達、明治村の校醫を兼ね、町會議員の公職にもあつて地元人に劣ぬ愛町心盛んで地元の開發に努めてゐるが何しろ京都府の名家の出、殊に父君を司法官に持つて育つた士だけに純情玉の如く、一般に和氣霽然たるうちに軌を逸することがない。由來土佐と京都とは縁が深く土佐人にして彼の地で成功してゐる者もある、代りに京都人にして土佐に來り成功する者少しとせず、殊に刀圭界に於て然り、土佐は近代に仁術の点に於て京都人に負ふ所が大である。殊に團野氏は土佐人の剛直な性質とピタツと一致してゐて自ら土佐人になり切つてゐるので頼もしい限りである。趣味は劍道、玉突、競馬と活動的で多趣味である。夫人は小松氏の長女鈴惠さん(縣立第一高女出)三絃を能くし一男二女あり小學に在學中である。

000

000

000

池内實行氏

本年四月高知港が開港場に指定され對滿支貿易の機運勃然と起り官野の眼が一齊に大陸に向かつたが少壯氣鋭の人々が徒手空拳ひたすら熱と力とを以て東奔西走するに比しとかく富豪實業家が狐疑逡巡の風あり、この實狀を見て憤慨措かず蹶然七十の老軀を提して大連より歸縣鏡川の南岸堤上の嗣子池内信明方に陣取り高知市を睥睨するや往訪する青壯年引きも切らず、池内實行の名を強く縣民に再認識させたものであつた。池内翁が白髯を捌いて高知人士の無氣力を叱咤するや忽ちにして濱川金十郎氏の大洋丸提供となり高知阜頭に山を築く竹材は、掛聲も勇ましく出てゆく……ひとり對滿支貿易の草分けたる恩人であるばかりでなくその滔々舌端火を吐き風雲を捲き起すていゝの激勵が後進を鞭撻立志の原動力たらしめ積極奮闘の火を興へし功亦大であつた。

翁は香美郡香宗村中ノ村に明治三年生る。嚴父文吉郎實武氏は瑞山先生の門下にて勤王の志士たり劍道は石山源六師と雙壁と稱せられ戊辰の役に戦功あり。實行氏は幼にして彼の大圓先生等と維新の大業を圖りし森新太郎が漢學と劍道を以て青壯年を指導せる嶺南社に入りて其の薰陶を受け後職を小學校教員に奉ぜし事十數年、三十四年(二十八歳)野村組の通運會社須崎支店を設置するに際

し選ばれて之を擔當して實業方面に乗出し、兼て度量衡、樂器、文具、金物、木材、和洋雜貨、建具表装等種々の方面に發展し一時は數多の豪商を啞然たらしめしも士族の商法とて大失敗を來し、裸一貫の窮地に陥りしを時の高岡郡役所課長檜垣直枝氏の同情により郡書記に採用せられしも、抱負大なる氏は之に甘んぜず海外に勇躍の念勃々たるものがあつた。偶檜垣氏の義兄弘松歸三惠氏の滿鐵の樞要の地位に在りしを幸に氏の推薦により大連民政署に採用せられ後滿鐵に轉じ在職十四年にして關東廳、四ヶ年の公職にあり大正十四年退官した。

氏は元來書道に熱心にして能書たる事は縣人に於て知られ氏の渡滿に際し揮毫を乞ふもの多かりしが出發間際迄需めに應じ今尙ほ珍藏せるものもある。而して渡連後奉職の傍夜間又は日曜を利用して指導に寢食を忘れ今迄約八千余の門下を教へた、現在は百八十乃至二百名の通學者あり外に高位高官知名の士を主として教授、旅順あたりまで出版し三ヶ所程で教授してゐるといふ盛況である。又その間諸學校から高給で招聘される事櫛の齒を引く如くであつたが應ぜず、たゞ羽衣高等女學校から『車賃』との風變りなとして強いての誠意懇倒に二月ばかりの約束を八年間教授し病氣を好機と昨年一月辭退した。書風獨特、筆勢彌々神に入り、殊に技巧的書家と撰を異にし百難撓まざりし經歷と自利を離れた天下の志に生きる人格の躍動せる雄勁の筆蹟は卓然として類を絶つ。現に久邇宮様を總裁に戴き清浦圭吾伯を會長とせる權威ある泰東書道院の役員で日本書道の幹事、書道各雜誌

の審査員として瑞洲の號は郷里十佐よりも字の本場たる支那滿洲に名高く、勿論土佐の生んだ書家中第一位であり全國一流の班に列してゐる。

氏は在滿三十一年大連の縣人中の成功者としてよく縣人の面倒を見、來連者を引立て進んで野村茂久馬氏を説いて對滿輸出の特産會社を起こさしめ更に開港第一のトツブ輸出として支那に利用廣き竹（土佐と鹿兒島が適し孟宗竹、眞竹等一年十萬本の捌け口あり）の取引に乗出し、將來は石灰野菜、酒、木炭、墨表等、縣益を中心に産業を開發せんとし、先づ土佐人の尻の穴の小さく眼前の利にのみ捉はれる風あるを叱りに歸つたのであつた。がその際戦死者の墓碑録の揮毫を數を限つて無料で應ずる旨表發する等、その氣概はたゞの書家でなく、鏝たる元氣、何時間でも論ずる所全く國士の風尙がある。因に翁は多趣味で漢詩、俳句、川柳、碁、何でも來いで書號を瑞洲、俳號を不言庵と稱す。

大井治茂氏

吾川郡長濱町の醫師大井治茂氏は長濱町出身、明治十七年九月二十七日生、明治四十一年大阪高醫卒業、現地に開業兼て對岸三里村種崎に診療所を開設し、保健組合囑托醫であり附近五ツの學校

の校醫、一ツの村の村醫を兼ねてゐる精力絶倫の醫師である。身長は六尺にも近い偉丈夫で鐵骨の如き頑丈な体格の身体を以て朝早くから夜遅くまで或はモーターサイクルを飛ばし或は自動車、人力車でと殆ど寸暇として席暖まり身体の休まる餘裕がない。夫人は香美郡赤岡町樋口豊治氏の令姉でお子さんは男三人女一人あり、令兄大井治久氏は姫路市で公證役場を開き、令弟治敏氏は縣林業課技手。大井氏はたゞ働く一方で趣味は皆無だ。

富永實範氏

吾川郡長濱町廣願寺住職富永實範師ほど學識のある坊さんは絶対に縣下に無い。氏は明治三十二年十二月前任職富永了海師の二男として長濱に生れた。父住職は本派本願寺布教使（今の實範氏も同じ）であつたが南關組長四州教區會衆といふ高位にあり長濱部落を押へ、景仰の中心、教化の本尊として徳望を負ふてゐた品位高き人格者であつた。實範氏は前俗名榮枝、東洋大學印度哲學科を卒業後、一時高新聞記者として文才を謳はれ、後アメリカのウイシコンシン州立大學に社會學を學び歸朝して京都本派本願寺布教使を兼ねて東京の小菅、九州の小倉、福岡等の教誨師に歴任、そのうち左右極翼の大もの、檢擧があるや、これに當るべき教誨師が無く、遂に氏が福岡から拔擢されて

市ヶ谷刑務所の教誨師となり三、一五事件、四、一六事件等所謂中間検學に揚がつた左翼の巨頭連や井上日召、血盟團の橋孝三郎らを教誨し、それら巨頭から敬服慕はれた状は雜誌への寄物や感想状に度々富永先生の名が出てゐるのでも判る。蓋し富永師の深く博い學識は教誨師中で並ぶもの無き結果だ。父任職逝去後止むなく榮位をすて、歸郷、寺を繼いで僧衣を纏ふたが現に四國高松保護觀察所高知縣下囑托保護司といふ要職にあり本願寺から稟授二尋を授けられてゐる、雄辯で理論に熱があり感化力絶大、その東京時代は思想善導講師として土佐へ招かれたことがあるが、歸郷以來も各地講演にいそしんでゐる。又寺では最初は自費を投じて保育園を拵へオルガン、スベリ臺等漸次設備を完成してゐる。趣味は碁、夫人は花惠、長男徳孝君は秀才で、城東中學に本年合格、一年在學。

岩井叶氏

香美郡山田町はカラ傘の名産地で特長は堅牢無比、土佐紙純生漉、山田傘の名聲天が下に鳴つてゐる。一ヶ月約一万本、年産八万五千本、年産四万餘圓が岩井叶氏の工場から一人で町産の半分を製造するといふ豪勢さ。

今でこそ盛んな岩井氏も明治二十六年四月五日、貧しい家に三人兄弟の一人として生れ小學を卒へたのみでつぶさに艱難辛苦を嘗めた立志傳中の人である。即ち小學を出ると同町上島傘店に奉公し三ヶ年苦勞、ついで赤岡町荒物商野市屋に轉じ三ヶ年、十九歳の時片地村の四國製絲株式會社に入り、辭して獨立傘商を開店したが大失敗、然し高岡郡越知町三福製絲所に工場新設のため特に招かれ一ヶ年間精勵して入營、歸郷後再び傘商を開店あくまで初一念貫徹に邁進、今度は前回の失敗に鑑み用意周到、初め兄文仲氏の部屋を借り三ヶ年間にして現在のヶ所に變つて努力奮闘特に製造の能率に重きを置き染紙法の機械考案に寢食を忘れて研究、遂に万歳、二十七歳の時これを完成した、これで三回染紙の手間を一回に短縮する様になり昭和六年製紙工場を新設、傘製造に要する一切のものは自宅で出来ることになつたのである。もはや大成功である。然も貧困の裡に夫人（同町川井武平氏長女）内助の功も没することができぬ。趣味は魚釣だが事業隆盛に伴ひ多忙でその暇もないさうだ。長男進（二〇）君は青年學校に通ひ、二男禎三君は海南中學に在學、長女は同町河上氏に嫁ぎ二女は土佐高女出、山田校訓導岡林氏に嫁ぎ、三女は小學に在る。

松田榮之助氏

安藝町で大製絲工場を営み藝東に松田ありとて縣下は勿論縣外迄も聞こえてゐる松田榮之助氏は本年六十四歳。安藝の出身で立志傳中の第一人者である。お父さんは安藝町でさゝやかな豆腐菟菘業を営んでゐたので自分は十五歳で高知市に出で通町田村屋（質屋、古手）に奉公しついで播磨屋町の（米安）呉服店に移り二十一歳の時安藝の山崎呉服店に歸つた。やがて玉子、皮革の商賣に自立してゐる中絲取りの有望を知つて絲取りを始めたのが今日大成功の基、大正二年頃電気操作時代に入つて絲取りが機械化され（先づ谷氏が安田で始めて安藝町も倣ふ）たので氏も機械化し次第に業務擴張、乾燥場の關係で劇場跡の大建物に移り現在七十釜を据え製絲工場の坪數實に三反、工女百人を擁するに至り養蠶實行組合を作り教師を雇ふて講習を開き隆々たるものである。一方上町に製材業も十年以上營んでゐて此の方にも七人程使つてゐる。今も毎朝四時に起床し全魂を事業に打ち込んで六十四歳とも見えぬ張り切つた元氣、趣味に狩獵もやる有様だ。令嬢一人あり、長岡郡前ノ濱大原豊馬氏の令弟を養子に迎えてゐて現に警察界で知られてゐる山田益夫氏がそれ、氏は警部まで進んで病氣退職後再び警察界に復し警部補として今春本山署にあつた。なほ松田翁の夫人は三年

前逝去した。

川崎春太郎氏

吾川郡水産會長川崎春太郎氏は明治十三年生。御疊瀬村の人。二十五歳から漁業界の一人として乗り出したが明治四十二年帝國漁業規則ができ翌年組合を組織せねばならぬことになつたが代書人も願書の書方を知らぬ頃氏は苦心一ケ年にしてでつち上げて申請した、これが今日の南部漁業組合である。これに對し當局では南にできたから北もやれといふので一、二年後に北部もできて南北に對立することになつたが、川崎氏が最初作つた時は別に南北分立の肚ではなく御疊瀬村漁業組合並に信用組合を組織する考へであつた。當時は杉山知事、森下吾川郡長時代で川崎氏三十二の歳。郡水産會は無く漁業組合理事といふのがあり香長吾の三郡聯合會があつた頃だ。三郡聯合會は總代的議員、幹部集まりで氏はその組に入つてゐたのが中途台灣へ行つた。歸つてから改選にまた入り、新制の郡水産會議員となつてゐるうち、村田茂稔氏逝去（今から八年前）に伴ひ郡副會長に就任、昭和七八年には縣水産會を代表し安藝、高岡、幡多、中央、市らの代表と共に東京へ行つて陳情運動等に盡力、四年前遂に郡の會長となつたもの。村の方では約二十年間四期の村議をつとめ昨年八月に退

いた。その前四年前には最高点で當選してゐたが理由あつてやめ、三年間臺灣へ働きに行つてゐたことがある。同村で二人しかない選舉肅正委員の一人、社會教育委員、金錢債務臨時調停委員も囑托され、又村の埋立に功があつた。氏は曲水と稱し俳句ヲニハをよくし土地獨特のヲニハの達人として縣外にも知られてゐる。長男涉(三)氏は家居。二男澄男氏は高知市で實業界にあり、長女は種崎の池内氏に嫁し二女陸惠さんは二十四歳で家事にいそしんでゐる。

町 先 氏

えら者の多い香美郡山田町に町長たる人は余程しつかりした力と徳の持主でなければならぬ。彼の明治から大正に亘り縣政界に鳴らした松尾富功祿氏、その松尾氏を生んだ山田町、その永年町長として神の如くいはれてゐた山田町、そこに松尾氏の第二世といはれる稀な人格者で敵が無く政黨色も持たぬ温厚篤實の町先氏が新時代の町長として据えられたのが昭和九年である。本年五十歳平和の山田はおかげで微動だにせず、氏の自治体施政の將來も永遠的なるを約束してゐるかの様だ。縣立一中出身、家は素封家、製材材木商を經營、町議を二期つとめ、最近は一萬圓位投資して人絹織物機を購入し工場を起こしてゐる。腕は二期に亘る町政盡力で既に十二分に認められてゐるから

町勢の伸張期して待つべきものがある。長男は城東中學、二男は小學校、長女は土佐女學校にいつも在學中。

秦 親 芳 氏

『西に杉、高知に溝淵、東の秦』と並稱される法醫學の權威者の一人、香美郡山田町の醫師秦親芳氏は片地村影山の出身明治十九年一月生れ。明治四十三年熊本醫專卒、嚴父急死のため故郷影山に開業、大正八年現在の所に移り、片地、大楠植の村校醫を二十餘年勤め、山田校醫は五年勤めてゐる。温厚の内に剛毅果斷の人。氏は秦の姓の示す如く長宗我部家臣の系統で三百餘年の間醫業を傳へ、現在も兄弟三人共に醫師である。山内家に遠慮して祖先莊扶氏の時代より上村姓を名乗つてゐたが六十年前、親芳氏の父の時代秦姓に戻つたのである。親芳氏は法醫學の研究に後半生を打ち込むとの事で山田署へも毎月講義に行つてゐる。

夫人は陸軍少將功三級勳三等江口昌條氏の二女、熊本尙綱女學校出で多趣味、特に生花をよくするが女子として自動車運轉手の免許を得た初めての人である。長男は夭折し、二男親公(五)氏は大阪帝大を本年卒業目下大阪帝大婦人科教室に勤務中である。

鍵山喜時氏

今は香美郡片地村郵便局長として従七位（昭和十一年八月）勳八等（昭和八年十二月）の厳めしい肩書を持ち村會議員四期といふ村の名望家たるを裏書する身分の鍵山喜時氏であるが、その地方自治乃至産業にのこした足跡は大きく且つ輝かしいものがある。氏は明治十八年五月二十日同村影山に生る。舊二中（現海南學校）を卒業後一年志願兵として野砲兵入隊明治四十四年陸軍砲兵少尉に任官、明治四十三年村助役となり郡書記となり（十一年勤務）大正十年十二月郵便局を繼承、その間信組受難時代の村信組長を立派にやつてのけ、四國製絲株式會社を買収して鏡繭絲販賣組合の創立に當つては創立委員長として奔走、創立後組合長となり、昭和五年片地外大楠植、佐岡、曉霞、美良布、在所、横山、上葦生等香北一圓を區域として組合の下に合併せしめ今日の隆盛に至らしめたその基礎的功勞は眞に偉大である。（昭和九年に繭絲を退く）、資性溫厚謹直、趣味は鮎釣と狩獵長女は女學校、二女は小學に在學中。夫人は長岡郡岩目藤吉氏の二女で土佐高女出である。

000

000

000

埴田福太郎氏

安藝と並んで香美郡徳王子村は縣下で代表的な瓦の産地である。それも安藝の方は文化の中心高知を距る事遠いだけに生産品が何となくモツサリしてゐるが徳王子のは体裁優美典雅、香郡藝術の粹と稱され、品質の堅牢は勿論、名聲は縣内外を歴してゐる。蓋し香美郡の地たるや殊に徳王子はやんごとなき村名の語る如く平安の京と因縁深くて昔中央の文化は葦生郷を経て此所に榮え數々の工藝品を生み例へば大楠植の鍛工の如く山田附近の陶器の如く夫々原料を求めて打ち建てられ其他種々の藝術と文化とは今日なほ痕跡を留めてをり一帯に香美郡人は藝術に秀でゝゐるのである。その技術と良質適當の站土が合致せるものが即ち徳王子の瓦であり而も世と共に人は増し家が稠密するに伴ひ益々發展して今日の隆盛を見るに至つた。特に近年高知市が市隣を合併し非常な勢で戸數が殖え新住宅が建てられる世運によく應じ、最も大切な頭上の防護、風雨霜露及熱射に對するトチカたる屋根の需要を極めて圓滑に満足を以て充たしてくれつゝある『秋源』印の瓦、京來の工藝、古來の傳統、香郡の地恵に對しわれらは、歴史的感謝を覺える。徳王寺出身にして縣民のためよく圖る政治家池田頼信氏が縣互同業組合長として『物』と『人』其々の代表たるも宜なる哉と思はれ

るのだ。

古き歴史の此の村でも最古の「秋源」瓦は名もふさはしい埴田家の祖先傳來の輝かしい業で、初代は銀右衛門、次が源藏、三代が徳太郎氏で未だ健在、福太郎氏と共に活躍「最古にして最新」を誇つてゐる。福太郎氏は明治廿六年十月生れ、城山高小を卒へ二十歳頃迄は嚴父について農及び瓦業を繼いで農に工に、商に撓まぬ努力を續けてをり、資性實直にして俊敏、一時は高知市内廿代に支店を設けて大いに活躍したが令弟久義氏病氣のため支店は止めた。現在は瓦の外に農業の方では果樹園(蜜柑)を經營してゐる。福太郎氏は又仲々の子福者でいづれも秀才揃ひ「秋源」の將來は益々堅牢に明朗に、縮々と續くことを約束してゐて、瓦の前途は万歳だ。即ち夫人は野市町濱田繁馬氏の長女、その間に五子あり長女八重子さんは土佐高女卒、香宗村の六久保氏(大正村田野々の營林署勤務)に嫁し、二女榮子さん(三)も才媛、城山高等を卒へて、降る様な縁談の中にまだ家庭にあり三女晴子さんは野市の濱田氏(お母さんのお里)の後繼ぎ、一男國富君は小學に、四女公惠さんはまだ幼い。



幾井眞水氏

高知縣會は昭和十年の選挙に香北から「熱の人」幾井眞水氏を迎へて少なからぬ強味を感じたが彗星の如くこの人に歸り去られて忽ち寂しさを感じた。

幾井氏は香美郡大楠植村大法寺の人、高等小學を卒業して農事に従ひ騎兵第十一聯隊に入營、昭憲皇太后御大葬には同隊下士卒代表として參列、除隊後は郷里の村収入役に當選、然し氣概ある氏は青雲の靄圖を胸に出郷して大阪府警察部巡查を拜命、傍ら關西大學法科に通つて研鑽しその知能を先づ郷里で實地に試さんと歸縣、地味な山村開發から手固く始めたのはえらい。果せる哉在郷軍人分會長になり、村會議員に推され、信用組會長と進み(現在迄八ヶ年間繼續)實力聲望の歸する所、昭和十年縣會議員に立候補して堂々當選、山村農民の味方として縣會に萬丈の氣焰を吐いたこと人の知る通りであるが峻嚴なる選挙違反摘發に連座して失格したのは返すくも惜しいこととされる。即ちその判決さへ「選挙被選挙権を停止せず」とあつたのでも判る。これは日本で初めての判決である。宜なる哉郷黨の信賴期待は氏をその儘には置かず(十二年三月)村長に推載し、今や氏は村長と信用組會長を兼ねて裁決流るゝが如く更に時局に際し高知縣馬主協會々長に推され其絶

綸の精力と經綸とを傾けて公事に盡しつゝあり、骨があつて精悍な一面人格圓滿、人なつこい飄然さを持つてゐる。長男志澄(三)氏は海南中學を出て高知縣巡查を奉職中で、長女は縣立第一高女を出て長岡郡久禮田村徳橋氏に嫁し二女は土佐高女五年在學中である。

武市義吉氏

吾川郡御疊瀬村長(二年半前から)に納まつてゐる武市義吉氏は誰知らぬ者のない程縣政界で鳴らした大ものだ。氏は土佐郡布師田村出身、慶應三年九月二十日生れといふから齡も長老だが体格も頭腦も壯者さながら、五十臺に見える頑丈さは實に驚くべきもの。

二十歳に妻帯する迄は一宮村の島田正幹先生にいつて漢學を修め、後農業をやつてゐる中に郡農會に關係してゐたが四十一才の時村が學校改築問題で南北に分れ紛糾した際村役場に入つて強引で反對を押切り無難に學校建築をやつた。これ氏が政界に乗出した腕試し、その後郡農會の幹事胎中氏のあとへ入ることになつてゐたが安岡寅衛氏の諫止で村長に留まり、改選二期目に潮江の楠瀬氏の後を襲ひ土佐郡町村長會長となりついで別府鹿太郎氏の後任として土佐郡農會長、次第に公生涯に趣味ができて縣會議員となり、十余年間縣下町村長會長をやつた。政界に順じた氏であるが元

來政黨色は無く、郡農會長時代には黨弊を郡内に説いて廻つた程である。大正九年信用組合を村に組織し現在迄これに關聯してゐるが、何といつても愉快な思ひ出は縣議時代で

彼の竹島敏夫氏が新川改修耕整の問題でこれに反對すべく勸業委員を欲しがつたのでこれを譲り武市氏は豫算決算委員をとり自轉車税八千台分の遺漏を抑へた有名なエピソード。また縣下漁業收入六百万圓を三百万圓に見積り税を軽くしてあつた点、縣歲計預金と銀行とのからくり捌扶、或は縣町村長會長時代の濱口内閣減俸問題(小學教員減俸問題)市郡の家屋税比例問題等華々しい活動ぶりは枚擧に遑がない。

然し氏はもとゞ政界に野心は無かつた。たゞ勢の赴くまゝに重要な職につくや權威に屈せず情實不正を排することに氏の剛直な性格と戰鬥力とをピンノと遠慮なく現はして行つたのみだ。天性農業に興味を持ち、愛娘養子さんの逝去以來、その遺兒たるお孫さんを撫育し乍ら郷里布師田で田園趣味に浸つてゐたがお孫の純さんも第一高女に通學する程成長したので引つ張り出されて何の因縁も友達も無い所のこの御疊瀬村長となり、村事に全力を捧げてゐるのである。

▽

▽

▽

鍵山豊治氏

香美郡片地村船谷といへば近年は船谷山の松茸狩を以て高知市からビクニツク客を吸ひつけ著名であるが、昔から片地船谷の苗木として有名な所。香長はいふに及ばず縣下に苗を供給せる片地の苗木の元祖は船谷成馬といふ人である。五十年前の創始にかゝり船谷苗木株式會社の苗圃地はかつては八丁歩にも及び明治四十五年から大正四五年頃迄各營林署に納めたものだ。

鍵山豊治氏はこの船谷成馬氏の三男として明治廿八年八月一日に生れ十八歳の時親族なる鍵山家の養子となり大正四年朝倉に入隊、六年除隊(伍長)大正十五年青年訓練所が設置されてからその指導員として四ヶ年間盡力し、昭和六年片地村郷軍分會長に就任、十一年退いた。一方業界の方では大正十一年立田村の井上氏と殆ど同時に香美郡での最初として製材業を開いてゐたが、昭和九年に令兄寅太郎氏の逝去に伴ひ寅太郎氏の家業酒造業及び、苗木の業をも繼承することになった。蓋し船谷成馬氏を親とする苗木業も寅太郎氏に繼がれてゐたのがその逝去で一切鍵山氏に移ることになったのである。而してその酒造の方では酒銘は「國の譽」を醸造。鍵山氏の趣味は愛馬で現在土佐競馬協會副會長でゴールインの名馬の子(三歳)を始め二頭を飼育してゐる。家庭は長男稔(三氏)は城

商を卒業後、製材、木材業に従事、二男牧雄(二巴)君は城東中學に在學中である。

原福馬氏

鍛工王國香北の一角片地村は鋸鍛冶の村として縣下で代表的で、「片福印」は更にその代表的産物である。これは香北にその人ありと知られたる原福馬氏の生産で原氏の土佐鋸製作所は縣内外に強く認識されてゐる。原氏は同村影山に明治十八年一月元旦の大吉日に生れた。舊姓鍵山、十五歳の時山田島の尾立常次氏方の弟子になり修業後廿三歳の時同村町田の原家へ養子となり、明治四十年九州地方を主とし、その他諸縣各地に人工鋸の販路實地視察に赴き、歸來愈々力を入れて値を割る迄良品の生産につとめた、蓋し氏が職人肌の嚴直の性による所、加へて手腕家として自然に業は太つたが良品たる事に於ては益々トツプを切つてをり各博覽會や共進會で金銀牌を受けた事數十回。

更に氏には公共事業につき特筆すべきものがある。此の地は香我美橋の西岸、山田監物の居城たりし談議所城の城址である。主君山田基道こゝに漁樂に耽り、老臣監物の諫を容れず、遂に天文十八年八月廿三日長宗我部國親五百餘騎に攻められ群臣ら狼狽する中に監物奮戦して壯烈な忠死を遂げたところである。山高からす墟宏大ならずと雖も眺望絶佳、香長平野は申すに及ばず一眸に、遠

く太平洋を望む。數區の廓址所々に散在し東は懸崖數仞、物部川の深淵に臨み、西北は高峰峻岳を控へた名所。原福馬氏はその荒廢を見るに忍びず數千圓を投じて買収し、西、岡豊城に於ける西田良氏と好一對、自費公園の双壁である。有志後授の下に櫻を植ゑ、(昭和十年には休憩所を設く)賣店をも開店せしめて一般に公開し、大衆の娛樂場としての設備を逐次改め整へてゐるので相當巨額の金があるわけだが原氏は公衆のために聊かも惜しいとしてゐない。眼下懸崖を浸す碧潭、或は急流の清澄には鮎、イダ、鱒等の味覺もあり、遊覽地として縣内外人の受ける惠みは大きい。原氏はそれでゐて自ら何の娛樂も無い。趣味は仕事一式、全く他人を喜ばせるため働いてゐる様なものだ。長女増美(五)さんは安藝郡穴内の小松健作氏の二男豊茂(三)氏を養子に迎へ一女がある。

都築兵左氏

長岡郡大篠村に宏壯一城廓を成す縣繭絲(組合製絲工場)の理事長として大屋豪を背負ふ都築氏は長岡郡西豊永村中屋の産、明治十七年十月五日生。小學校を卒業し、潮江の人元小學校長峯氏の開いてゐた郷塾猶興學館で三、四年間漢學を修め明治卅七年入隊、三年の後除隊後農業に従事、ついで村役場に入り収入役となり三年つとめ助役を一年ついで三十三歳の時村長になつて三期十年位

村政を料理し豊永の山奥から縣下的に頭を擡げた。大正七年村長時代に信用組合を創立し組合長を兼ね農會長となつては道路問題即ち大正七年頃谷郡長時代、穴内から安野々に至る南岸線の問題を片づけてこれを完成、濱口内相當時から濱口首相時代にかけて太田口驛問題で二回上京運動する等功績を樹て、縣繭絲に理事として入つたのが昭和四年で、九年六月に理事長となつた。その間縣信聯の監事も二、三年つとめたが何しろ氏が縣繭絲理事長になつたのは昭和八年の絲價慘落のあとの大問題後山地氏がやめてその後を引受けたので並大抵の苦勞でなかつたが氏は立派に陣容を樹て直し坐繰を小田式多條機(百台)にする等機械改善を斷行して能率と品位(絲質)向上を志してこれを完成、今や長郡全部と土佐郡布師田、香美郡前濱、立田を含む二十五ヶ町村を組合傘下に收め供繭戸數實に三千、本年の如きは九万乃至十萬貫の供繭を得た程である。

趣味は仕事だけ。長男良宏氏(五)は郷里の高小を出て役場に在り、次男敏夫氏(六)は海南中學を卒業して大篠署の特高に三男弘身氏(三)は京都高等繭絲學校實科にあり、長女は新改村濱田素海氏に嫁ぎ二女(二)は家庭にあり生花、お茶に堪能である。

x

x

x

松岡庸樹氏

稻生村の元老松岡氏は、本年六十六歳である。生れは同村井川、尋常小學を卒業し十市の金比羅様の宮地神職につき勉學、十六歳の時村役場の書記となり教師となり、二十三歳の時から村長を數回やつた俊物である。郡會議員は五回、大正五六年頃は議長をもつとめ農業學校を長岡村に移轉させるに成功し、田内駒吉、谷秀次氏、松岡庸樹三氏の紀功碑が建つてゐる。自治なら松岡に聞けといはれた程の功勞者で稻生村でも二万三千圓の學校新築（内一万千八百五十圓一般寄附、一萬圓川崎家、外は縣外）を昭和十一年一月起工、十月竣工せしめた。謝禮金の二百圓全部は學校へ寄附した氣高き、外に神社道路へも川崎家から出させた。また大正九年から丸十年の間、高陽銀行後免支店長をつとめ、合併と同時に辭した。政友會の重鎮で俳句テニハをよくし、島内松南畫伯の挿畫入り土佐句テニハ集を作つて桐島源一翁に贈り、桐島氏から田中光顯伯に贈つた等の佳話がある。長男榮壽氏は江陽學舎を出て農に、二男齡久氏は城東中學を出て前收入役、現在農、長女は中橋幸三郎氏へ二女は大津高村氏へ三女は徳島縣祖谷の醫師高橋東氏に嫁してゐる。

000

000

000

岡田健茂氏

長岡郡大楠植村田邊島の醫師岡田健茂氏は本年四十六歳、岩村の出身である。父君茂實氏は永く縣の巡査として警察界に功あり健茂氏は海南學校を卒業後新潟醫學專門學校に學び田邊島へ歸つたものである。同村醫も兼ねてゐる。家庭は夫人は香美郡吉川村豊一氏の令妹で二男一女あり、長女節子(三〇)さんは第二高女を卒業し大阪女子醫專に在學中である。

因に岡田氏の趣味は魚釣と碁である

山崎導壽氏

香北の元老であり英斷實行の手腕家たり、人望家たる佐岡村の山崎導壽氏は組合製絲創設の第一人者である。現に鏡繭絲の相談役、佐岡村信用組合長だが村長をも勤めたことあり、ひとり同村のみならず香北の自治文化、産業にのこした足跡は大きいものである。長男巖(三三)氏は城東中學を卒業して一年志願兵として入隊、除隊後は家事に従つてゐたが事變に際し公用で大陸にある。長女靜

喜(六)さんは中村女學校を出、稻生村長井上可澄氏令息に嫁し夫君は出征中、また二女幸子(三)さんは鏡野實科女學校を出て縣電氣局幾井茂一氏に嫁してゐる。

野島一郎氏

全國に名を馳する土佐双物は、一時縣人の認識すら薄くなつてゐたが近年再び隆々と振つて來た當局も一般縣民もその特産地香北の大楠植へくと眼を向けてゐる。その眼に近頃特に大きく映る大楠植村楠目の土佐金物合名會社は昭和三年一月二十九日資本金二万五千圓で創立され彼の南國博覽會の敷地以上といはれる廣袤四千七百坪の廣大な土地に洋館事務所、工場八棟を新築し四國に無といふスチームハンマー機二台(四分の一噸、四分の三噸)を据え、擁する従業員五十有餘、全國に無い此の式での双物製作を始め十一年には五萬圓に増資した。

この會社の代表者が野島一郎氏(本年四十二歳)といふ新進の努力奮闘家である。父業を繼いで會社を創立したものである。氏は海外取引の先驅者(昭和五年)で製品は台、鮮、滿、樺、北海道はいふに及ばずメキシコ、アフリカ、ブラジル方面にも數十萬圓ぐらゐる出てをり昨年新京及び奉天に代理店を置き、新京、ハルビン、大連、奉天には四ヶ年間見本市を開き、野島氏自ら台、鮮、滿

北海道に年二回出張、外に通信販賣もするといふ活潑さである。蓋し、大量生産に因る安價、八十餘の褒狀金牌を各會で受けた程山林用品として最も優良な日本隨一の土佐双物であるからである。昭和九年には此の會社が吳海軍工廠、尙ほ十一年には陸軍兵器廠の用達となつたのも宣なる哉。現在野島氏の肩書は同社代表者の外高知縣野島鍛工業組合聯合會(昭和十二年一月創立の)理事であるが、氏今日の成功は實父兼次氏(六九)の力に負ふ所もまた大きい。

即ち兼次氏は貧家に生れ十三歳に商店奉公を爲し二十八歳の時獨立して小さい店を大楠植村楠目(野島家は元來同郡岸本町出身)に開き苛性カルキや紫雲英種を販賣してさゝやかな生活をしてゐたが漸次信用を得て雜貨太物の商賣を始め明治卅九年には副業として金物商を開いたところ偶々歐州大戰で巨利を得たので鍛冶屋を雇ふて製造を始め鐵、ハガネの販賣を爲し漸次發展して今日の礎を成したのである。いはゞ賢父、賢子、父子二代にして大成したことは我家族制度の一美談として聞くも心地よいことである。

野島一郎氏は讀書が趣味で、頭腦のよい温厚な事業家、夫人は同郡美良布村上野尻清水氏の三女、長女志津(三)さんは土佐高女卒、吾川郡森山村國則氏の二男均(二五)氏を養子とし、均氏は縣立農業校卒業後、教員養成所に入り、卒業後一ヶ年教員奉職、現在は應召入營中である。

岡村梅茂氏

香美郡在所村長岡村梅茂氏は明治二十五年生。尋常高等小學を卒業して農事に従事中、大正八年収入役に常選、二年の後岡村三省氏の後へ助役に、本年一月にはまた三省氏の後へ村長となつた。地方自治に精通した恬淡の士である。長男滋夫君(三)は大阪で畫の修業中、長女美代子(二)さんは縣立第二高女出である。

岡村々長は農に理解がある着實な人格者で正に農山村の在所に適任の村長、収入役になつてから今日まで二十年一日の如く精勵して倦むことを知らず、その村民の信頼と人望は確乎不拔である。

畠山邦雄氏

本山町長畠山氏は明治卅二年九月十九日生、高等小學を卒業、十九歳まで農に従事してゐたが立志上京、然し病氣で歸郷、廿歳の時准教員に合格、大川村川口校で教鞭をとるうち朝倉に入隊、除隊後本山校尋常正教員、大正十一年二十四歳の時京都の小學校に轉じ、立命館大學専門部夜學部で

勉學、卒業後歸町した、苦學力行の士である。

その堅固な志操、人格、學識は當然町長の器とされ人望を博するに至つたわけで、夫人は吉野村山慶吾氏の長女、長男博親君は農林學校二年に、長女節子さん、二女和喜さん、二男加覺君は共に小學、尙ほ下に幼い權治君がある。

刈谷秀穂氏

五台山村の石灰製造業として名ある刈谷氏は本年四十五歳、先代久万治氏は大津村の出身で明治二十七年現在の後山の石灰山を利用して事業を始めたもの。秀穂氏は市商通學中家事の都合で中途退學、十六七才の時出高して漆喰製造を始め十八才の時、社會に立つにはどうしても學問が必要と感じ夜は江陽學舎及特に信清氏の私邸で勉強したが事業は十九才の時失敗、然し明治四十五年頃から好況となり歐洲大戰時代に儲け、大正三年に川田茂平氏經營の高須村葛島の工場を買収し十年藤村米太郎氏外同業者と圖り日本石灰工業株式會社を設立大いに活躍したが後會社は解散して獨立し稻生工場、第二工場、機械工場等を増し更に本年倉庫を増築する等積極のうちに堅實な取引を爲し販路は全國に亘る。

温厚な商才肌で公職としては村議、信用組合理事、趣味は多く、夫人は五台山村水口氏の長女、女中も雇はず毎朝三時から使用人数十名の炊事までする内助の人。長男幸一(二三)君は早大在學、二男健一(二七)君は城東中學卒

穂岐山時衛氏

舊家穂岐山家は長北の名家である。本縣最初の水電で有名な甫喜ヶ峯と關名し代々体格雄偉、劍道の傳統を誇つて、時衛氏の嚴父佐美氏の如きも山田町八王寺の芝に青年を集めて劍道を教へたがこの誇は昭和十二年支那事變に際し、二十七人斬りの功名を樹てた高知市商教諭穂岐山拓氏(劍道三段)によりて一層輝きを増した。外にも穂岐山直穂氏は大江流居合術を後繼した範士である。

さて本文の時衛氏は宇佐美氏の三男として長岡郡新改村の出身、縣立二中を卒へ高知銀行山田支店(三ヶ年間)や郷里の收入役を勤め、後資本を投じて現在の山田町に双物商店を初め昭和三年店舖を洋館とし倉庫も新築、今は數十名の職工を使用する専屬工場をも持つ穂岐山營業所々主として成功してゐる。本年五十二歳、紳士肌の温厚な人である。

由來、香美郡片地村は土佐鋸の本場にして長岡郡久禮田、新改、香美郡山田方面は鎌庖丁を、在所は厚

双物膏口といふ様に双物の名産地で日本全土に販路を有するに至つた原動力は何かといふと往古同方面の文化が早く開け殊に土、石を原料とする工藝品が進んでゐたこと、それへ平家が流れ込んだこと、戦國時代武將が附近に割據し武道を勵み戦が多く従つて鍛工の發達を促したことであらう。士族の血脉を享け劍を愛する精神の流れる時衛氏が商道に入つても双物事業に着目せるは偶然でもなく又大いに偉とすべきだ。乃ちその精神を打ち込んだ實質本位をモットーとする製品は各地博覽會に於て金牌受領は數十を算し土佐産双物の信用を彌が上にも基礎づけたのである。土佐双物は内地から滿鮮へと次第に伸びたが氏は南洋方面へも新たに販路を開拓した。最近特に本縣下と青森縣其他營林局、各縣産業組合聯合會、東大演習林、南洋等からの注文殺到に忙殺されてゐる。

令兄は長岡郡會議員として政界に重きを成した守衛氏、外の兄弟中には高知市に住居する巖氏らがある。長男嘉宏君(三)は城北中學卒、次男は小學校に在學、長女は縣立第一高女出で森田政敏氏(軍醫として目下出征中)に嫁し二女は土佐郡宇治村枝川楠瀬浪男氏(日本醫科大學在學中)に嫁してゐる。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

長崎龜彌氏

吾川郡長濱町は舊城下として且つ高知の文化……それは今迄海から吸収した……の入口にある昔からの航海の基地として又吾南産物の集散地としてその料理業は高知市以上の古い歴史と進歩さを持つてゐるが、この長濱に料理店（カフェも附屬）として氣を吐く關の家、主人長崎龜彌氏は土佐にあだたぬ程の俠客である。

氏は吾川郡諸木村内ノ谷の産、明治七年生れ、家は農、父君は成太郎氏。お母さんの逝去に龜彌氏は弱冠にして八圓を持つて家を出で伊豫の三津ヶ濱に行つて仲仕となつた。元來氏は若い時相撲もやつたが休重二十一貫といふ堂々たるもので十人位來ても寄せつけず八十貫位のを擔ぐ怪力米四俵を肩にのせ、人はその上へ上れといふ有様。三津ヶ濱で商船會社に三年位ゐたが日露戦争になつたので下關へ渡り朝鮮から大連と、軍の勞働の請負をし、朝鮮清津から下關に歸り同地の肥後又合資會社（運送店）に入り十六年間位朝鮮郵船の人夫請負をやつた。これは表彰狀が語つてゐる。

表彰狀

吉田組々長 長崎龜彌君

明治四十年以來前後十有五年間本社專屬船内荷役ニ従事シ誠心誠意本社ノ爲盡サレタル功績不尠
今回勇退歸郷ニ際シ銀盃一組金一封ヲ贈呈シ其功勞ヲ表彰ス

大正十年九月二十一日

肥後又合資會社社長 中野金次郎

氏の下關時代は國粹會の大立物として實にすばらしかつた。即ち大正十一年二月十五日大日本國粹會々長貴族院議員從四位勳二等法博磯部四郎氏及び下關支部長陸軍少將從四位勳三等功三級江藤鋪氏から下關支部幹事に推薦されたのであつた。何しろ炭坑で四百人から千人位の坑夫を押さへてゐたことのあるわが長崎龜彌氏である。下の關勞働者の大親分としてこれを率ゐて國粹會運動に従ひ、下の關築港問題（大正七八年頃）の時は佐々木蒙古王（安五郎氏）らと共に辨天座の演壇に立ちまた大阪で罷業の起こりさうな時には全國から親分が大阪に集まり罷業防止につくしたが長崎氏も九州代表として中の島の大會で演説した。

大正十年歸縣、郷里の家は令弟熊吉氏に相續（その令弟丑治氏は海軍主計）せしめ自分は戸原に精米所を營んだが一年位でやめ長濱へ料亭を開いた。最初は小規模だつたが長濱へ來て十五年間に現在の百五十坪に發展せしめた。その間の事業としては大正十三年頃東京相撲勸進元を迎へて相撲を取らせたがこれは本縣での嚆矢大正十四年頃吾南料理組合を縣廳を通じて公認せしめるに成功

その組合長をやつてゐたが今はやめてゐる。然し昨年来銃後の盡力に卒先老軀を提して活動してゐる。趣味は魚釣、將棋、長男正利氏は城商を中退途學して家業に従つてゐる。尙ほ郷里諸木校及び内ノ谷校に各々二宮尊徳先生の銅像を寄贈し、諸木村長からの感謝狀内ノ谷部落總代長崎義重、楠瀬利之助兩氏からの感謝狀を受けてゐる。諸木村長からの分左の如し

感謝狀

資性磊落恬淡事に當りて斷、人に接するに仁、而して氏が生來の義俠的性格は到る所にその眞價を發揚し爲に衆望の的となる。今般諸木校の爲に二宮尊徳先生の銅像を寄贈しこゝに建設を見るに至るその寄贈建設の趣旨に曰く、皇國精神作興社會善導學童教化の爲めなりと、蓋し現下社會の墮落を憂ひ民心の弛緩を慨し之が救済教化に資せんために外ならず誠に奇特なりといふべし、將來本校兒童教育上並に本村教化の爲め誠に慶祝に堪へず、茲に滿腔の誠意を捧げて感謝の意を表す

昭和十一年九月二十二日

諸木村長 前島主計

○……○

○……○

○……○

溝淵幸馬氏

三和村里改田の人、元治元年一月一日といふ吉日生れ。東京農大を卒業、福島縣立農事試驗場技師を経て歸縣、縣立農林學校教授となる。校長が度々變り氏は校長代理となつたが當時宗像知事から「縣立農事試驗場を任すから腕を揮へ」との事に入場して場長となつた(明治卅八年から四十二年)。氏は學校時代から林業の實地と經濟を研究すること深く、天坪、穴内、上倉、黒瀧等に明治卅八年から植林を始め縣有林へ貸し苗木を分讓する現在の二千町歩の基礎を作つた。これ實に十三年前の事。營林署が植林に失敗した時指導役として成功させた、縣に於ける植林の大成功者であり大先輩である。公職として前地方山林會員だつた。氏は又植林のみならず野中兼山先生の「自然に廻らぬ」主義に共鳴し二番作園藝速成を指導成功し或は漁業にも乗出し發動機附漁船(當時縣下で臼井氏の二艘と氏の四艘のみ)を駛らせ又長崎、三重、本縣古満日等の大敷を爲し發展した。一方政界と社會經濟に對しても不斷の研究をする等凡ゆる方面の研究家だが政黨は嫌ひである。濃厚篤實村の元老としても盡瘁し昨年病むまではかつて一日として病床にあつた事がない活動的精力家。趣味は旅行だけだ。

前田芳治氏

長岡郡野田村信用組合専務前田芳治氏は明治二十年十一月二十日生、同村下野田出身、尋常高等小學校を卒業後農事に従事中村議や總代として活躍し續いて信用組合創立以來十五年専務理事に任じてゐる。この組合は組合長は出勤せぬので専務理事たる氏に専ら一切の仕事がかゝつてゐるのであるが十五年一日の如くキレイにやつてゆく所偉いもの、宣なる哉、産業功勞者として表彰を受けたのも。氏の仕事中最も大きい一つは昭和四年の倉庫建設であらう。夫人は三島村久枝、中澤龜太郎氏の三女で長男丈夫氏は明治四十一年生、農に従事、長女登世さん（大正二年生）は女子師範を出て教師、二つ下の美芳さんも三女秋美さん（大正九年生）も姉さんと同じ経路の女子師範在學中五女三千穗さん（昭和二年生）は小學在學中。

柿本常太郎氏

嶺北文化の中心地本山町の豪商柿本常太郎氏は七次郎氏の一人息子、明治十二年十二月二十日生

高等小學二年を修業し家事（鑛山用達、醸造銘酒千代吉野川）に従事中四十五才の時父君が逝去したので店を引受けまた鉄砲店が嶺北にないので自らその方に店員を擴張した。町議は二回、昭和五年には信用組合長に就任した。

氏が本山方面の經濟産業につくした功績は實に大きくそれだけその裏面には血の滲む様な苦闘が秘められてゐる。即ち本山信用組合では利用部製絲部を設けてゐたが昭和六年二月からの不振時代に休業の有様となり支拂も停止するに至つたが氏は私財の殆ど全部を擔保に提供してこれを救ひ或は率先して組合貯金をやるなど經濟更生に率先自己犠牲を以てした。また嶺北各種物産の没落せるを更生せしめる等その公共心強く氣力に溢れ活力のあること當代稀に見る所である。趣味は事業。

夫人は村山清五郎氏の令妹で長男辰雄氏（三）は土佐中を出た秀才、法政大學經濟科に學び日下家居、その夫人は大石泰象氏の三女である。また二男良之助（二）氏は京都立命館大學中學部を卒へて家居、三男和男（一）君は城東中學二年に在學、長女和美さんは土佐高女を出て吉村榮氏に嫁ぎ二女千津子（一）さんは第一高女出、生花、琴、茶、ピアノ、ピンポンに堪能、三女靈さんは小學校にあり、また母堂虎枝刀自（七）は健在で柿本氏の孝養に余生を送つてゐる。

△

△

△

井上修氏

販路擴大して前途洋々たる土佐石灰界の一メンバーとして成功してゐる人に長岡郡稻生村下田井上修氏(四)がある。井上家は土地の素封家で祖父柳吉氏は土佐割石業組合に四十余年も勤めた石灰界の大功勞者であつた。

此の祖父の血を受けついで修氏は縣立一中(今の城東中學)に學び學生生活にサヨナラしてからは稻生の村役場に一年ばかり勤務したが生來霸氣満々たる氏はやがて戸梶卯之助氏と共同で石灰業に乗出した。時に明治四十二年で此の共同事業は大正八年迄続き、修氏二十一歳の頃は折よし彼の歐洲大戰が勃發したので大いに儲かつたものであつた。

自立してからの氏の事業はトン／＼拍子に順調に進み、昭和三年には工場を擴張し石灰、厚石山を買収する等、黄金時代を現出したが、如何せん人生双六の賽程氣紛れなものはなく突然の失火は一朝にして工場を烏有に歸せしめ、かて、加へて不況による商品の下落等二重三重の打撃で大損失を受けた。併し剛毅な氏はいささかもひるまず災後一ヶ月にして早くも工場を建設し復興へのスタートを切つたのであつた。

岡林勇吾氏

今や日本は東亞の盟主となり大陸政策の遂行となつて、土佐國産石灰も國策の線に沿つて北支、中支、滿洲へと朗らかな進出灰をかなでてゐる際、氏の工場も順風に帆を上げて活況を呈してゐる。かつて土佐石灰同業組合副會長、或は評議員の職に在つた氏の今後の活躍こそ土佐石灰界の動向を示すテストイパロットとして注視されてゐる。

高知市山田町酒類問屋岡林勇吾氏は安藝郡和喰村の出身で、父は龜太郎氏。二男坊の氏は小學校を卒へると直に吾北松本氏方へ奉公し年僅かに十四歳で早くも浮世の浪に揉まれた。十七歳の時憧れの城下へ乗出し堀詰の葛岡酒店に奉公、次いで十九の年には細工町の竹村酒店へ移り、つぶさに酒類販賣の業を究めた。二十六歳に至つて斷然意を決して山田町に獨立開業したが、何しろ奉公中は七圓の給金のうち五圓迄は両親に仕送り郷里の家を助けてゐたので、懷中無一文、無資本開店。

それで醸造に要する原料の精米にも窮する程だつたがしかしやつと融通が出来るると今度は稅務署に税金を前納せねばならぬのに、ハタと當惑するといふ石様。大阪から味淋を買つて販賣を試みた

がこれも資本續かず再び失敗した。

此の窮境を助けて清酒一樽を貸與した義侠の人に業界の老舗「葉柳」の先代櫻井氏があつた。之れは岡林氏の負し魂と過去の経験とその謹直な性格を知るからであつた。その一樽の清酒を資本とし更にて奮闘努力寢食を忘れて働いたので徐々として店の礎を築くに至つた、そして各方面の信用を得て成功への第一歩を迎へた。堅實な營業政策をモットーとする氏は精米所などの投資の話をも斷り眞面目一点張りで今日の大成をなしたものである。大成の今日あるは夫人の内助の功に負ふ所が多いといふ。かつて氏は業界各方面から推されて高知酒商組合長、高知酒類同業組合相談役の要職に敏腕を揮つたが不幸輕い中風症に罹り一切の職を退いて専念養生に没頭したので殆んど快癒してゐる慶賀の外はない。元の健康体に復し業界多事の場合氏の再起の日を一日も速かなれと筆者は祈るものである。

原唯次郎氏

原唯次郎氏は香美郡片地村の大長老で比隣その徳を慕はざるはなき人望家である。明治五年五月十一日同村町田に生れ、縣立第一中學（現在の城東中學の前身）を出て暫くは雄心を胸にひそめて

家業に従つてゐた。

後やうやく勃興し來れる製絲業を重視し片地製絲場を起し業務擔當者となつた、後大正元年神母木に移轉擴張し（現在の鏡繭絲組合）大いに斯業發展に盡したので香美郡長より蠶絲業功勞者として表彰されたこともあつた。

正七年四國生絲會社が設立されるに及ぶ片地製絲場の諸設備一切を舉げて同社に賣却し、同社常務取締役高知工場長として入社、其の間公職としては高知縣蠶絲同業組合議員、高知縣代表蠶絲中央會議員の職に在り、村にあつては片地信用組合の理事、監事、組合長を歴任し組合十週年記念に際しては功勞者として表彰された。尙自治政にありては村會議員、學務委員、學校建築委員等を経、現に山田堰土功組合議員、父養寺井耕地整理組合監事代理、片地校後援會長、一中校友會香長支部長、物部川釣魚會長等をやつてゐる。趣味は釣魚、宗教、讀書等多趣味といふ。

尙氏は熱心な植林家でその區域も地元片地、美良布、在所、曉霞、新改、の各村に亘り香北に於ける第一人者であり山林と植林の大成功者である。その將來性ある此事業に着眼するところなど非凡といふべきである。今や年産額千二百萬圓を突破するといふ縣下木材界の發展に伴ひて植林事業の重要な言をまたないことである。その意味からしても氏の事業は縣下産業隆興に貢獻するところが大である。後繼者基宣氏は高知縣師範學校に奉職し一男四女がある。

野中徳治氏

香北大楠植村の實業家として斷然群星を壓して輝いてゐる巨星に野中徳治氏がある。時は明治十七年舊十月十日東天明るみそめて將に日輪の出でんとする頃、母君が金比羅參りに出立せんとした際呱呱の聲を擧げた嬰兒こそ、後年香北に其の人ありと知られた徳治氏の此の世への上陸第一歩であつた。

氏の出身地は同村植村部落であるが元來氏の家は武人の血統で其の祖先は今の片地村に在つて生郷一帯の守護に任じてゐたものである。二百五十年前程の祖先は田村に住んでゐたが之れが今の植村に移り附近一圓の土地開墾に従事し同地方隆興の基を開いたのであつた。

此の名高い家柄に生れた徳治氏は十一歳の時嚴父を失ひ多難な生涯に直面せねばならなかつた鏡野小學校を出てからは晝は農事にいそしみ夜は夜學に通つてコツ／＼と勉學に務めた。

獨立自尊主義の氏は、どうせ三男坊だ親父の遺産はあてにせん、と兄善吉氏の家から分家し二千圓余りの資本で貨車による運送業を始め、朝に星を戴き、夕に月を踏むてう大努力の仕事を取敢然と遂行十年一日の如く倦む所がなかつた。その傍ら大正七年頃より米穀、肥料商を開業し此の方も着

々と堅實に發展した。昭和三年スピード時代に順應して香北で最初の貨物自動車運送に轉じ山村の大衆に驚異の目を見はらさし、相當の利潤を上げた。昭和三年から八年迄國鐵土讃線が文化の觸手をグ／＼と伸ばして嶺北に建設工事が開始されるや雜貨、精米等の供給商に指定された。又昭和九年から縣産マンガン鑛が漸く時局の波に乗つて認識され穴内鑛山が活況を呈するや氏は同鑛山の供給商に指定されて同鑛山に支店を設置した。尙昭和十二年には徳島縣穴喰町に運送店の支店を設置して、同地でトラックを使用して木材等を多量に運送、事業は益々好調である。氏の多角形經營こそまことに味ふべき安全策といふべきだ。

氏は社會的公共方面にもかね／＼貢献してゐるが大楠植村といふ村名が如何にも山村らしく聞こへるといふので「大日町」と改稱方を運動中であるが現に郵便物などは「山田町外の大日町」で配達されるといふ。本年一月市商を出て家業に従事してゐた長男良一氏(三三)が逝去した際、百二十五戸の部落から三百五十人の弔問客があり、徳治氏の徳望の高きを思はせたのであるが、然も氏はその香料を悉く國防費に献金し村長始め有志を感嘆させたものである。「人から借らうと思へばよく拂へ。借金は追ふて行つて拂へ」といふのは亡父君の遺訓であるが徳治氏はこれを忠實に遵奉し、サービス第一主義で商道に従事し値段なども勉強してゐるので益々好評である。げに温厚な紳商だ。公職としては三十一歳の時から村會議員を三期間勤めた。働くのが趣味であるといふ立志傳中の人。

夫人は長岡郡久禮田村德橋峰馬氏の令妹。長女花子(三)さんは片地村石丸實行氏に嫁いでゐる。尙長男良一氏の遺兒が一男一女ある。

野島博愛氏

香北の大長老として萬人敬服の的たる官界の先輩野島博愛氏は香美郡美良布村岩切に明治二年三月十六日生る。共立學校を出て小學教員となり在所村を振出しに十二年間の教壇生活、將來の大日本を背負ふべき第二國民の養成に當つたのであつた。而してその間官吏たらんと志して孜々として勉勵文檢突破を目指し奮闘したが、その甲斐ありて勝利の榮冠は燦然と氏の頭上に輝き、大藏省の文官試験に及第、稅務署屬となり、靜岡縣、高知縣、香川縣、岐阜縣、愛知縣(同縣は三回)の各稅務署に歴任し稅務行政に功績を樹て、愛知縣を最後に勇退し、大正九年迎へられて豊橋市役所稅務課長となつた。斯くて同市々政に盡力すること數年、席を後進に譲つて郷里に歸り、白雲野鶴を相手に悠々自適の生活を樂しまんとしたのであるが、氏の如き手腕家、名望家を地方が打ち捨て、をく筈はなく引き出されて大正十三年二月以來故郷美良布の村長に据へられた。其の間公職として美良布耕地整理組合長、同岩切、日の御子川耕地整理組合長、小學校後援會長、韭菜果樹園藝組會長等々數

知れぬ。

趣味は圍碁、觀世流謡曲を大垣時代家元に就いて習得してゐる。家庭は夫人は片地村亡北村宗雄氏長女で、長男薰雄氏(四)は大阪乗合自動車課長をやつてをり、同氏夫人は岩切野島政太郎氏次女である。因に野島博愛氏は本年三月舉村的哀悼裡に逝去されたことは返すくも惜しむべき次第である。

西内篤行氏

長岡郡教育會長として國民初等教育に従事してゐる小學校先生たちの統率に當つてゐる西内篤行氏は、長岡郡香高知縣下に聞へた大教育者である。

氏は明治八年長岡郡岡豊村小籠分に生る。明治三十年縣立師範學校を卒へ國民初等教育の聖業に第一步を踏み出した。即ち分良村外五ヶ村高等小學校を経て、長岡高等、本山高等、朝倉尋常高等、十市、三里各校々長を歴任した。其の間郡教育會幹事、副會長を勤めること三十年に及び、郡教育會長として三期間勤めた。その間教員消費組合の設立、學用品共同購買組合の創立等大きな功績があつた。尙其他の公職としては長岡郡聯合女子青年團會長、長岡郡聯合婦人團會長をやり尙城東商業

學校教員を勤めたこともある。趣味は教育人に相應しい讀書、田園生活は氏の最も好めるもの一つと云ふ、寡言勤直の人で、十市、三里の校長時代には徒歩で通學したといふ有名なエピソードを残してゐる。

家庭は夫人は阪本氏の二女、長男精華氏は城東中學を出て安藝町土佐商船取扱店に在勤。二男強氏は高知農業學校を卒業し上級學校受験の爲英語を勉強中である。三男は農業學校を本年卒業した。御子息二人共農業學校を修めさせた西内氏の「大地主義」は流石にと吾人を首肯せしむるものがある。尙二女は井關家へ嫁ぎ、三女は安岡家に嫁し、四女は縣立第一高女を卒へて日下家庭で裁縫の御稽古に勵んでゐられる。

高村健吉氏

『農業立國』『農業報國』が叫ばれること幾久し、今や又戦時体制下に戦線、銃後を通じて食糧の供給確保は現下農民に課せられた一大使命である。而してその農民が田園に立つて扱ふ武器が即ち各種農具であり農機であるが縣下の農機界を通じて最古と敢て呼號するものに香美郡立田村の高村商會主高村健吉氏(四七)がある。

氏の父は近郷近在にその腕の冴えを知られた大工であり、その血を繼いだ健吉氏も天成の大工であつた。大正八年農機研究の爲め岐阜及び大阪の農機具製品を手に入れた氏の頭を旋風の如く横ざり稻妻の如く閃き去つたものは、この機具を改良製作したら……といふことであつた。

子供時代から發明好き考案家の氏は直に研究に取りかゝり幾度かの失敗を繰り返しつつ遂に完成し、大正十三年頃には高村式農機として販賣好評を博するに至つた。除草機は特に獨特のもので同店の誇とするところである。高村式稻扱機の優秀性に至つては各地の出展に際し實證せられてゐる。即ち昭和二年第三回縣下工業展覽會に於て「高村式稻扱機」功勞賞、同じく翌年第四回には進歩賞をそれ〴〵受け、同昭和三年五月御大典記念優良品審査大會で名譽賞金牌を受領してゐる。

家庭には二女あり長女は高岡郡上ノ加江町佐竹氏の八男を養子に迎へて圓滿な家庭をつくつてをり二女は高坂高女出で岩村の堀氏長男に嫁してゐる。健吉氏の趣味は即ち仕事で研究心に富み堅實主義の力強さである。

都築龍馬氏

氏は明治十六年八月十五日、香美郡立田村上野内に生る。高等小學校卒業後、同郡明治村の漢學者

北村氏に二ヶ年學び、更に漢學を同郡立田村橋本氏に一年間習ふた。普通寺騎兵第十一聯隊に入營。明治三十七年八月日露戰爭に出征。媾和一年半後除隊歸郷。製糸家として父業を繼がれた。

父又藏氏は香美郡山北村方面で果樹園を営まれ、製品は荷車を挽いて高知方面に運搬されたこともある。昭和二年ダルマを機械に改め、大正八年頃の好況時代に多利を占め、十二年四月生繭處理統整法案の議會通過で附近養蠶家（野市町の殆んど全部、立山、岩村南部）三百七十余個の契約製絲成り、個人經營の淘汰される時代も乗り切りて、従業員六十余名、養蠶教師附きの隆運を極めてゐる。果斷力行の人物である。なほ五六反の野茶作を餘業とされ、その野茶は縣下著名である。村議二期に及び、また山村立田組合會議員、信用組合理事である。趣味は狩獵、釣、投網等。

長男は小學在學。長女芳乃さん(云)は高坂高女卒業、野市町下井、貞廣豊太郎氏次男信雄氏(二〇)(縣師範專攻科卒業の小學教員)に嫁し、二女逸さん(三)は土佐高女卒業生花を善くし、三女里美さん(二五)は中村手藝學校卒業、天才的裁縫の手腕家である。四女志磨さん(二七)は岩村實業學校在學、五女眞佐さん(二五)は土佐高女在學。

×

×

×

福永万治氏

大津村産業組合組織當時から引續き十數年間理事を勤めてゐる福永万治氏は大津村産業界の元締である。氏は長宗我部の重臣、隼人の遺跡で名高い國分川畔岩淵の松の畔田邊島郷に生れた。

明治卅二年から四十年迄後免町で縣、郡金庫事務及銀行代理店業務に従事し、四十四年から帝國生命、日本徴兵、内國貯金銀行等の各代理店を經營し二十餘年間奮闘努力、現に縣下屈指の大代理店として益々發展してゐる、その間大正五年郡會議員となり次いで産業組合に入った。

長男實氏(四)は城東中學を出、土佐銀行に入ったが貯蓄銀行と合併した爲め四國銀行に入り山田支店次席となつて辭職目下代理店業務に活躍中。次男修氏は岩村の田所慶吉の養子となり宮本病院藥局長から退職目下香美郡山田町で藥局を開業盛んに發展、三男守衛氏は農業學校を出て農業に従事、四男正雄氏(五)は熊本藥學專門學校を出て目下高知城西病院藥局長在勤中、五男貞夫氏(三)は建築技手として大阪に勤務中近衛聯隊に入隊。

◇

◇

◇

豊本多市氏

明治十四年八月十八日、香美郡岸本町に生る。明治三十年出高。通町高橋米穀商及川岸端友永安太郎氏方の店員をして勤務約十五年。それから一時獨立して米穀商を営みしが、後臼井家に入り、會計として同家木材監督を勤むること四ヶ年、それから通町居住約十ヶ年、その間商業會議所議員一期、南海金融株式會社取締役社長約六ヶ年、町總代十數年、市會議員候補者として立らしも、僅少の差で落選した。約七年前から現在の水通町に居住、貸家約十軒を持ち、町總代兼會計勤務一期再び市會議員に立候補せしも僅少の差で落選した。氏神若一王子權現の縣社昇格をはじめ、最近忠魂碑建設、岸本町小學校等に盡瘁十餘年、教育功勞者藤田吉太郎氏の胸像建設に畠中義雄、畠中凱夫、川村茂徳氏等諸氏と協力した等、郷里のために盡された。氏は温厚着實にして敏捷なる奮闘家といふ。趣味は淨瑠璃、釣である。淨瑠璃は最も好きで、高知因會の幹事長として盡瘁し、因會は五十年の歴史を持ち、土佐太夫、伊達太夫を出してゐる。

一男敏喜君(二六)は城北中學卒業後師範二部入學、昭和九年三月卒業、岸本校に三年、現在は在所校に奉職中、夫人タカエ子さんとの間に一女あり、曼子さんといふ。本年二歳。

入木茂氏

ノミといへば樋、入木茂氏といへば播磨屋町の眼鏡店主人かと聯想されるほど、高知市は勿論、縣下で著しく名を傳へてゐる。事の成るは成るの日に成るにあらず、その由て起るところあり、氏は多士濟々の安藝郡奈半利町中里の生れ、三十五歳の働き盛り。市第六小學を卒業すると、すぐ大阪市南区鍛冶屋町山下眼鏡店(問屋)に奉公の身となり、辛苦十五年間。

歸縣して主人の後援で現在の店を開始されたのは昭和四年である。古より「安物の錢失ひ」と言ふが氏の最も忌むところ、「高價良品」といふのが氏のモットーで、さうして正札本位、買客の喜ぶのが自分の喜びである。その眼鏡店が市内各眼科病院の指定、各官公衙等の御用達となり降々發展を極めてゐるのも宜なるかなだ。夫人は帯屋町清岡氏の長女、内助の功著しい賢婦である。趣味は事業本位の傍ら登山、旅行、スポーツ、謡曲などもある。正直にして温雅、明朗、市内商人中の新人として輝いてゐる。

△

△

△

島崎五郎氏

潮江新田町出身、カフェー常盤経営者である。市立商業學校を経て、昭和八年慶應經濟學部卒業、それより兄君と協力、野村デパートの創立を完了し、高知新聞社に入社されたが、月給生活よりも自らの事業經營を思立ち、昭和八年舊東京庵を改築して開業、十一年九月火災に罹り、更に大々の改築を行ひ、現在に及んでゐる。従業員三十五名、父君晃氏は吾川郡名野川校長たり又中野寅次郎氏等と政治方面に活躍した有名な人である(故人)。夫人は追手筋野崎氏長女喜代子さん、土佐高女出身である。兄君は植田日出男氏、高知信用組合預金課長として令名ある人である。趣味は圍碁、玉突である。

岡本虎繁氏

後免野田組合役場長岡本氏は明治廿二年一月十六日虎治氏の長男として大篠村大塚に生る。海南中學出身。明治四十二年入隊し滿洲守備、遼陽に駐劄、四十三年除隊、四十五年一月高知大林區署森林主事となり大正二年辭職、大阪大林區に二ヶ年奉職、昭和八年十二月勳八等瑞寶章を賜はり十

年從七位に叙せられ、十一年岡山營林局に轉じ十一年九月辭職同年十月五日勳七等に叙せられ高等官七等に昇叙、何分永らく縣外にあり令弟の世話に委ねてあつた巖父も七十六歳の老体だし自ら孝養を盡すべく辭表を出したのだが二ヶ月引つ張られて漸く歸縣した。當時父君の病氣も快方に赴いてゐたが、昭和十三年二月十五日氏が役場長となつて間もなく三月に逝去した。

岡本氏は趣味は謡曲(觀世流)で大阪時代から十餘ヶ年に及び、また田園趣味である。昭和四年から健康法にすつと冷水磨擦を欠がさぬ。夫人は潮江山内一正氏の二女である。

堂野庄三郎氏

高知市新京橋に關東煮と料理とを以て人氣を呼んでゐる「初鳥」は主人堂野庄三郎氏の舊姓「服部」から名づけたもの。氏は神戸市神戸區北長狹通六丁目出身、明治三十年三月六日建築家の家に生れ十七歳の頃神戸で外國語を研究してゐたが大坂の義兄井上氏の店に四ヶ年ついで心齋橋十合デパートに四年勤めたが昭和二年四月來高、七年八月迄中央食堂に勤務し、同年十月現在の所に開業したものである。丁度、兵衛、一平、たまた等と同時に頃の開業であるが、客筋は阪神方面の商人や高知の知名の士である。商賣は「誠」をモットーに誠意一点張り、女中の如きも家族と同待遇で座

敷に居らせる有様だから「女中が變らん」といふ誇をも持つ。昭和十二年一月高知和洋理組合評議員となり、また陪審員候補者に挙げられてゐるのを見るも以てその人物の手固きが判る。趣味は旅行とハイキング、小學四年、三年の男女がある。

池 道 長 氏

明治三十一年一月七日、高知市浦戸町に生る。大正四年三月北陸中學（福井市）卒業、六年三月北陸專修學校（福井市）卒業、同年四月歸高、大正七年十二月一日、一年志願兵として四十四聯隊入營、九年五月三十一日滿期退營、樹心院惠旭氏が浦戸町眞宗寺（西本願寺派）住職時代に、副住職勤務、十一年三月一日少尉任官、正八位に叙せらる。十三年三月廿一日惠旭師死後、同年四月一日眞宗寺住職となり今日に及んでゐる。檀家約一千、僧侶としての待遇名稱は享授一等布教使（本名は本願寺布教使）、公私職は帝國在郷軍人會南街分會長、南街區防護團副團長、高知市消防組南街消防部小頭、高知市南街警備副司令、高知市南街軍事援護會副會長、高知市第一青年學校教練教官、市會議員、高知佛教聯合會幹事（全部現在）趣味は茶（茶室の名切言樹）流儀は定置流で、定置流の家元である。

沼 連 氏

高知の洋服商中最も積極進取的であるのは沼連氏であらう。長岡郡稻生村出身、高等小學校卒業、高知商業銀行事務見習となつたが商銀閉鎖のため東元洋服店に入つたのが大正七年十八歳の時、それだけ書くと別に數奇でもない様だがそれ迄に貨車曳き等もやつてゐるのである。洋服商界での立志傳中の人になる資格は十分だ。大正十年に善通寺騎兵第十一聯隊に入隊、除隊後東元に戻つて尙八ヶ年ミツチリと洋服商の萬般を研究、愈々自信を得て三十一歳の時獨立、市内筆山町に開店、精摺勉勵經營約十年充實せる力が昭和十一年九月現在の所（市内日貫の播磨屋町）へ營業を擴張せしめるに至つた。

沼連洋服店のモットーは「意氣と技術」である。特に他店で見られぬ長所は偏傾体の人に對しよい技術をもつてゐる點である。それといふのも彼の有名な山中技師長があるからで、氏はかつては神戸のスキップ商會、カベルド商會、大阪の十合、東京の大民と東洋一流の店で指導した。尙宮内省の御用を拜したこともあり、現在京阪神の洋服技師は多く氏の教導を受けた人々、この山中氏が特に職長として招かれて來縣し東元を今日あらしめた後歸阪してゐたのを同じ東元時代にぞつこん

惚れ込んでゐた沼連氏が業務擴張を機として上阪、訪問、誠意をつくして土佐下りを乞ひ、山中氏としては沼連氏の誠意にほだされ、沼連氏としては無理に引張つて来た形である、意氣と技術の店といふのは應に當然だ。また沼連洋服店が旭日東天に上る如く繁榮し縣外からの注文も多いことは偶然でない。山中技師長についた顧客が「山中が高知の沼連にゐる」と追ふて来るのである。

沼連氏ほどの活動家は高知の洋服屋さんに珍しい。高知洋服商業組合創立に奔走して現在理事をつとめてゐるがひとり營業に於てのみならず日下非常時に際し在郷騎兵として軍事に關する世話は殆ど趣味化してをり、土佐在郷騎兵の「龍驤會」幹事長（大正十四年から）として氏のカーキ服姿は軍事關係の催しや會式毎に見られぬことがない。夫人は大篠村山本庄太郎氏の二女で、男三人、女一人がある。

前田陽龜氏

土佐郡一宮村一宮の出身。アメリカで成功。タンマリお金を儲けて歸つたとて大評判である。前田陽龜氏は城東（前一中）の明治四十年卒業生である。卒業後間もなく雄圖を抱いて渡米、ワシントン州のシャートルから奥地六十哩の所にある外人のみの製材會社へ入つた。この製材は原始林を相

手に大規模なもので四面外人ばかりの中に混つて土州男兒の意氣を發揮して奮勵すること九十八年、氏はたゞ仕事に精出して金を蓄めるのみが能でない。夜はキリスト青年會の夜學部に通ふてミツチリと勉學したのであつた。學業共に奮勵する好日本人として會社幹部の信任を博したことはいふまでもない。遂に功成り故郷に錦を飾るに至つたのも偶然ではないのだ。

一宮村には老母がある、氏の野心はこの母堂に孝養をつくすことであつたこと勿論である。歸村後はアメリカ知識と忍苦で鍛へた精神を以て村の開發、公共、後進引立のため盡力してゐる。

橋本富治氏

四國銀行支店長橋本富治氏は明 十八年九月二十八日生、赤岡町つゞきの岸本出身である。元來赤岡は昔赤岡銀行があつた程で香美郡はもとより藝西、長東をも含む金融の中心地であつた。従つてこゝに銀行界に在る者は人物たるを要したこと云ふまでもない。

橋本氏は城東中學……舊一中を出て早稲田大學に學び、歸縣後赤岡銀行支配人となり、一ヶ年後土佐銀行に轉じてその調査課長、ついで四國銀行に入つて、後免、赤岡（現在）の支店長になつた。銀行界で認められてゐる人。趣味は釣、角力、詩吟等でスポーツマン支店長として有名。長男泰夫

川添徳馬氏

氏(一)は東北帝國大學を出て朝鮮總督府の商務官、次男俊夫氏(二)は東京文理科大學在學中である。高知市使者屋橋元の老舗三輪精肉店主川添徳馬氏は長岡郡介良村本村の出身、明治四年生、家は農だったが、氏は牛馬商として身を立て若くして縣外各地間に肉牛の販賣を爲した。明治三十九年には競馬にも關係し、その後明四十三年家畜市場法案が通過し牛馬取締規則が制定公布さるゝや氏は土佐家畜市場株式會社の創立に奔走、川久保福馬氏を社長に、自らは取締役に就任した。また高知牛馬商組合長は四期勤め(氏の辭任後解散)縣牛馬組合聯合會副會長となり田島下學、安岡孜郎氏の後を繼いでゐる等、その牛馬商界に於ける閥歴は古く、又著大である。精肉店としては四十五歳の時現在の所に開き爾來隆々、昭和四年には陸軍用達となつた。

氏が若かりし頃朝鮮牛を買入れに行つた苦心は氏として永遠の思ひ出であり斯界での語り草である。當時の朝鮮旅行は今の米國行以上にたいそうなものであつたが門司で知り合つた大分縣人日名子氏と朝鮮行を計畫し日清戦争後渡鮮した。牛は多いが賣らぬといふ頃で、東學黨の殘黨がゐる危険なので對馬の穀物問屋の弟になる人と同道、穀物買ひと見せかけて牛を買つたが、引取るにも危

尾立良猪氏

險があるので四十二日間預けた事がある。この朝鮮牛買取りのため氏が縣知事の旅行免狀を貰つたのは實に廿六歳の時で旅行免狀の元祖であるといふから凄い。斯くして下關、釜山間を一週一回往復したが牛一頭につき韓錢十六貫匁、朝鮮人一人を要し四五頭なら三人位を必要としたといふことである。氏の肉牛購買は縣外九州、五島、中國、朝鮮、東京、阪神と足跡遍くまことに天下的肉牛商だ。夫人は田邊島の市川氏の女である。

高知驛前通りで鑛油、自動車用品商を営み高知商工會議所議員たる尾立良猪氏は明治三十三年生れといへばまだ三十歳台の少壯である。それでゐて高知實業界一方の重鎮であるからえらいものだ。香美郡片地村出身で父君慶治氏は製絲業を営んでゐたが失敗したので氏は明治四十五年小學時代に出高し市高等小學校に入り卒業後神戸の山地氏系なる汽船會社明治汽船株式會社に入社、廿一歳迄勤務、歸縣、父君の製紙業を授けたが轉じて縣農會に奉職、一ヶ年餘勤めた。次いで昭和元年臼井商店石油部に入り手腕を發揮し同五年迄勤務、五年獨立して現在の所に開店したもので頭腦明晰仲々しつかりして前途洋々たるものがある。町總代は父君の名儀だが氏が就務してゐる。趣味は碁、銃獵、

夫人は下知町の市會議員國澤松氏の令妹歌子(三)さん、一男陽一郎君は小學に在學、長女優子(四)さん、二女朱美(二)さんがある。

小笠原源次郎氏

いつ如何なる時代でも、民衆は娛樂といへば歌舞音曲演劇を欲求するであらう。その娛樂陣の尖端を行く市民に親しみ深い堀詰座の責任者社長小笠原源次郎氏(空)は實業家の輩出で有名なる安藝郡の人生れは赤野村である。十七歳の時、青雲の志を抱いて出高、本町堀詰宮崎醬油店に奉公、刻苦精勵大いに主人に愛せられ、二十五歳の時獨立蓮池町神明通り(現在の個所)に醬油、焼酎、味噌商を開店した。氏は炯々たる商才眼の持主で、家屋を六百圓に買入れ契約の下に、二十錢拂ひの日割で確實に支拂を完了した。商賣の擴張につれて、石油、素麵、罐詰などの販賣を始めたが、歐洲大戰の石油暴騰で巨利を占めた。大正元年に朝日ビール特約販賣店となり非常の活動をなしたので代理店の最高賣上店として表彰され、銀牌を受けたこともある。

昭和九年に至り、ますます發展の翼をひろげ、堀詰座入口に洋館を新築、階上を喫茶店とし、明朗清新、一般顧客の好評を得てをり、階下は専門の食料品販賣である。市會議員當選四回に及んで

る。夫人は同郡同村吉田氏二女、内助の譽れ高い賢婦である。

長男は恩給付の退役海軍々人で別居してゐる。二男男氏(三六)は滿洲國通譯として月俵三百圓、恩給四百五十圓を受ける身で、現在非常時日本の大陸國策の第一線に血みどろの大活躍中である。三男繁實氏(三五)は市商出、父業を助け店の中心人物として活動せる父君類似の商才卓秀の實業家である。四男菅枝氏(三九)は明治大學に學び滿洲國警察官に採用されたが、日支事變の爲め日下出征中、五男常次氏(三三)は市商卒業、兄君繁實氏を助け、店務に精勵せる未來の實業家である。小笠原源次郎氏の如きは縣下稀に見る立志傳中の人として敬服する。

大野正一氏

明治二十一年十二月七日、高知市北與力町に生る。明治四十年三月中學海南學校卒業、それから明治大學に修學卒業後、山内侯爵家本邸勤務、大正三年歸高、山内侯爵邸家扶勤務、同邸の總支配役として隠然重きをなしてゐる。

祖父正則氏は山内家々臣切つての武道達人として有名なりしが、正一氏も亦幼少より劍道を勵み石山孫六氏の門に入り、更に東京高師教授高野三郎氏の門に入り、劍道五段として教士の稱號を

受け、武徳會劍道部長、慈善協會常議員、武揚協會常議員、武徳會常議員、その他幾多の公私職に關係を有してゐる。趣味は劍道を主に、釣、網、碁、謡曲等である。夫人旭子さんは河野幸壽氏の長女で東京中村女學校卒業、三男三女あり、長男正志君は日大工科卒業、東京淺野セメント勤務、長女宮子さんは海軍中尉嶋村和猪氏に嫁す。一女和壽子さんは縣立第一高女卒業、家庭にあり、二男則彦君は東京四中在學、三男正敏君は城東中學在學、三女郁子さんは第六小學在學。

野本源吉氏

二度目の長岡郡町村長會長をしてゐる大篠村長野本源吉氏は長岡村の生れで大篠の野本氏の養子となつた。本年四十八歳の働き盛りだ。その経歴は大正五年縣官房雇となり、同六年四月長岡郡書記となり、十五年七月郡役所廢止で縣廳農務課屬、昭和七年九月退き十二月村長となつて現在に及ぶ。その間(前)大篠村農會長を勤めて濃厚紳士のな人。何しろ大篠村は長岡郡中での名村で、人材の輩出、村の富めること整頓せること縣下でも群を抜く名詮自稱の大篠村である。こゝに村長たる人の凡でないことが十分判らう。養父久治氏は本年七十二歳、長男源一郎氏は海南學校を出て縣會計課に勤め、次男氏は昭和十一年四月農林學校を出て現に朝鮮農事試驗場に奉職してゐる。

樋口稔氏

立田村の醫師樋口稔氏は實に世の青少年を奮起鞭撻するに足る數奇なエピソードを持つてゐる。氏は高知市鹽屋崎に生る、幼にして父を亡ひ、小學校を出ると直に波瀾な生涯の第一步を實社會に印せねばならなかつた。即ち十三歳土陽新聞社解版係を振出しに製藥會社の丸藥作り、賣藥の行商、藥局生等幾多の辛酸をなめて精勵獨學の功なり二十五歳にして遂に醫師檢定試験に合格し、大正四年立田村に獨立開業現在に至つてゐる。濃厚篤實の士で趣味は非常時に似合ふ刀劍。長女都恵子さん(三六)は徳島聯隊附歩兵中佐葛目直庸氏に嫁し、長男新一氏(三六)は明治大學法政科を本年卒業した。

山本淺吉氏

促成栽培の熱心な園藝家として縣下で有名な長岡郡十市村の山本淺吉氏は明治十七年生、同村西坪池の出身、十市尋常小學を卒業後父業を手傳つてゐたが初め力を入れてゐた養蠶が不振の爲園藝を始めたものである。そして大正十年頃園藝組合を三十名で作つたのが嚆矢で、多量の生産を爲し

商人に来て貰つて直接取引をする制としたが創立一ケ年にして坪池組合へ合流、園藝は早く作らぬといけぬといふので加温装置をし昭和六年頃から考へて翌七年に一釜(百五十圓)を入れ試験的にやつた所相當の成績で自信を得たので尙も研究して愈々良いことが判り現在は十釜ぐらゐる(村内では總計八十釜)を入れてやつてゐるが、縣内外から多數實地研究に来る程の状況となつた。畢竟山本氏が先鞭をつけたものである。夫人は森尾竹馬氏の二女、長男憲(三)氏は森尾氏へ養子にやり、二男美壽(二五)氏は城東中を出てこれも父君同様園藝に興味を有する研究家で知事からも訊ねられたことがあり、放送局から放送する話もある。

小笠原圓次氏

高岡郡高岡町の酒造業小笠原圓次氏は高郡酒造界の重鎮で郡の酒造組合長を八ケ年勤めた後無理にやめ、現在は病氣で引籠つてゐるが、氏は本年六十歳、先代鹿太郎氏は赤野の出身、今から六十年前といふから圓次氏が生れる頃高岡に開店したわけ、窪川でも造酒し、新居へも行つたことがある。圓次氏は三人兄弟中の一人だが、廿五歳の時主となつて家業の經營に當りだした。

氏は人となる上に於てはどうしても學問をせねばならぬとて廿七、八、九歳の三年間明治法律學

校(今の明大)の校外生として勉強し、その間酒を腐らし『ムロミの腐りを見たけりや小笠原へ行け』と須崎稅務署からも笑はれてゐた程だ。これに發奮した氏はそれから火鉢のふちでキツチリと考へいかにもして優良酒を造つて耻を雪がんと必死の研究、造酒に關する書籍も買はぬものはなくやつとの事でよい物が出来かけたので大喜び爾來益々改良に改良を加へ、杜氏も自分でギツチリと仕入れ三十年勤続者もゐる有様。まことに失敗は成功の基であつたのだ。

夫人は和喰、光平氏の末女で長男正彦氏は市商を出て家居、二十四歳、二男正寛(三)氏は滿洲獨立守備隊を志願して渡滿してゐたが病氣で歸郷、長女幸子(二七)さんは東京の子供婦人服の學校を出てドレスメーカーとして女ながら氣を吐いてゐる。因に小笠原氏の趣味は謡曲(喜多流)で四ケ年程もやつてゐると。

毛利覺治氏

製糸雜貨商、美良布乾燥會社々長、劇場大宮館重役である。明治十九年五月二十七日香美郡美良布村に生る。父君は貧しい家に生れた大工職である。覺治氏は菲生高等小學校卒業、十八歳で二十圓の金を資本に、木炭八貫俵二十錢位の時代に林産物問屋を始め、奮闘努力徐ろに財を造り、さうし

て製糸事業(ダルマ)を始めまた大正二年出願の資本金十五萬圓(五十圓株三千株)の香美電気株式會社創立に同村吉永氏と奔走成功して取締役となり、大正七年認可翌八年開業した。區域は佐岡、曉霞、美良布、在所四ヶ村に渉る。(拂込七万五千圓、株の半分)後、縣に買ひ上げられたが、製糸工場は、昭和十二年養蠶家と特約成り、縣の認可を受くるに至つた。

夫人は香美郡曉霞村野村榮太郎氏令妹、長男守良氏(二)は城東中學在學、長女恒子さんは市南新町伊勢氏に嫁し、二女は高坂高女出家庭にあり、三女春江さん(三)は中村實科女學校卒業、生花茶道に熱心であるといふ。四女房子さんは家に在り、趣味は養太夫で上達である。

關川繁興氏

土佐郡一宮村の元老として、昭和六年からは縣會議員にも出て廣く知られてゐる人である。一宮村一宮の出身で本年六十五歳、日露戦争の始まつた明治卅七年に村役場に入り大正二年には村長をしてゐたが辭し、村會議員には度々當選信用組合では十年程の間専務理事をつとめた。

氏の主義は、村治に政黨を入れぬといふにあり、このため反對派から惡宣傳されたこともあるが氏は敢然として所信を揚げず今日迄その主義を堅持しその村吏僚時代も民政黨の淡中村長に仕へた

ことがあつたが無色で押し通して來たほどである。今日となつてはそりやこそといひ得る人である趣味は謡曲だが時局柄中止してゐるといふ。

春田毅一氏

安藝町漁業協同組合理事春田毅一氏は縣下での最年少町議として有名である。即ちわづかに廿八歳での當選記録ホルダーである(現在廿九歳)。氏の叔父(氏の養父)楠太郎氏は漁業組合の理事を勤めて有名だつた人。政黨色がなくて特に評判だつたのだ。

毅一氏は高等小學校を出て税務署に奉職、ついで縣土木課、漁業組合、町役場等にゐたが養父楠太郎氏の逝去により海運業其他一切合切を受け継いだ。町議は昨年七月の改選に打つて出て縣下最年少議員となつたが、それ迄は安藝町青年團副團長を二期つとめ町内の青年間に人望があつた。外に公職としては帝國水難救濟會安藝救難組合監督をしてゐる。また高知鹽元賣捌合資會社安藝郡代理人、日本食鹽回送株式會社安藝代理人、安藝漁連組合長、第一徴兵及び日本生命の代理店等肩書が多く家は酒の外に雜貨商もしてゐる。夫人は土居村前助役島本龜氏の長女で安藝高女卒、一男あり。

尾立角之助氏

香瑞園主

メロン……香瑞園、その名聲は今や本縣第一であるばかりでなく中央にも認識された。蓋し名からして香美郡、明朗の明治村が無比の適地であるからだらう。適地だけではいかぬ、適任者の力に俟たねば新謂「玉磨かすば光無し」の譬である。香瑞園を經營せる丸メ園藝組合尾立角之助氏は明治村原に明治三十九年二月十八日生れ、現在まだ青年の齡ながら篤農青年、研究家としてかねて知られてゐた。持つて生れた園藝趣味から昭和九年温室メロン栽培を開始したのも地勢が静岡方面の先進地以上に有利であることを發見したに因る。先づ試みに二十三坪に二百二十本を植ゑたが好成績だったので二室（五十坪）に一回五百本植ゑに擴張し當時次第に擴張の方針である。現在の設備では年四回計貳千本を作る豫定で、果實は普通貫五圓位だが良質の超季節品として貫十一圓内外、一個三圓八十錢位の相場に取引される。産品は既に郡、縣農會、南國博覽會に參考品として出品また高等官食堂の試食で絶讚を博し昨年は二回知事の買上に預かり、縣農務課よりの命で宮様方への獻上品として光榮に浴し、佐賀縣御旅行中の御召上りのため農務課細溪技手が奉持参した程である。斯ういふ見事なメロンのできる蔭には尾立氏の一方ならぬ苦心があり、井田孝氏著「メロン

栽培の基本的知識」を指針とし太陽―日光―栽培を日々不斷に研究し其の稿を集むればすでに一書をなす程である。因に南國博の記念狀左の如し

高知縣明治村丸メ園藝組合 香瑞園
一、メロン鉢植

前記ノ出品ヲ爲シ本會ニ一段ノ光彩ヲ添ヘラレタルハ感謝ニ堪ヘズ 依テ茲ニ記念ス
昭和十二年七月十日

土讚線全通記念南國土佐大博覽會

會長 從四位勳三等 高知市長 川淵治馬
總裁 同 高知縣知事 小林光政
名譽總裁 正二位勳二等 侯 爵 山内豊景

同園のメロンは香瑞園のマークで本年第一回は一月に大阪中央市場に出荷したが次は五月、因に尾立氏は舊姓柳本、十一歳の時尾立家に入り先代角之助を襲名し夫人は新改村の野々下守義氏の長女、尾立氏は資性濃厚、研努力心強く、趣味は俳句である。

中城惇一郎氏

長岡郡三里村出身の人材であり前村長である中城惇一郎氏は明治卅二年十月十日生、縣立一中を卒業、明大に進み大正十一年卒業（在學中大正八年入隊）。郷村の先輩生田定之氏を頭取とする東京の昭和銀行に一時勤めたことあり、次いで報國銀行本店に入り三ヶ年勤務し中央の經濟界でもまれた人。歸村して間もなく、當時不振であつた三業組を野村組へ賣る仲介に立つて見事成功して初めて認められた（この仲介で氏は初めて野村茂久馬氏に會つたさうである）。昭和三年に西山龜七、横田龜太郎氏らと一所に四國モーターズ合資會社を拵へ重役の椅子にすわつて業務を擔當したが二ヶ年で事業は失敗、丁度その頃祖父（これが氏の養父）が逝去したので村に歸り、七年には名譽村長に推され十一年には再選幾多の事業を爲したが本春病氣のため退職した。

尙ほ附記すべきは氏の祖父直顯氏は彼の堺事件生残りの武士であつたがその中城家に男が無かつたので氏は幼時から祖父の家に養はれてゐた。三業組合は實にこの祖父が明治十三年頃起こしたものである。始めは主に造船を中心にして回漕貿易を南洋迄も營み明治卅年頃には百トン位の開通丸を以て南洋南支の貿易に通はせてゐたが歐洲大戰當時個人名義を株式に變へ大活動をしてゐた。因

に氏の趣味は碁、夫人は高知病院事務長岡林信衛氏の長女富美さん（縣立出）で二男二女がある。

福島正五郎氏

漁村吾川郡御疊瀬村で漁業に理解あり寛大な出資者として慕はれ發動機漁船十艘ぐらゐるを走らせおかげで村の漁師が生きるといはれてゐる福島正五郎氏は舊姓山岡、明治廿七年十一月十日生、早く土佐銀行に入り（市財界政界の重鎮たりし故岡崎實次氏と親戚）高知銀行界で知られてゐた人。その後四國銀行と合併の際辭して歸村した。御疊瀬村へは二十四歳の時來たが、先代が米穀雜貨商をこゝに營んでからもう五十五年位になる。その間、米の十三錢時代に福島商店は千五六百圓の米代をすてたことがある。何しろ顧客たる漁師は不漁の時でもこれを養はねばならぬからで、おかげで他の店はつぶれてしまつたが漁師の恩人福島商店一軒だけはつぶれず十五六ヶ年の間他に同業店が無かつたほどだ。尙ほ福島家は明治時代は種崎で回漕業を營んでゐた。福島正五郎氏は村會議員を二期務め理立の功勞者、多趣味で人のすることは何でもする、釣は若い時にやつたが今は多忙でその暇がないさうだ。夫人は實科女學校出。長男正壽氏（城東中出身廿一歳）は高松高商にあり、長女幸子さん（〇）は中村技藝女學校に通學中。

岡崎重喜氏

土佐郡一宮村信用組合長として村産業界に重きを成す岡崎重喜氏は同村薊野の人。本年五十五歳の働き盛り。氏は高等小學校を卒業し農業に従事してゐたが昭和七年十月信用組合の専務理事に据へられるに至つた。とだけ書くと如何にも百姓さんが一躍してえらい人になつた様に聞こえるかも知れぬが、左にあらず、それまでには實踐の方にも理論の方にも多年修養、しかも村公共のため我を忘れて盡瘁畫策、凡て肯綮に當り十分に信組を背負ふに足る貫録を築き上げてゐたためである。趣味は投網。家庭は長男照明君(三)は農業學校出三男保雄君は昨年十二月城東中學四年から陸士に合格入學した俊才、三男友信君は小學校在學、長女は縣立第一高女を卒業後高須村の津野友幸氏に嫁し二女は土佐高女を出、十市村の土居武夫氏に嫁する等擧げて繁昌の一家である。

石川涉氏

世には文學士の村長などがあるが、それらは變則である。農村の村長は農がはやつてこそ治績の

見るべきものがある。その實例は香美郡明治村長石川涉氏に現はれてゐる。

氏は明治三十一年一月十四日、山田に生る。父君は農で、氏も明治小學校卒業以降農となり、秘奥を究めた。大正十三年二月、信用組合長となり、十五年收入役、昭和二年助役就任十ヶ年。十一年名譽助役となり、十二年前村長上島昇氏の後繼として名譽村長就任、現在に及んでゐる。青年團長、村議、各團體會長及び顧問でもある。

山地林氏

土佐電鐵の上田保氏を知らぬものは殆んどあるまい。氏は土佐電鐵創業の元勳その參謀格として活躍し、土佐電氣會社今日の隆運を醸成せしめた殊勳者は山地悦彌氏で、上田と山地、その両氏は土佐電鐵の柱石となつてゐる。山地林氏はその悦彌氏の長男として、長岡郡大津村に生る。當年四十八歳。縣立農業學校の出身である。父君より受けた、非凡の性格は、氏をして現信用組合の創設に盡力せしめ、その長として奮勵努力してゐる。信用組合創設は十七年以前であるが、その十七年の間に高知縣繭絲販賣組合會長を二ヶ年兼任したことがある。精力滾々、郡畜産組合長、縣畜産聯合會副會長にも就任されてゐる。寡言篤實の人で、愛馬、飼育、田園、競馬の趣味を持つてゐる。

夫人は三和村杉本松太郎氏の長女で一男二女がある。

田中寅次氏

明治八年の創業で土佐最古の石灰製造販賣業、五台山村の田中寅次商店（先代は氏藏氏）は五台山東孕に第三工場、稻生に第一、二工場を持ち従業者八十餘名石灰竈十七釜、更に増設計畫の途上にある隆盛ぶりだが初めから順調では無かつたのである。即ち寅次氏は幼少にして丁稚奉公から日傭仲仕の仕事から練り上げ父業を繼いだ、最初は肥料灰と建築用を主とし地元方面から幡多、高岡兩郡に手を伸ばし販路開拓と宣傳、使用指導に乗り出し辛酸をなめて漸次發展し工業の發達に伴ひ逐次販路を拓いたのである。

田中氏の石灰は八田で有名、朝鮮總督府改築の際特に指命納入、台灣、朝鮮、北海道及内地の建築材料店、逓信省營繕課の全國に至る建築に指命納入中、製糖用としては明治製糖へも納品し工業用には北海、東洋、保土谷、日本の各ソーダ會社へも納入してゐる。そのため新潟丸（三百トン）を所有した日本丸、佳吉丸を傭船とし、二三等の灰の處分は昭和二、三年から北海道、煉炭用の灰は大阪方面へ出し、横濱、中國、四國、紀州、其他も同店の灰の販路だ。二十六歳の時田中氏所有船大

正丸（二百トン級）が浦賀沖で坐礁したが引揚に一万餘圓を要すると聞き建造費五万圓の船を千八百圓で賣つて歸つた令息辰三郎氏の淡白さ、其英斷と太ッ腹は東京方面で信用を得る基となつた。辰三郎氏は事業に堅實で熟慮斷行の人、粗服で少しの飾り氣もない。石灰機の研究時代の如きは「藝者を受け出すと思つてくれ」とて父から二回に三千餘圓を貰ひ、これで五年間研究し成功した。實に商才に富んだ穩健の活動家で便々と在學するはまごころこしと市商を中途退學し實地に第一線へ立ち台灣製糖へ販路を拓いたり、石灰の原石山に索道をつけたり（その研究に北濱索道會社へ行く）あつばれ新進の實業家ぶりだ。田中氏方の索道は稻生村下田石灰山では最初である。一方に東部實業界の巨頭磯村晋介氏（得意先）の信頼を得原石山（事業家の所有でない分）を七万餘圓で買收の資金を出して貰つたりした。

田中寅次氏は本年六十六歳、その公職は土佐石灰同業組合長を一期、副を二期（現在も副長）前村議等で夫人は大篠島日氏の出、長男辰三郎氏の夫人は五台山信用組合長（元村長）島崎鹿太郎氏の令妹龜子さん、二男は兵庫縣の日本製蠟會社々員として大阪駐在主任。辰三郎氏の長男は親族宇佐の酒造家古田家の再興に活動中、長女美代子（みよ）さんは昨年土佐女學校を出、生花、茶、琴に堪能。

田所孝氏

靴でも足袋でも穿いて見んと適合するか否やが判らない。人間の自個といふものは唯居つては判るものでない。芳澤謙吉氏は文科から外交官となり、文士から荒木貞夫氏は大將となり、木村久壽彌太氏は三菱理事となつた。この例は田所孝氏にも實現さる。氏は香美郡岩村出身、隣村香美郡山田町の醫師。大正十四年工業學校卒業の秀才である。同郷山本忠興博士の世話で、芝浦製作所變電器工場に入り、天性考案力の強い氏は、太田黒幹雄、大竹武一氏等重役に引立てられ累進したが三年後醫師として身を立てんと大阪高等醫學專門學校に入學卒業、昭和十二年五月現在の場所に開業。濃厚寡言の人である。工業學校在學中、自動車運轉手の免許を受けてゐるが、開校以來の嚆矢といふ。柔道、相撲、圍碁、魚釣の趣味を持てるも多忙で出來ない。一男あり。

吉川清澂氏

舊名は鹿太郎氏(と)、長岡郡三和村の出身である。城東中學を四年退學。當時は政黨の鬭争時代

で、學生もその渦中に躍り勉強の氣にならない。退學後は農事に従事し、適齡に達し松山聯隊に入隊、幼年學校志願の意志で勉強するも暇がないので工科學校入學を志望し、入學試験に合格、木工科を卒業。近衛砲兵隊に一ヶ年更に辯護士を志して夜間大學法科に刻苦修學中、片眼の明を失ひ遂に退學された。東京砲兵工廠技手勤務十五ヶ年。芝浦工作所に入りしも自らの意志に合はないので退所した。中學時代の同級生濱口雄幸、瀬戸寅記、溝淵進馬等諸氏の華かな成功を想ふと、政黨熱の爲め半途退學を餘儀なくされた自己の失敗に對する無量感は抑へ難く、つく／＼と青年指導教育の大必要を考へられ、陸軍在職中小學校卒業の岡山縣人河野甲一郎氏が、貧困のため日給二十錢の給仕生活に汲々せるのを氣の毒がり、自邸で世話し、夜學に通はせる中、砲兵工廠の夜警となつたので、晝間の學校通ひに轉せしめた。それから河野氏は中學校三年に編入され、さうして日本大學法科を卒業。吉川氏邸に起居四ヶ年。適齡入隊海軍主計候補生となり、少尉任官。大尉時代に吉川氏令嬢節子さんの世話をしたいと、報恩の衷情を傾けしも、吉川氏は斷つた。それから河野氏は吳海軍廣工廠主計長に昇進。その時來高、吉川氏を訪はれ、親子の情まことに掬すべきものがあつた。海軍大佐に昇進、退官後藤水田造船所東京主任となり現在に及んでゐる。その河野氏の成功に力を得て、東京砲兵工廠退官後の吉川氏は本縣出身當時文部次官田所美治氏命名の學生保全會を起し、苦學生養成に努力すべく、活動を極めたるも、資本の關係で實現を期し得なかつた。大阪砲兵工廠勤

務先輩の配慮で、同工廠勤務十五ケ年。大正十二年陸軍技師となり、瑞寶章を授けられ、また日獨戦争の功により旭日章を授けられてゐる。氣骨稜々、工科學校出に技師なく、洋行しなければ技師となれない状態を慨して改進黨に猛進、つひに成功を見るに至つた。

一村の長老として難治と言はれた村を改善し、村議を三期、農業倉庫の建築監督にも當られた。凡鱗常介にあらざる氏の人物はまことに薰んばしく世に光りあり。趣味は釣魚と小鳥。長女に養子を迎へしも共に死亡。愛孫あり小學四年。二女節子さん(三)は縣立第一高女を経て東京女子専門學校を本年卒業。修學中は河野氏の宅から通學。氏は恩人への百分一の恩返しにと、大切に世話されたとのこと。

池田利三郎氏

吾川郡御壘瀬村漁業界の先輩池田利三郎氏は居村瀬戸鹿太郎氏の二男として明治十三年生る。明治三十三年池田家の養子となる。家は先代から雜貨商で現在は質屋を兼營してゐる。漁業を初めたのは明治四十年頃打瀬網時代からやり極めて順調で日下は組合組織で年額十二三万圓の漁獲を上げてゐる。公職としては、大正三年村長三谷氏と共に北部漁業組合を拵へるに盡力し、その創立以來

理事を勤めた、村議は昭和四年より現在迄勤め、常設委員、學務委員である。氏は寡言温厚圓滿玉の如き人である。

家庭には一男三女あり、長男利喜(七)君は城東中學在學中、長女豊子さん(五)は土佐高女卒業後東京九段坂の和洋女子専門學校を卒業し、佐川青年學校で教師をつとめてゐたが、市内越前町横山家へ近く縁づくことになつてゐる。生花は未生流で堪能ときく。二女稻美さん(五)は本年土佐高女を卒へ池の坊の生花を修めてゐる。三女朝子さんは小學在學中である。家庭圓滿にして家運の繁榮美望に値する。

土居駒吉氏

大町桂月は身体虚弱のため軍人志望を中止してゐる。たとひ軍人たること能はざるも、その剛毅毅魄は失はれるものではない。文士桂月は剛毅毅魄の文章報國家として、文學界の一方に旗を擧げたのである。土居駒吉氏はそういふ型人として長岡郡大津村々長となる。當年四十三歳。氏は島村元帥永野大將、坂本政右衛門中將等を出せる軍人育英の海南中學校を卒業。先輩の偉勳を慕ふて陸士希望であつたが、健康勝れないため中止を餘儀なくされ、村収入役を経て信用組合に入った。剛毅正

實の性格はそこに遺憾なく發露して執務流るゝが如く、まことに鮮やかなものである。昭和十一年一月、再び村長となり、一村に赫々とかゞやいてゐる。二女あり。淑子さん艶子さんは同じく縣立第二高女在學。外一男あり。

小牧德身氏

明治十三年二月二十四日安藝郡土居村に生る。温厚の人物である。岡山醫專（現大學）卒業。村會議員に當選二回。天外の雅號で俳句狂歌の名人である。夫人は市小高坂西本久壽龜氏の令妹。長男順一（元）君は名古屋藥專卒業。二男は小學在學。長女満里子さん（元）は縣立第一高女卒業、長岡郡野田村出身。西飛行機製作所技師武田信博氏に嫁し、二女富士子さん（元）は縣立第一高女卒業、香美郡檳山村出身。安藝郡羽根村醫師岡宗待郎氏に嫁し、三女美枝子さん（元）は縣立第一高女本年卒業。

野島吉喜氏

森然百雷の美良布瀧、神靈赫々の美良布神社、滔々と渦巻く物部川、帽と肉一片を残して日清役

の花と散つた、大石馨海軍少尉。その天然、神、人の特徴を誇る香美郡美良布村は、明治三十年一月十七日に、野島吉喜氏を出現せしめた。天地秀靈の氣に満つる美良布の環境は氏を何ぞ凡物たらしめん。世に宗教の商人、珍異とするに足らず。算盤をはじきながら哲學に目を注ぐといふ人は、ちよつと見當り難い。市商第十四回卒業の氏は、二十三歳の時父業の雜貨商を繼承されたが、三十八歳當時の病氣が動機となつて哲學を研究し、宗教信仰の境に入り、自己修養に汲々されてゐる。その靈道による大患の治療には不思議なものがあるといはれてゐる。「敵を作らん」は氏のモットーである。三十三歳の時廢酒。村議當選二回。現在商工會副會長。昭和十二年二月、日本生命保險代理店を開業し活動してゐる。趣味は多い。夫人は市種崎町濱宇津氏の令姉、高坂女學校出身。四女一男あり。教育に専念してゐる。

原 一 氏

深山大澤に龍蛇を産す。山と水の間に出現せるもの、精力は激濶たるものがある。滾々として流れる物部川、峨々として重疊せる千山萬嶽。氏は明治廿一年十一月十二日、片地村に生る。城東中學を経て國立西ヶ原蠶絲學校（現在東京高等蠶絲專門學校）卒業。凡鱗常介にあらざる卓然の才魂

は人の阿蒙たらず、明治四十五年、廿四五歳の身を以て片地製糸株式會社を創立し現業長に就任。大正七年、四國製糸株式會社と變更されるや社長に就任され、關西實業界の立物加島安次郎、その後任者今西林三郎兩氏を助け大いに活躍された。そして四國製糸會社の買収で鏡繭糸（組合製糸工場）起るや、理事更に相談役となつた。昭和六年片地村信用販賣購買利用組合長となる。なほ縣信用販賣購買聯合會幹事、片地村教育會長、村會議員、三十一歳郡會議員に當選といふ活動家である。香美郡民政黨の重鎮である。狩獵と釣魚を趣味としてゐる。夫人は長岡村岩貞義春氏の令姉。養子致郎氏（三）は原唯次郎氏の二男で、縣耕地課勤務中應召入隊。夫人は後免町酒造家北岡萬次氏の長女、土佐高女卒業。

高村 梧樓 氏

長岡郡といへば紀貫之にゆかりの深い地で、溝淵進馬氏の如き文教の俊物が大篠村から出現したのも、まことに偶然でない。國分川は深々として醇雅な色を浮べ、白髮山は海拔約五千尺の高峰なれど、これを望めば麗雅悠々、峻嚴頑剛の厭味を現はさない。高村梧樓氏はさういふ環境の長岡郡大津村に生る。當年四十四歳。先代鹿吉氏は明治二十五年師範學校卒業、大津校准教員を振出しに

二十六年訓導、二十九年校長、また郡教育會長を多年勤めた育英事業家である。梧樓氏は早稻田大學商科に學びしも病氣退學、郷里信用組合に奉職し今は退かれてゐる。磊落な交際家である。釣と狩獵を趣味としてゐる。

横田 光太郎 氏

佐古村は龍河洞で名を知られてゐるが尙蠶業の村として著名である。其蠶業の恩人横田氏を忘れてはならない。氏は明治九年一月、佐古村父養寺に生る。二十歳の時親族の養蠶を見て發奮し、農林學校蠶蠶專科に入り卒業、三十一年より大正七八年頃まで自宅で蠶種製造を營む（在來種を主とし）當時の養蠶界は幼稚なもので氏の桑畑を見て村民は薪を植えると嘲笑を浴びせたものだが自信ある氏は優良蠶種配給に務めた結果大正二十三年、十四五年より昭和四五年頃迄の村収入は二十五萬圓に上り大正十四年の産繭高は廿二萬四千圓で横山村に次いで郡で第二位の産額を占め昭和七八年の頃廢業、更に組合製糸創設の必要を感じ昭和二年有限責任繭糸販賣組合香南社を創立、組合長となり、専務に杉村義隆氏就任。佐古、野市、明治、片地方面の養蠶家を組合員とした。（組合製絲は仲介人關係で價格が下落せぬ）而して同社を昭和四年辭退して家居、同七年村長に就任した。夫人は片

地村下ノ島門脇氏の女、長男一男君(三)は野市高等小學卒業入隊、除隊後は農に従事す。二男功君(二)は工業學校卒、新居濱住友會社電氣科に勤務、三男浩君(七)は農林學校五年在學、四男玄君(四)は高等小學一年在學、趣味は仕事である。

秦親敏氏

秦氏に鈍物はない。萬里長城の始皇帝、四國一統の元親、政友會の逸材秦豊助、陸軍中將の秦稚尙等々。豪放磊落の秦親敏氏何ぞ怪むに足らんやである。その家は長會我部時代からの郷士で醫師六代目の家である。

氏は大西郷が城山の露と消へてより三年日の明治十三年十一月七日、香美郡片地村影山に呱呱の聲を挙げ、その地に醫を開業してゐる。人の心は一様でない。人心の異なる面の如しとかや。醫者の子に文學士あり、元帥の子に生物學者あり、維新元勳の子に歌人あり等々。中には同じく醫者、同じく軍人等の父子兄弟なきにあらず。が、秦親敏氏の如き一家一族擧つての醫は頗る珍異である。その兄弟三人とも大阪府立醫學校出(現在の醫大)の醫師である。さうして長男親明氏(五)は土佐中學を経て岡山醫大卒業。次男親憲氏(三)は土佐中學出の秀才である。長女登志子さんは土佐高女を

卒業、東京居住の醫學博士長野氏に嫁してある。

澤谷勝喜氏

世の中に最も尊いものは精神であると、ナポレオンが言つた。金銀財寶何ものぞ、最も大切なものは人の心である。心は即ち財産である。西郷南洲は子孫の爲めに美田を買はなかつた。橋下の孤冠りが天下を取り、肴行商が富豪男爵となるのも、唯心一つである。大厦の傾くを挽回するのも、心の楨杵である。鐵より堅き不退轉の金剛力を揮つて、落ち沈める祖父の榮華を回復せる俊豪の例は多々ある。その一人に澤谷勝喜氏父子がある。

氏は明治四十一年三月十日、高知市江ノ口生れの實業家である。祖父の代まで、黒金屋の家號で隆々と金物商を営んだが、祖父の失敗から父に伴はれて香美郡檜山村大板町に來つたは今より廿二三年前のこと、裸一貫の父は、製紙原料の楮草、紙、其他山林産物の営業に奮勵努力の結果、多少の蓄財を得るに至り、八年前に土佐銀行出張所跡の宏壯な家を買はれた。勝喜氏は市商修學中、父よりの話に感激、奮然家業繼續の決心を起して退學。二十五歳で父を喪ひ、それより熱慮勵行、ます／＼家業を發展せしめてゐる。なほ町青年團の幹部として團長を勤め、第一回滿鮮視察團に選

ばれたこともある。(各郡一名)信用組合大板總代。雄辯溫厚の人である。趣味は事業。慈母愛尾さん(五)は貧困の家を興すに當り内助の効が多かつた。夫人は同町公文龜喜氏二女。長男嘉男君は小學校在學、外一男一女がある。

岡村 勇 氏

香美郡の大板町に高ノ板山あり、在所村に五在所山あり、曉霞村に茂ヶ森あり。茂ヶ森は各中等學校の指定ハイキング所で、麓の鏡岩は約二間四方、傳説と遺跡で有名な所。岡村勇氏は、明治十八年三月二日、その曉霞村西又部落に生る、現曉霞村長である。飛鳥川昨日の淵は今日の淵。二歳の時賢父を喪ひ、代々傳來の資産を他人に取られる不運に陥つた。小學校を出ると、母の郷里愛媛縣に行き、そこで小學補習科卒業。明治三十八年佐世保海兵團に入團。四十二年除隊歸縣し現在の曉霞村に居を構へ翌年より農業に従事し、大正九年愛媛縣巡查拜命し昭和六年四月に辭職、十一年助役に推され、十二年村長となる。由來軍人上り警察官の多くは凡鱗常介の類でないが、氏もその一人に洩れず、愛媛縣巡查勤務時代には、愛媛縣消防義會より消防功勞者として五等功勞賞を授與され、また巡查精勤証書を受け、警察部長より模範巡查章を授與され、大正十年より昭和五年の間、受賞

十回に達してゐる。實着な努力家である。趣味は劍道と田園生活。劍道は二段の腕前がある。夫人は天坪村西岡音次郎氏長女。長男茂君(七)は本年縣立農業學校卒業。二男は小學校在學。長女は高等小學校在學。

山本楠樹氏

明治二十八年一月二十三日、高知市細工町に生る。縣立一中卒業後、大阪藥學專門學校入學、大正九年五月卒業後、母校助手勤務約一ケ年。大正十年來以降約七ケ年間、高知病院藥局主任勤務。その間約一ケ年海南學校教諭兼務。高知病院退職後約七年間市商教諭勤務。退職は約六年前である。五六年前に嚴父楠太郎氏の死去されるや、その後を繼ぎ、新市町魚ノ棚通りで藥局經營、今日に至つてゐる。溫厚實着、趣味は茶と運動。茶は特に學生時代からのことである。流儀は千家表流。夫人千代子さんは土佐郡一宮村薊野松岡千太郎氏の長女で、生花に堪能。一男二女あり。長男雅一郎君は第二小學校六年在學。長女雅子さんは第二小學校三年在學。二女倫子さんは幼稚園。

和田吉太郎氏

論語讀みの論語知らずといつて、昔は机上一式の勉強を戒めた。濼澤榮一子は少年時代に街道を歩むく、論語を讀みつゝ溝に落ちて正月の晴れ衣を泥汚れにしたことがある。乃木將軍は畑をうちつゝ讀書し、吉田松陰は米を搗きながら勉強した。和田吉太郎氏もその類の人で、小學校を出ると農業に従事しながら獨學に勇んでゐる。長岡郡長岡村の産、當年六十歳、雛鶴、既に群鷄を逸し、翼を九泉に向ける。

氏は二十歳の時村役場に奉職七ケ年、それから稅務官として一ケ年半、村長三ケ年、三十二歳で高知銀行に入り、後免支店、本店詰を経て、愛媛縣宇和島支店開設によりその次席(支店長格)となつた。退職後、財界巨頭の高木、後藤、藤田氏が香川縣善通寺藤岡銀行を買收せるに際して入社、高木氏の専務補佐役として庶務部長から整理部長となり、奮勵力行、整理後の資本金を五十万圓に實現せしめ、さして徳島關西貯蓄銀行開店と同時に庶務部長營業部長として敏腕を揮はれ、其發展を見て辭職し、郷里に宏莊な邸宅を建築、悠々自適されたが、浩然の氣魄は氏をして退隱生活たらしめず、獨逸人の考案であるセメント瓦の將來性あるに着眼して、大正九年高知市に高知セメント

有安榮次氏

瓦工場を經營された。後親族に讓つて自宅に居る中、村議郡議に推舉され、昭和七年村長就任と同時に發生せる信用組合費消問題を、快刀亂麻を斷つが如くに解決し、なほ渦巻く反對の波瀾裡に、養蠶不振に依る農村救済策としての西瓜栽培計劃を實現せしめ、昭和十一年五町歩、十二年十五町歩、十三年三十三町歩、十四年には理想計劃通りの五十町歩に進展の狀勢であるが形勢を觀望して昭和十年年辭任、現在は山田堰土功組會長である、成功して成功に拘しない芳香馥郁の人物である。令息齊(ヒトシ)氏は東京帝大經濟科卒業、不動銀行本店に勤務してゐる。

香美郡夜須郵便局長で町商工會長を兼ねる有安榮次氏(明治十七年十二月十一日生)は同地坪井の出身。夜須といへば軍人、實業家、藝術家、教育家、官吏と錚々たる人物の出でゐる所で、縣下屈指の資産家も多く、夜須の地位は東海岸に重きを成し實業方面に近年特に活氣がある。その中に卓然、附近の各界をリードして來た長老、といつても年齢は現に五十四の働き盛りだが少壯から手腕徳望を以つて地元を抑へて來たのが有安氏だ。氏は香南人材の淵藪たる城山高小の出で、又人物輩出した高知市商第二回の卒業生である。學校時代に醬油製造並びに吳服を業とする城武家の養

子となり卒業後その家業に就いたが後再び有安姓を名乗るに至つた。明治四十二年夜須郵便局長に就任、軍籍は一年志願兵として善通寺砲兵十一聯隊に入隊して少尉に昇進、歸郷後四十四年在郷軍人分會長となつた。そして大正九年には氏の最も華やかなりし時代が開けた。

曰く、夜須織物會社々長(大正九年十一月廿二日)曰く、土佐東部自動車會社々長(同年同月廿五日)曰く夜須漁業會社々長(同年同月三十日)と、僅か一週間ばかりの間に三つの社長が舞ひ込んだ、洵に飛ぶ鳥をも落とす勢ひ、やがて歐州戦亂後の財界不況が都鄙を通じて旋風の如く慘倒相踵いたが、有事嶄然頭角を抜いて禍害を最小に止め得たのは氏の力である。翌年六月一日自動車會社々長を辞任したその日、夜須村會議員に選舉され、十四年五月廿八日村議再選、昭和二年夜須信用組合監事當選、同年六月勳八等に叙せられ瑞寶章を賜ひ(現に正七位勳七等)三年一月廿三日信用組合監事再選六年六月商工會會長、九年十二月廿二日再選(現在に及ぶ)十年五月廿八日高知縣三等局長會副會長に擧げられた。

近年の氏の生活はまた精神的に偉大である。それは「生長の家」の重鎮として赤岡近邊から嶺北にかけてまで熱烈な講演をして人々を感奮興起せしめつゝあり、自らも修養の道に倦むことを知らぬことである。口先だけの巡回演説でない、身を以て範を示す尊い体験の持主だからである。氏の身體は實に現代の奇蹟として醫界で問題となり世間から驚異視されてゐる、といふのは物質醫學

のため先年胃痛と診斷され、大阪の醫師の巨頭からも「駄目と宣告された氏が、胸腹の間に己が手を置いても判る程の大きい塊を持ちながら何等不快感も生理的異状も無く平然として山野を駆けずり廻つて教事、公事に活動してゐるからである。背ぎつた血色のよい顔、溢るゝ精力、愉快な談笑些の煩惱無く朝起きるから夜寝るまでニコノの上機嫌だ。氏はいふ「胃痛て？僕はそんなものは念頭に無いよ。風邪でも自分の欲するまゝに入浴する。目が醒めるとアハハと笑ふから家族中も笑ひに満ち和氣霽々、神と天地の恵みに毎日一感一謝しつゝ悠々満然、それが全部だ」と、斯ういふ人を戴く局内も明朗そのもの。局員も幸福だ。家庭は長男秀三郎氏は帝大卒、高文試験にパスしたが徳島へ入中不幸病歿、長女は女學校在學中に逝去、二女は逝ける長男の遺友たる阪神電車の西山馨氏に嫁し芦屋にあり、三女に養子盛重氏(關大出)を迎へ、氏は現に和知部隊に屬し出征中で、その間に一男(榮次氏にとり孫)あり、芦屋にも孫(産子)二人がある。尙ほ榮次氏の夫人(氏の養子先)は健在、若々しい朗かな貞淑の賢夫人である。

小笠原廣志氏

楠病院創業の元勳は補正任氏であるが、その時分の土佐は汽車もなく、電車もなく、バス自動車

もない不便を極め、道路も今日の如き四通八達でなかつた。或時、吾川郡御懸瀬村の患者を往診せねばならぬとて、楠氏は常盤町稻荷神社前からヒラダ船に乗つて行つた。診了してそのヒラダ船で稻荷前へ歸ると、豫め準備の馬が待つてゐる。氏はその馬に乗つて高岡郡佐川の患者の家に急馳し歸院するや否やまた診察に従事するといふ精敢ぶりである。氏の嗜好は乗馬である。人間の精敢は乗馬に限らず、弓にも漲る。弓の人の意氣は實に旺盛なもので、弓術と乗馬。この二つは人間の氣魄を潑刺たらしめる姉妹篇だらう。

その弓術を趣味に持たれる小等原廣志氏は、長岡郡長岡村西山の産である。京都醫專を卒業されたのは大正十一年。現地香美郡立田村に開業されてゐる。人の心は傾けば亂れる。聖賢は中庸を教へた。寛嚴、剛柔、硬軟、そのよろしきを得るところに人の心の眞善美が發揚する。弓術趣味の氏は徒らに精敢に流れず、その頭腦明晰、溫厚篤實の人で、よく性格の中心が取れてゐる。斯の父にして斯の子あり。長男淳二君(二七)は秀才教育の土佐中學に在學、秀才の譽れを輝かしてゐる。他日一代飛躍の胎龍は、今既にその胸底に發育されつゝある。二男長女もまた、それに連続して香ばしく小學に在學されてゐる。

X

X

X

秦泉寺愧龜氏

猛獸の敵を屠らんとするや耳を垂れ、鷲鳥の將に搏たんとするや翼を收める。韓信に股滑りあり太閤に橋下の孤冠りあり、張良に黄石公の卷物あり。昔、兵學校入學志望のある青年を嘲つて、進んで海軍大將たる能はずんば退いて小學教員たれと言つたものがある。氏の如きは何んぞ進んで農動赫々の人たる能はずんや、退いて弘岡高等小學校教員となつた。落伍兒ならんやである。農村出の小學教員。それは飛躍の翼を收めたのに過ぎない。

明治十九年茫々として一望沃野限りなき香美郡立田村上陸内に生れた氏の農魂は天成である。氏が小學教員時代は束の間、それから安藝郡農會技手を経て朝鮮に招かれ道營晋州種苗場技手となつた。時に明治四十五年三月、氏が二十七歳の時である。蛟龍は池中のものならず。氏は碌々として稻を造り蠶を養ふ如き隠居者にあらず。どこまでも積極的に進出、その行動端睨すべからざるものがある。當時は日韓合併間のない頃で、道路などは全然開拓されてゐない環境を物ともせず鮮農相手に猛奮健闘四年。靈山地方金融組合技手、郡農會技手等を歴任して土地會社を創立、取締役となり、或は金融、或は農營等多方面に發展されたが、鐵道全通してから一躍巨利を占め、釜山に六年ほど暮ら

し、歸縣されたのは一昨年である。斯業の風雲兒、その半生の意氣高し。趣味は田園と謠曲。長男健男君(三)は東京農科大學。二男圭君(二)は小學校、長女時さん(七)は縣立第一高女在學。

竹村茂義氏

機敏は實業家の天分である。が、すぐれた實業家になると、必ず剛腹が機敏へ伸入りしてゐる。昔上野戦争の官軍司令部へ縛られて行つて臼刃を向けられてビクともしなかつた大倉喜八郎男の如き豪傑がある。剛腹が爪牙を出すと、その實業氣質を政治方面にも伸ばすこともある。政治は剛腹の舞台である。政治に羽翼をひろげる實業家に低頭平身消極に沈めるやうなものはない。

竹村吉太郎氏といへば政界實業界兩方面に花を咲かした逸材だったが、その性格の剛腹を受けて氏を父君に持つ竹村茂義氏も亦剛腹謹直の人である。長岡郡介良に生る。介良の名所として岩屋觀音あり。觀音詣では人の心を緊肅せしめる。特に岩屋觀音といへば匹夫も勇に懦夫も立つといふ氣分になる。淺草の觀音様が地震に泰然として何の異状もなかつたのは、まことに勇ましいものである。茂義氏の剛腹にして謹直な性格は岩屋觀音の宿りでもあらう。高知銀行に入つたのは大正五年敏腕を揮ひて業績揚り、後免支店長の現在に及んでゐる。謠曲と園碁を趣味とされるところに、剛

腹に流れざる芳香の雅徳がある。尙令弟は四國銀行本店貸付課長の要職にあり。

村上正豊氏

吉野川そのみな上を尋ねれば、葎の雫、萩の下露、といつても深山幽谷のそれでなければ、何んでもない。香美郡葎生の奥は巍々冲天の山ばかり。谷といへば猿もためらふ千仞の谷底、岩に激し巖に碎けてゐる。その環境に水源を發する物部川の滔々たる激流はもの凄い。その隣接地の香美郡野市町西南戦争直後の明治十一年五月三十日に生れた村上正豊氏が、高知縣農事試験場技手當時に時の場長小川三策氏排斥問題の犠牲となつたのは怪むに足らんやである。大凡そ物平かを得ざれば鳴る。物部川は激する、激すれば轟々雷の響あり。氏もまた激して鳴つた。鳴つて直免となり奮然政黨生活に轉向された。

氏は縣立農業學校及び東京高等蠶絲學校別科を卒へて、縣蠶種検査員を振出しに、奈良縣南葛城郡農學教諭、千葉縣夷隅郡農事教師、三重縣農事試験場技手を経て高知縣農事試験場技手に及んでゐるが、山來農學出の政治家は稀有でない。札幌農科出の新渡戸博士或は志賀重昂氏の如き、土佐では政友會の田村實氏の如き人がある。田村氏の縣立農業學校出は周知の事實だらう。なほ縣立農

學校校長から政黨生活に轉向、政友會高知支部の幹部を占めた辻重忠氏の如き人物もある。村上氏が政黨生活に入つて、野市町長一期、縣會議員一期は何も異例でないが、然るにそれから元へ復つて高知製糸に入り、後片倉製糸に轉じ、片倉保險出張所長となり、四五年前退職。水は割れても末に遭はんとぞ思ふ。一時は割れる氏の農事生活が、復元して一生農事の人生を貫くところは、いかにもその農事天分の存在を明かにしてゐる。それだけ、群凡の及び難き一種特異の芳香が四邊を拂つてゐる。資性恬淡圓滿、才機縱橫、細節に拘泥しない好人物である。趣味は酒、盆栽、生花、俳句、碁等。

夫人竹治子さんとの間に五男二女あり。長男正駿君は神戸紡機株式會社勤務。次男正虎君は南洋興發會社勤務、サイパン島に在り。三男正保君は盲啞學校勤務。五男旭君は九州八幡製鐵所勤務。いづれも斯の父、斯の子の實業肌才物である。五男武君は市高等小學在學。長女佐智子さんは神戸の長兄君の宅に居る。二女妙子さんは土佐高女三年在學。

林田備德氏

かつて縣下政友の重鎮として鳴らした故林田茂稔氏の令息備德氏は明治廿四年生、縣立第二中學

卒業後早大商科に入った、彼の堀見潛鰐、上田紫朗氏（政治科）らとは同窓である。大正六年早大を卒業するや直ちに大鈴木に入り大連、滿州、朝鮮等に十四五ヶ年活躍、臺灣の高雄出張所長から大阪支店詰となつたが間もなく鈴木商店没落のため、没落後約一ヶ年でやめ、輝かしい履歴を提げて昭和五年歸郷した。

たゞさへ日本一小さい御墨瀬村である、そこへ植民地智識、東洋通、大陸的經濟家の氏、二十四五貫の堂々たる巨軀をもつての歸村だ、一見して村にアダタヌやうに見へたが備德氏は謙虛、少しも傲らず村會（二期）に出で、學務委員となり村の文化開發、後進の指導につくし手練漁船へも三艘ぐらゐの出資し漁業のためつくしてゐる。林田家は元來村の漁師達の恩人と仰がれてゐるが備德氏はこの聲望なり家業なりを先代から立派に繼承して、また埋立計畫變更の際の如きは内務省へ交渉に行つたり活動止まず、たゞ政界に對しては區々の小利害をいはず、東方會から入黨をすゝめられるのに身を委すらしい。先代以上の大局的政治家になるか。趣味は運動全般と將棋、柔道は三段（廿五年前）相撲は學生選手として鳴らしたもので土佐素人相撲に入つても三役を下らぬ。東京の學生相撲は實に氏らが拵へたものである。

夫人は同村中村收入役の令姉、長男茂夫君は城東中の二年、二男は尋常六年、令弟作（ハジメ）氏は早大理工科出身、大阪のドイツ商會なるデラカンダ商會に主任として二十年位勤めてゐる。

本年四十四歳。

公文利吉氏

吾川郡御壘瀬村公文利吉氏は同村漁業界の恩人であり成功者である。人物頗る堅實温厚。氏は明治四年安藝町に生る。家は東町横町で菓子商を営んでゐたが自由、官権兩黨の政争激甚、氏の家は官権黨として迫害を受けたので氏が廿歳の時一家擧げて離郷、高知に出で東種崎町で菓子商を開き彼の有名な「大新」を向うに廻し營業したが家主がはからずも自由黨のバリノで再び壓迫されそれから市中を轉々菓子商をやめ、利吉氏は高知公園の北側にあつた弘田牧業株式會社につとめその集金をしたりしてつぶさに苦勞をなめ、黨禍をしみぐと感したが本町、水道を経て明治卅九年夫人の郷里御壘瀬村へ落ちつき雜貨商を營む一方大正十一年に漁業を始めたものである。

長男宏氏（明治卅八年生）は市商を出て丸一會社に入り、日本紙業東京支店に十年勤務、現在市小高坂西町に住み、同じ西町に住む日本紙業の立物國吉貞吉氏の長女を夫人とし、女子三人あり、今は父君利吉氏を社長とする市農人町の丸油（親會社は六社協定の一たる丸善石油）を背負ふて活動中、また次男學（サトル）氏は市春野町居住、三和銀行に勤め本年卅二歳、その夫人は諸木村田原

兼吾氏の二女で一女あり。

楠瀬慶吉氏

「土佐の穀倉」香長平野は、優れた人文と地の利相俟つて農具につき縣下は勿論、全國的に幾多誇るべき研究發達を見た。わけても香北の金物に對し南、長岡郡の誇りは三和村の農機である。種籾には稻生の衣笠が出で尙ほ續々改良され、鍬は香北、仕上げは三和、これで米作は三拍子揃ふ譯。

後免を距る南二十町、清朗八棟の大工場、協和農機株式會社（資本金四十五万圓）の専務取締役社長楠瀬慶吉氏は此の三和村里改田の人、明治卅年九月五日生、古來世界の大發明家が孰れも高等學府に學ばず貧苦の搖籃の裡に研究したと同様、楠瀬氏も小學卒業だけだ。而も五歳の時父君を失つてゐる。小學を了へ田内鹿彌氏（現辯護士）に六年程教導を受け、最初教育界で身を立てる志望だったが貧のため方向を轉じ實業家たらんとし、それも祖父、父と大工で靱摺機研究といふ傳統的な發明の家に人となつた慶吉氏は父祖の遺志を紹いでこれを大成すべく、大正十年頃日本的に有名な靱摺機の元祖香美郡田村の山本松次氏方へ、一職工に行つた。現在一緒に事業してゐる澤本龜稔氏は實にその時代の同僚であつた。二人は共に致々と研究したが昭和五年に山本氏が渡鮮したので楠瀬氏も

同店を辭し只管糶摺機の改善工夫に没頭し、先づ實用新案十數件の特許を受けるに成功、その販路を中國方面に求むべく視察に行き、相當の見込と自信を得たが小成に安んぜず、更に研究に精進して三十余件の特許を得、愈々昭和五年合資會社土佐農機商會を拵へその代表社員となり、種々の農機を作つたが、就中糶摺機「ツバメ」は農村電化の風潮に乗つて縣内外へ飛ぶ様に賣れ、昭和七年、日本的に有名な發動機王大阪山岡の糶摺機の製作販賣を引受け絶大の信用を博し又昭和十年には土佐農機の糶摺機は農林省比較審査で最高甲位に入選（三月三日官報）した。斯くて實業家に見込まれて昭和十三年二月十四日に村卜廣三、林隆一、瀬川孝之助、内田兼太郎諸氏を取締役、山岡孫吉、加藤幾太郎諸氏を相談役、増崎平次郎（以上大阪側）澤本龜稔氏（土佐人）を監査役に、自らを社長とする現在の會社を設立、一躍大會社となり建坪五五〇坪の事務所外八棟の工場を新築、大々的に農機の製作に着手した。正に「土佐燕」の大飛躍である。

要するに楠瀬氏の發明的頭腦、不撓の研究、誠實の人格、加へて商才の賜。成功して驕らぬ氏は現に、祖父が研究し拵へて遺してある昔の糶摺機を大切に飾つて祖先の恩を謝し、自戒努力の鞭韃に資するといふ崇祖發奮、眞個の國民精神を模範的に發揮してゐる。趣味も生花、書道といふ日本精神涵養に即したるもの。夫人は同村濱田氏の三女。長女は産業組合聯合會長光富藤治氏に嫁し、二女久子（二〇）さんは本年高坂高女を出（趣味はお父さんその儘の流れを汲む生花、書道とは床しい）長

男は中學受験前。令弟清猪氏（三六）は釜山で手廣い株式會社森本精米所専務として活躍中である。まことに楠瀬氏一家の繁榮、前途ます／＼春海の洋々たる如きものがある。

池川兼吉氏

吾南の魚屋、吾土佐の魚屋といへば、あゝ土佐の鎌倉長濱の大料理店かと背かれる程古くから有名である。屋號の由は最初は小さい魚屋だつたからである。主人池川兼吉氏は明治十七年隣村御疊瀬村に生れ小學校を卒業しただけ、曾祖父、祖父は漁業問屋だつたが兼吉氏少年の頃は家貧なるが故に長濱で生魚行商をして營々努力し、今日の大を成した立志傳中の人である。即ち二十年前に現夫人と結婚後底曳も數艘（今は鮪漁船を一艘）持つて漁業に手を出すに至り、三年前からは二万圓で貨物船「利喜丸」を造つて順調に行つてゐる。料理店の方は最初は僅か九坪の地に三疊と四疊半といふささやかさといふ情けない有様であつたが、池川氏は唯温厚正直確實一方で賣出しごん／＼と店は擴がり千客萬來、昭和九年には松玉亭跡を引き繼いで現在は二百余坪雇人は常に十七八人になり昭和七年からは自動車部も置いてあるといふ隆盛さ、陰徳あれば陽報あり、積善の家に余慶ありとか、まことや池川氏は世に稀な善行の人である。氏が過去十數年間爲し來つた隠れたる善行は